平成22年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

2012.3

大阪市教育委員会
(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例　　言

1. 本報告書は平成22年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成23年度事業により作成した。
2. これらの調査は大阪市教育委員会が(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目次

都島区
榎並城跡伝承地発掘調査（EN10-1）報告書 ……1

中央区
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW10-2）報告書 ……7
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW10-9）報告書 ……13
大坂城跡発掘調査（OS10-2）報告書 ……17

天王寺区
堂ヶ芝廃寺発掘調査（DS10-1）報告書 ……23
上本町遺跡発掘調査（UH10-5）報告書 ……29

東淀川区
崇禅寺遺跡発掘調査（SZ10-1）報告書 ……41

旭区
森小路遺跡発掘調査（MS10-2）報告書 ……49

阿倍野区
阿倍野筋南遺跡発掘調査（AS10-1）報告書 ……59

住吉区
住吉行宮跡発掘調査（SN10-1）報告書 ……67

東住吉区
桑津遺跡発掘調査（KW10-1）報告書 ……75
桑津遺跡発掘調査（KW10-3）報告書 ……81
桑津遺跡発掘調査（KW10-5）報告書 ……89
難波大道跡発掘調査（ND10-1）報告書 ……95
住道寺跡発掘調査（SJ10-1）報告書 ……101

平野区
亀井遺跡発掘調査（KA10-1）報告書 ……109
鞍作廃寺発掘調査（KT10-1）報告書 ……115

都島区内代町一丁目における建設工事に伴う
榎並城跡伝承地発掘調査(EN10－１)報告書

調査個所	大阪市都島区内代町1丁目74－1・74－12
調査面積	12㎡
調査期間	平成22年4月28日～4月30日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

榎並城跡伝承地は、中世の榎並庄に築かれ数々の文献に登場する榎並城跡に係る埋蔵文化財包蔵地で、調査地南東170mの野江水神社付近を中心とする。本遺跡での本調査は同神社南東側のEN01－5次調査が唯一で、13～15世紀の溝、柱穴が検出された(図1)。今回の調査は、住宅建替えに伴う大阪市教育委員会の試掘の際、弥生時代の土器が発見されたことによる。調査地点は、弥生時代の集落跡である森小路遺跡からは南西約1.8kmである。

調査範囲は東西4m、南北3mで(図2)、報告で使用した方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±0mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層:灰色(5Y4/1)粗粒砂質シルト層で、層厚は15cmである。近代の作土で、上面にSK101がある。

第2層:灰オリーブ色(5Y4/2)シルト～極細粒砂の偽礫からなる地層で、層厚は35cmである。地層構成物は第4層を掘り上げたもので、江戸時代以降と推定される。

第3a層:黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質粘土～シルト層で、最大層厚28cmである。中世以前の可能性がある作土である。

第3b層:暗灰オリーブ色(5Y4/3)細粒砂質粘土～シルト層で、層厚は8cmである。

第3c層:黄灰色(2.5Y4/1)粘土層で、層厚は10cmである。下面が凹凸する。

第4層:灰色(7.5Y4/1)シルト層・極粗粒砂層からなる水成層で、層厚は40cm以上である。上面に

図1　調査地位置図

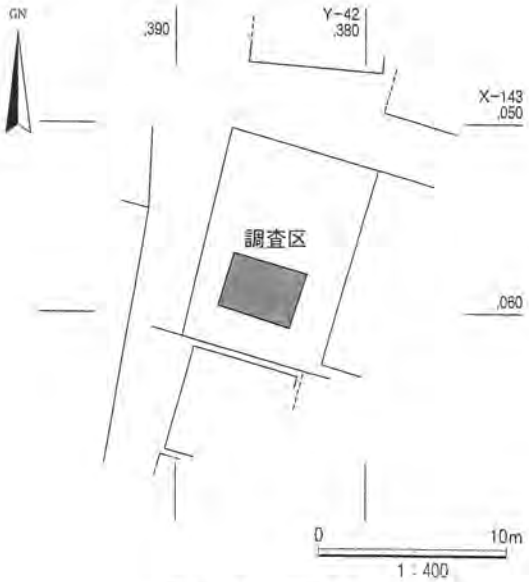


図2　調査区位置図

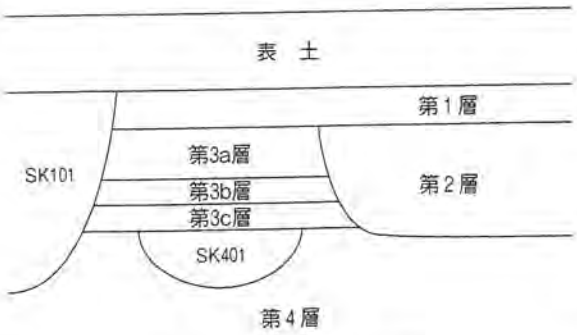


図3　地層と遺構の関係図

弥生時代のSK401がある。直径約1.5cm、長さ約20cmの斜めに入る巣穴と推定されるものが多数ある。

ii)遺構と遺物(図4・5)

SK401は東西約2m以上、南北約0.5m以上、深さ0.25mの弥生時代中期後葉の遺構である。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)粘土層で土器と炭を多く含む上層と、オリーブ黒色(5Y3/1)粘土層の下層からなる。試掘壙はSK401を掘り抜いていた。底面は平らでなく、壺2のようにここで潰れた状態で出土したものがある。SK401が何であるかはよくわからないが、SK401の存在と土器の出土状況から、第4層堆積によって陸化した調査地周辺に、弥生時代中期後葉に人が住んだのはまちがいない。

SK401からは壺1・2、鉢3、高杯4、甕5～7が出土した。1は上下に拡張して刻み目を付けた広口壺の口縁部で、穿孔がある。2は口頸部と底部を欠くが、約半周が残存する広口壺で、頸部に工具圧痕で飾る突帯がある。3は内側に肥厚する鉢の口縁部で、凹線を巡らす。4は、水平に広く張り出し、端面の上下に各1条の凹線文をもつ高杯の口縁部で、内面に突帯がある。5・6は端部をつまみ上げた甕の口縁部で、5の端面には2条の凹線がある。7は甕の底部である。以上の土器は総じて

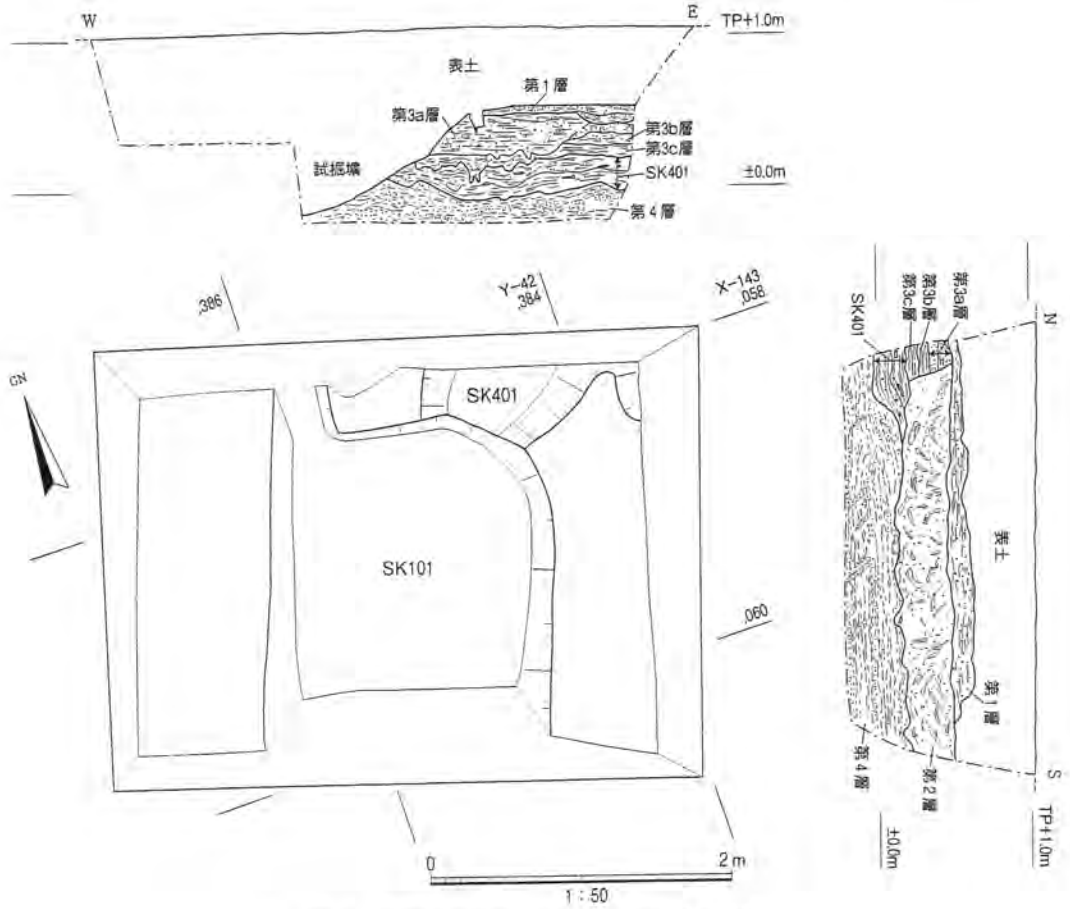


図4　遺構平面図および北・東壁地層断面図

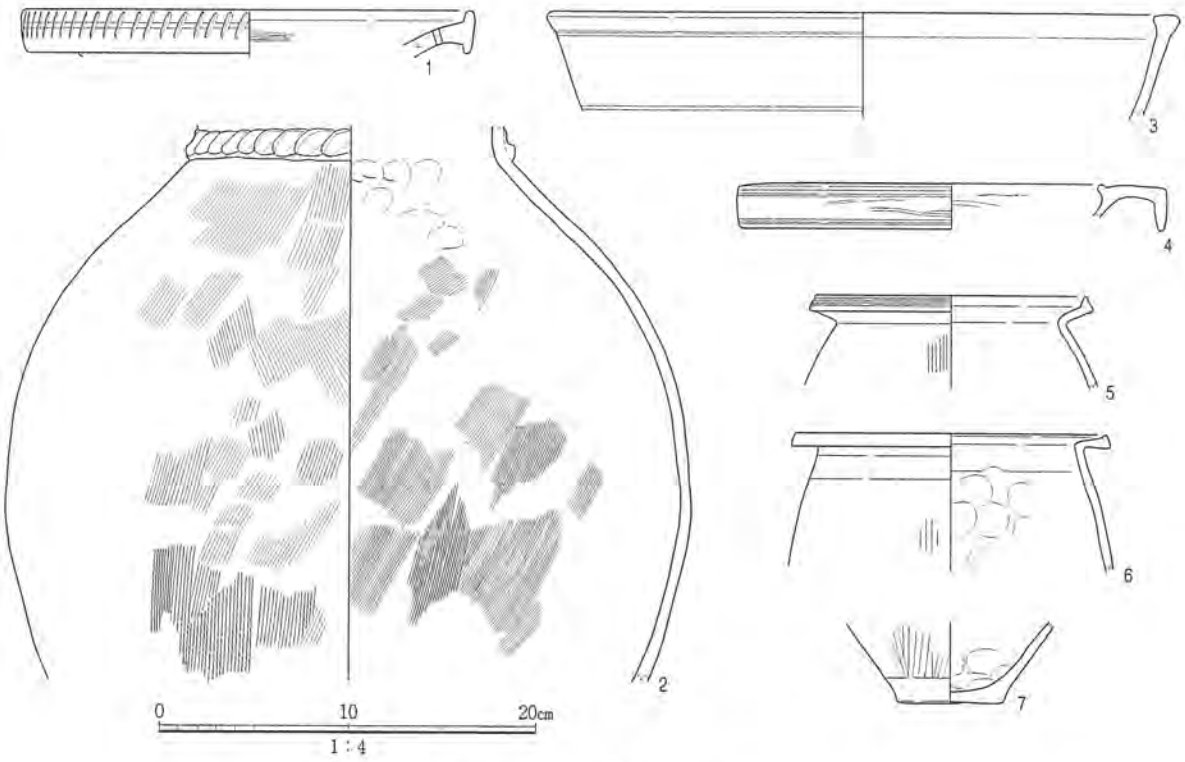


図5　SK401出土遺物実測図

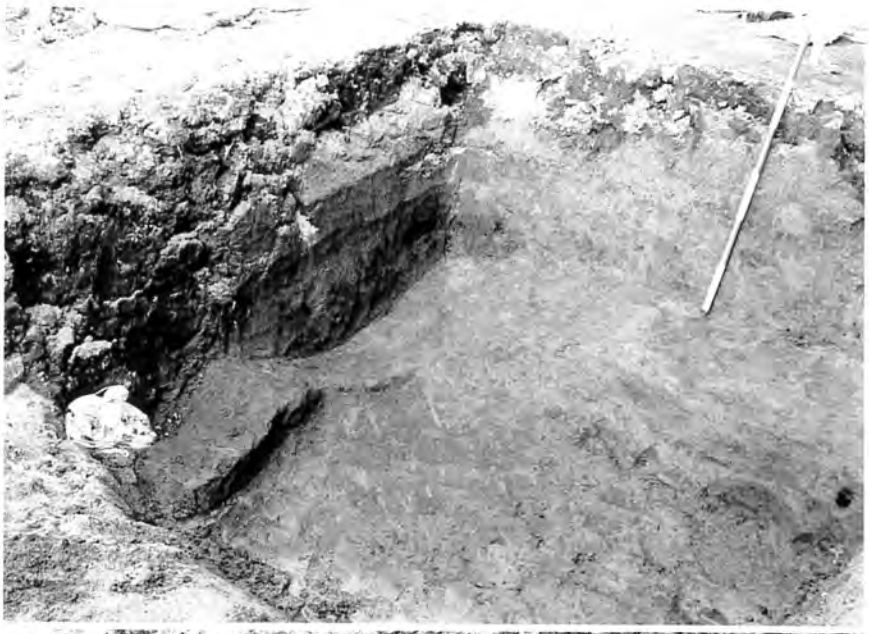
第Ⅳ様式に当る。

この他の遺構には、明治時代以降の多量の陶磁器・瓦を廃棄したSK101がある。SK101は東西３ｍ以上、南北２ｍ以上、深さ0.9mで、調査区の約３分の２を占めていた。

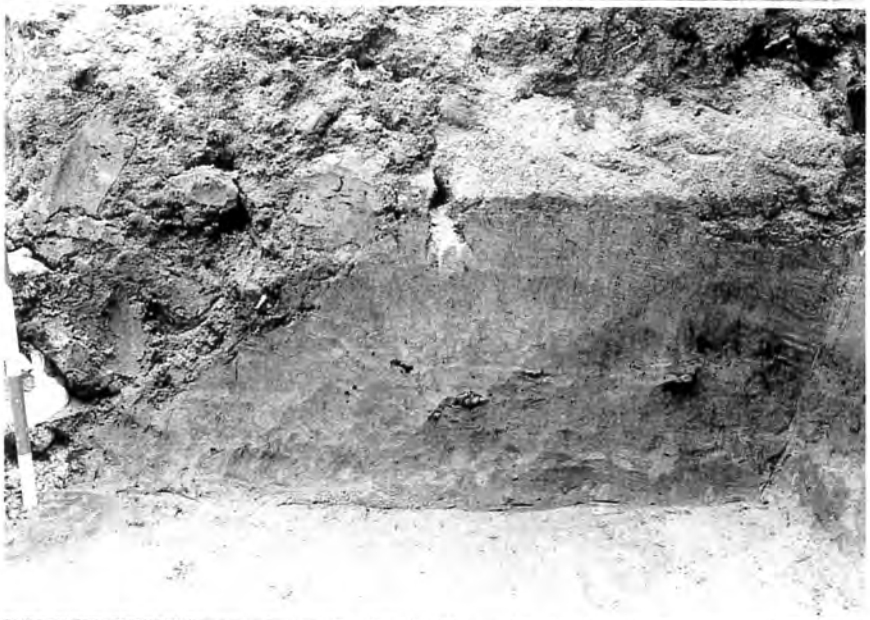
３）まとめ

今回の調査成果は、新たに弥生時代中期後葉の遺跡が確認されたことに尽きる。淀川下流の淀川区・北区などでは、近年、弥生～古墳時代前期の遺構の発見が増えており、淀川デルタの発達とともに適地を求めて集落が点々と形成されたようすが窺える。今後は、地形復元などを基に科学的な仮説を持って調査を積み重ね、淀川下流域における遺跡の存在と拡がりを明らかにしなければならない。

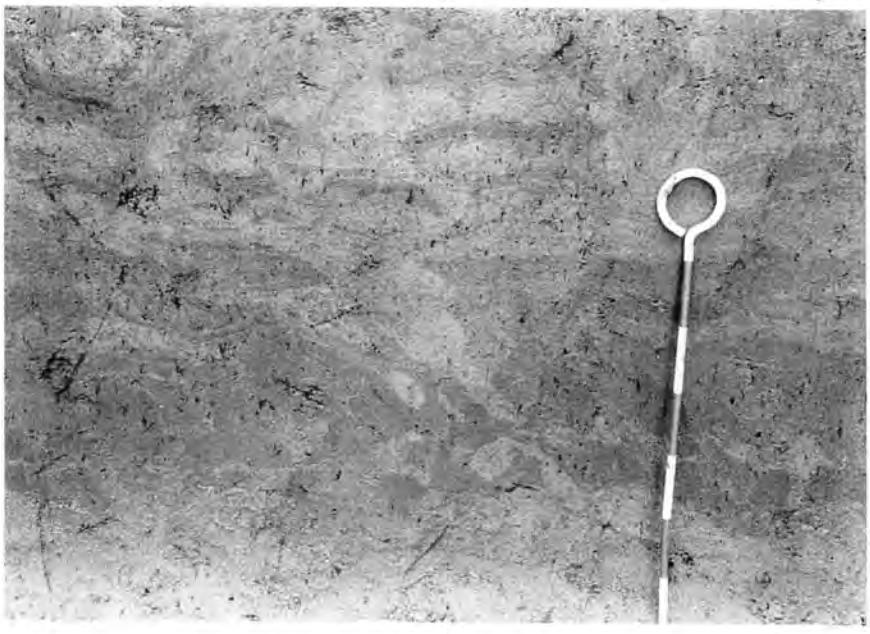
SK401完掘状況
（南西から）



北壁断面



第４層の生痕化石



中央区上町一丁目における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW10－２)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区上町１丁目31－６、31－７・11・12
調 査 面 積　20㎡
調 査 期 間　平成22年４月16日～４月19日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は史跡難波宮公園の南で上町筋東の1ブロック目に当り、難波宮跡・大坂城跡の遺構が密集する地域である。隣接するNW87-21次調査地では、大坂本願寺期とされる幅9.3m、深さ4.3mの巨大な東西の薬研堀SM501・502が検出されている(図1・2)。SM501(西)とSM502(東)の間は幅7.3mの掘り残しがあり、SM502は西北隅のみが調査範囲に含まれていた。当時、この掘り残し部分が出入り口で、出入り口を挟んだ東にはSM501と同規模のSM502が東へ延びていると推定された[大阪市文化財協会2004]。今回の調査では、まずこの推定を確認するため、SM502の南縁と推定されるところに東西10m、南北2mの調査区を設定した。

報告で使用した方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

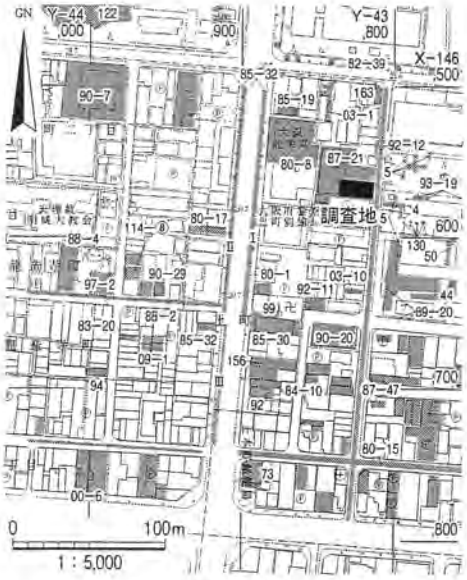


図1　調査地位置図

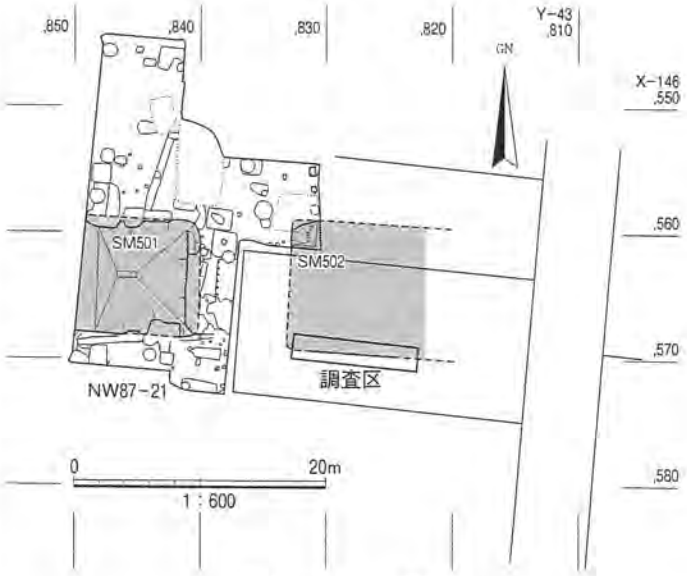


図2　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査区が狭く遺構が重なっているため、遺構埋土と拡がりをもつ地層の区別がつきにくいが、徳川期の整地層の可能があるものを第1層とした。

第1層：褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、層厚は20cmである。

第2層：明褐色(7.5Y5/6)シルト質細粒砂層で、当地域のいわゆる地山である。

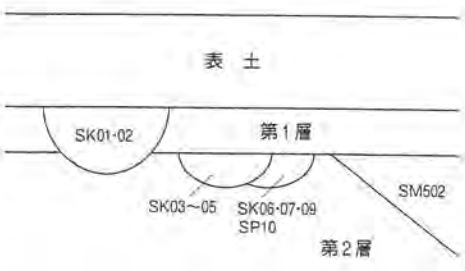


図3　地層と遺構の関係図

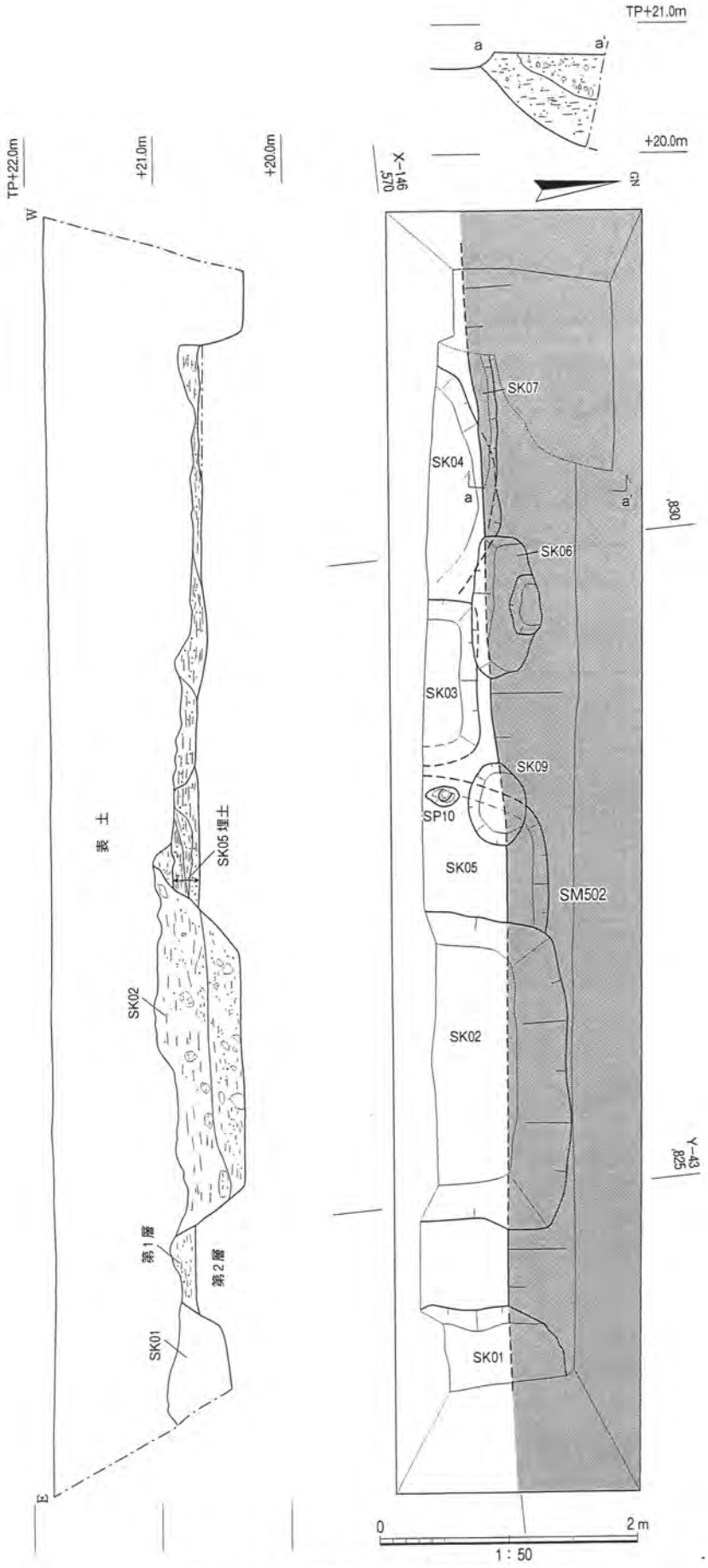


図4　遺構平面図および南壁地層断面図

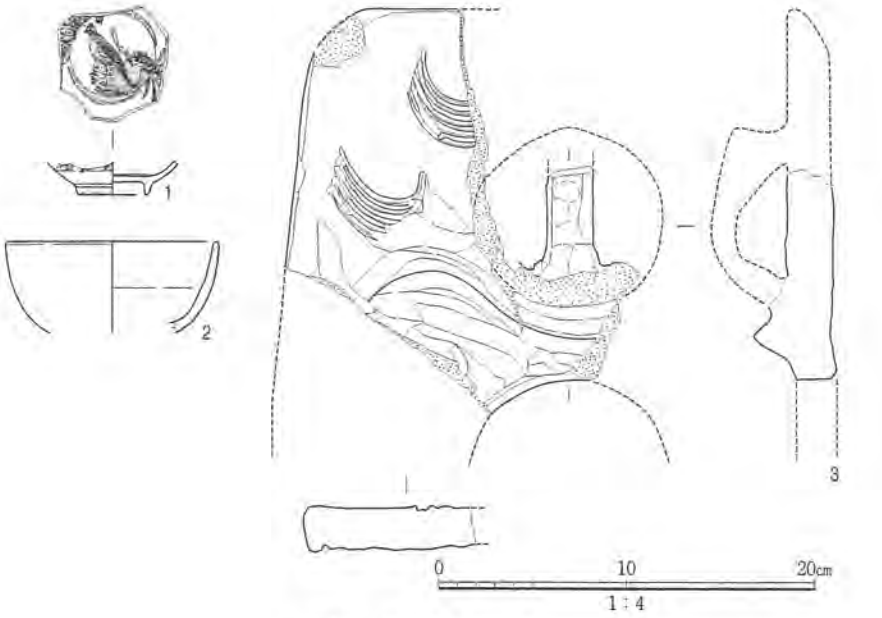


図５　出土遺物実測図
SK03(１)、SK04(２)、SM502(３)

ii)遺構と遺物(図４・５)

推定通りに調査区を横断してSM502の南肩が直線的に検出された。西端で深さ0.7m分が検出され、傾斜は約40度である。西南隅はPC杭で壊され、おそらく残っていない。埋土は褐色(10YR4/6)砂・礫質シルト層などである。NW87－21次調査の図と合せると、SM502の幅はSM501よりやや広く、10.2mとなる。方向はSM501・502とも南縁が最も確からしく、N85° Wであり、現在の街区と近似する。SM501は上町筋のNW85－32次調査では見つかっておらず、この間で途切れるか曲がる。一方、SM502は広小路公園まで続く可能性が高い。SM502からは図５－３の宝珠文鬼瓦が出土した。宝珠の部分は外れており、中央部に棒状の把手がある。櫛状工具で刻んだ葉状の文様が２箇所に残り、裏面には席の跡がある。宝珠文鬼瓦はSM501からも出土しており、大きさも近い(註１)。

SK06・07・09、SP10は豊臣期の可能性がある遺構である。SK02～05は徳川期の遺構で、SK01は明治時代以降である。SK05の埋土には焼土が入る。SK03出土の中国製青花碗１と、SK04出土の肥前陶器碗２のみを図示した。

難波宮期の遺構は検出されていない。

3)まとめ

今回の調査成果は、NW87－21次調査時のSM501・502に関する推定が正しかったことを裏付けたことで、堀の方向と規模はより確かになった。同種の堀は周辺に多くあり、さらなる時期比定を行いつつ、総合的に大坂本願寺末期から豊臣期の防御網を復元しなければならない。

註

(１)参考文献[大阪市文化財協会2004]の図61の８

参考文献

大阪市文化財協会2004、『難波宮址の研究』第十二

調査区とNW87－21次調査地
（東から）

SM502など（東から）

・調 査 個 所　大阪市中央区法円坂１丁目(大阪府警単身寮内)
・調 査 面 積　18㎡
・調 査 期 間　平成23年１月24日～２月１日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
・調査担当者　次長　南秀雄、大庭重信、趙哲済、黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は史跡難波宮跡の東側に隣接する(図１)。調査地東側では前期難波宮東方官衙の遺構群が検出されており、難波宮の中枢部分に位置する。今回の調査は、大阪府警単身寮敷地内で、難波宮の時期の遺構や地層の遺存状況を確認することを目的に実施した。調査区は敷地南西隅および敷地中央東隅の２箇所に設定し、前者を南区、後者を北区と呼称する(図２)。南区は近世までの地層を重機で除去し、北区は重機を搬入するスペースがないため表土から人力で掘削を開始し、それぞれ難波宮の時期の地層の確認を行った。北区は東側のNW30次調査で確認されている東方官衙東西単廊SC3047[大阪市文化財協会2004]の柱列の延長線上に設定したが、調査範囲内で遺構を確認することができなかったため、東側に調査区を拡張した。これを北２区と呼称する。

なお、図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、方位は座標北を基準にしている。

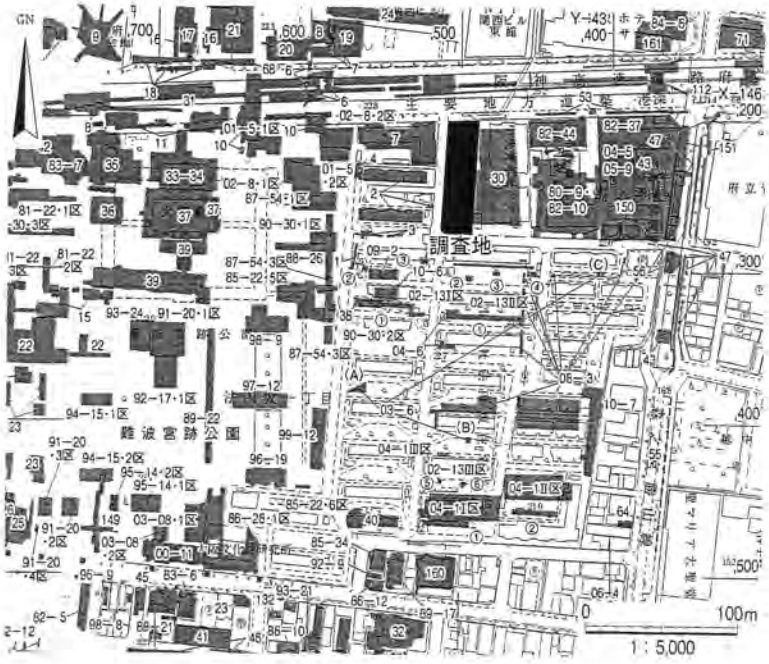


図１　調査地位置図

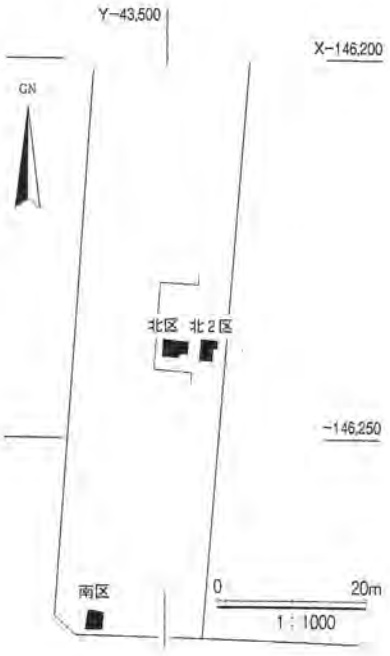


図２　調査区位置図

〈調査の結果〉

1．層序および出土遺物(図3・4)

各調査区の層序を第0～7層に区分した。現地表からの発掘調査深度は、北区が2.7m、北2区が1.9m、南区が1.7mである。

第0層：近・現代の整地層で、層厚は40～110cmある。

第1層：近世の整地層で、各調査区によって層相が異なるが、北区で代表させると灰黄褐色シルト質細粒～中粒砂、黒褐色シルト質細粒～中粒砂、にぶい黄褐色シルト質細粒砂の順で堆積する。層厚は40～50cmある。

第2層:中世の作土層で、各調査区で確認された。褐色ないしにぶい黄褐色の礫混り砂質シルト層で、瓦器片を含む。層厚は30～60cmある。

第3層:南区で確認した暗褐色礫混り細粒砂質シルト層で、後期難波宮の瓦片を多く含む(図3－4・5)。層厚は30cmある。後期難波宮廃絶後に堆積した地層と判断される。

第4層：南区で確認した明褐色細粒砂～礫質粘土層で、層厚は10cmまで確認した。土師器の細片や拳大の凝灰岩片が出土したことから、後期難波宮造成に伴う整地層と判断される。

第5層：北区で確認した整地層で、第5a～5c層に細分される。第5a層は明褐色砂・礫質粘土の細偽礫および粗粒砂～礫からなり、層厚は20～30cmある。第5b層は明赤褐色粘土偽礫からなり、層厚は10cm未満である。第5c層は灰褐色砂質シルトの偽礫および明赤褐色粘土の偽礫からなり、層厚は20～40cmである。各層とも東から西側に傾斜し、また北2区には分布しないことから、北2区から北区以西にかけて低くなる地形を埋めたものであろう。下位層から出土する遺物の年代から、前期難波宮造成に伴う整地層と判断される。

第6層：北区および北2区で確認した黄灰色砂質シルト層で、北区では最上部に黄灰色シルトが薄く堆積していた。層厚は北区で40cm、北2区で20cmある。本層からは難波宮下層期の須恵器・土師器片が出土しており、1・2は難波宮Ⅱ新段階の須恵器杯身、3は初期須恵器の甕口縁部である(図3)。

第7層：地山の上町層で、北区および北2区で確認した。灰褐色シルト質粗粒砂～灰色砂質粘土からなり、上面は東から西へ傾斜する。北区の本層上面で溝を検出した。

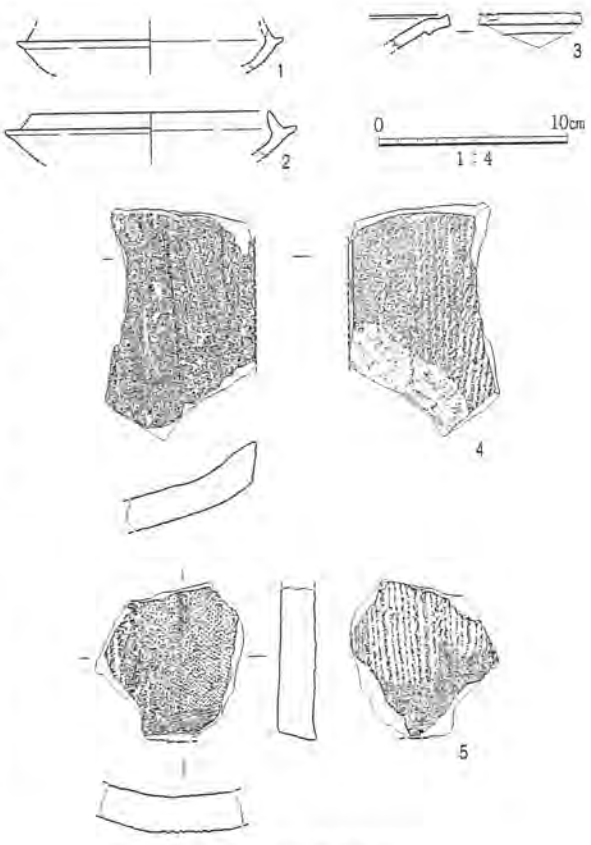


図3　出土遺物実測図
北区第6層(1～3)、南区第3層(4・5)

2．遺構(図4)

北区でSD01、北2区でSP02を検出した(図

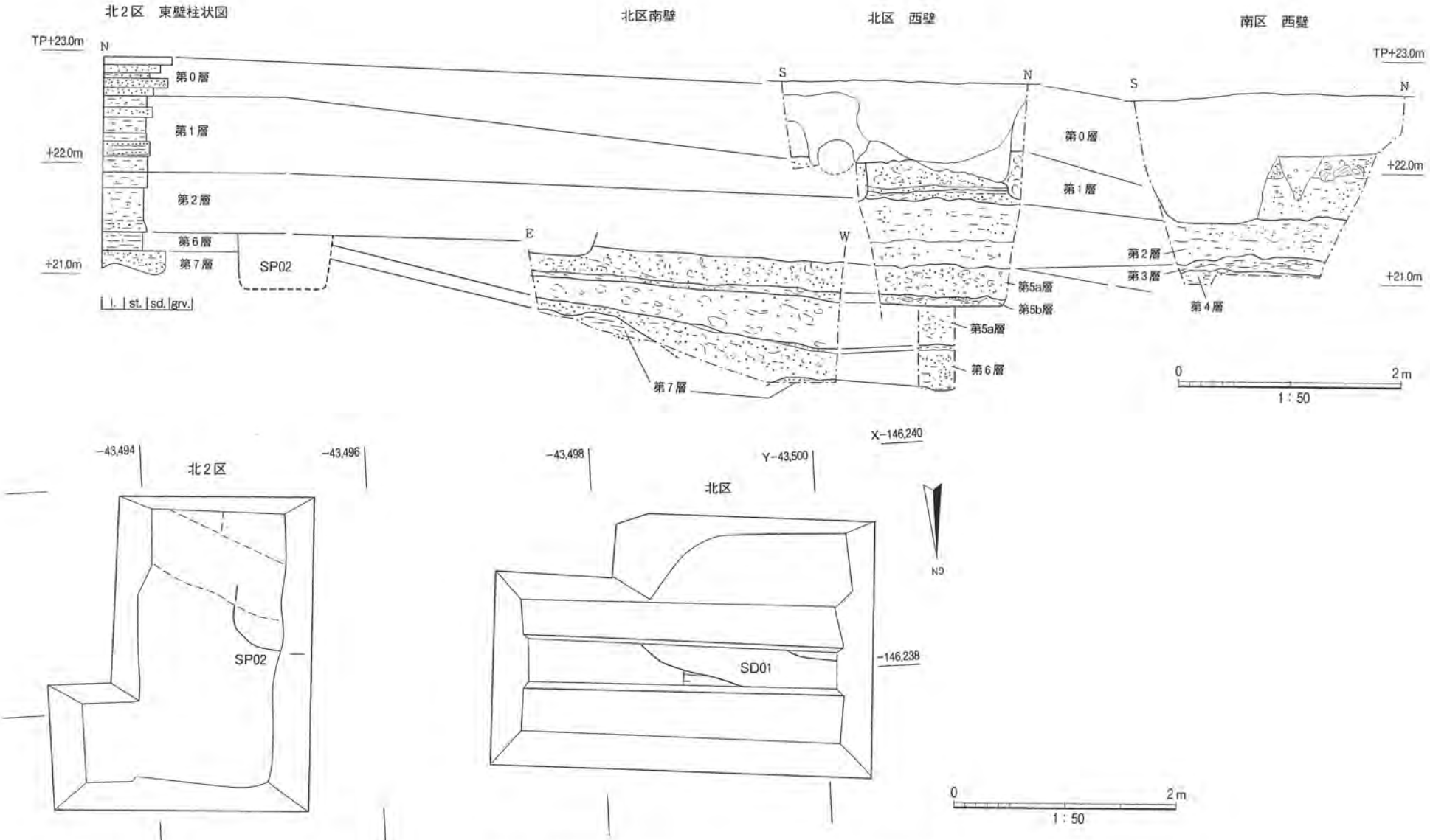


図 4　各区地層断面図および北区・北２区検出遺構平面図

4)。

北区では、調査過程で前期難波宮の整地層の可能性を想定した第5a～5c層の各上面で、遺構検出作業を行ったが、当初想定した東方官衙東西柱列の続きを検出することができなかった。そこで、調査区中央に東西方向のトレンチを設定し、第5c層以下の地層の確認を行った。その結果、難波宮下層期の遺物を含む第7層上面で、東でやや北に振れる東西溝SD01の輪郭を確認した。検出面での幅は0.5m、深さは遺構の掘下げを行っていないため不明である。第6層出土遺物の年代と、方向が正方位からずれることから、前期難波宮造営以前の遺構と考えられる。

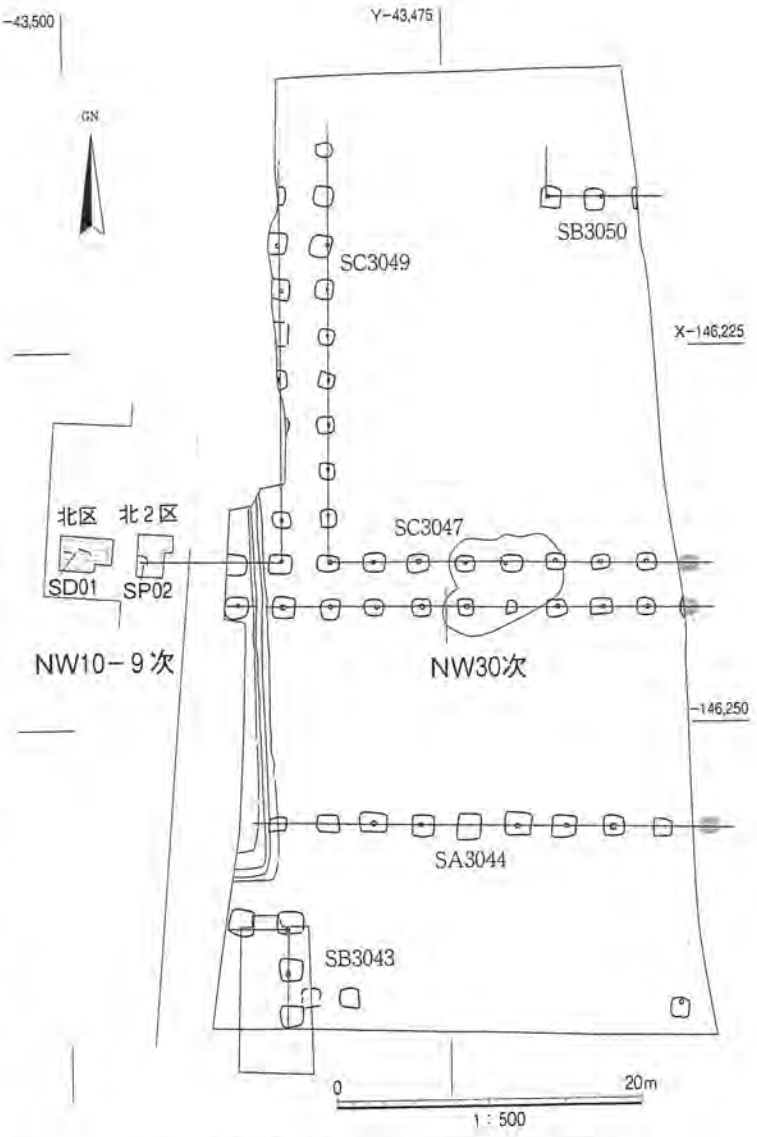


図5　検出した遺構とNW30次調査遺構との関係

北区の結果を受け、東側に設定した北2区で再度検討を行った。その結果、第5層は分布せず、調査区西端の第6層上面で隅丸方形の柱穴掘形の東北端とみられる遺構の輪郭を確認した(SP02)。東方官衙東西単廊SC3047の柱列の推定ライン上に位置しており(図5)、前期難波宮の遺構の可能性が高い。NW30次調査で確認されているこの柱列の最も西端の柱穴からほぼ2間東に位置している。また、西側の北区では推定ライン上で柱掘形が検出できなかったことから、東西柱列はSP02以西にはのびていないことが推測される。

〈まとめ〉

今回の調査結果、南区で後期難波宮の整地層と瓦片多数を検出し、北2区では前期難波宮東方官衙単廊の東西柱列の続きを検出し、調査地域に前期・後期難波宮の遺構が分布することが確認された。また北区では、西側に低くなる旧地形があり、これを前期難波宮造成時に埋立てていたことが確認され、難波宮下層期の遺構・遺物を検出した。

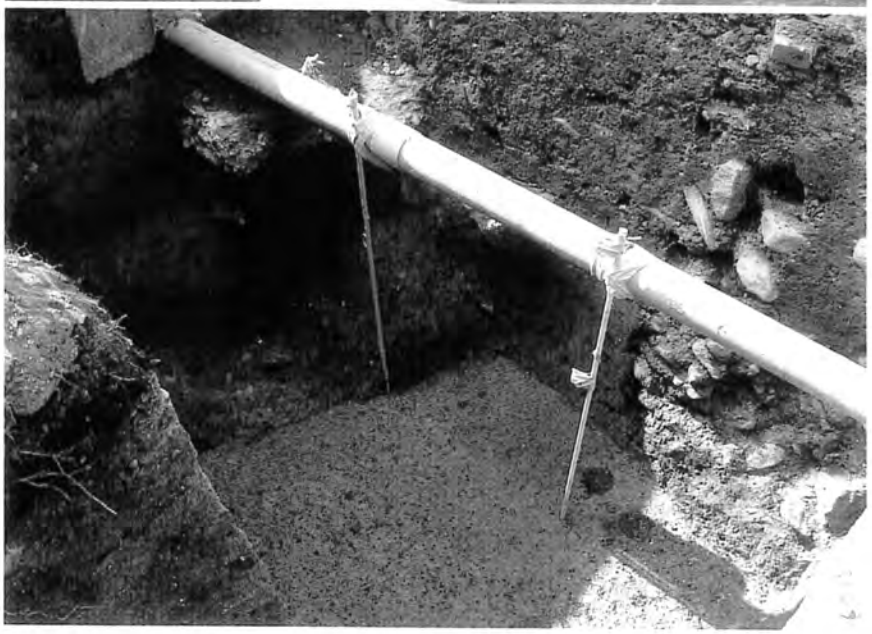
参考文献

大阪市文化財協会2004『難波宮址の研究』第十二

南区地層断面
（南から）

北区地層断面および
遺構検出状況
（北から）

北２区遺構検出状況
（北東から）



中央区玉造一丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS10－２)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区玉造１丁目７－５
調 査 面 積　48㎡
調 査 期 間　平成22年５月31日～６月３日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、京嶋 覚

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城の東南に当る「玉造口」に近接する位置にある。南に30m離れた地点で行われたOS89－146次調査では、豊臣期の南北方向の堀が確認されており、大坂城惣構堀の一部と推定されている[大阪市文化財協会2002]。また、この調査地では弥生時代中期の土器棺墓も確認されており、森の宮遺跡から続く弥生時代の遺跡も拡がっていると考えられた(図1)。

調査区は敷地北部の8m×6mの範囲であり、すでに現地表から1.6m掘り下げられていた。直径約1.5mのコンクリート基礎杭4本に挟まれた範囲となる。5月31日に表土掘削時の残土を重機により除去してから遺構検出を始め、その後、現代攪乱の掘削とともにさらなる遺構検出に努め、人力による掘削と記録作業を進めた。6月2日には記録作業を終え、6月3日に重機などの撤収作業を行って現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

現地表から1.6m以下の地層について記述する。

図1　調査地位置図

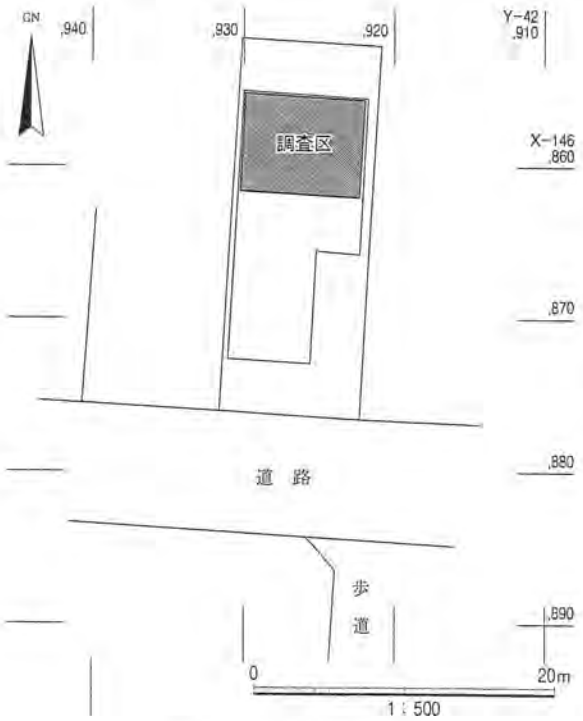


図2　調査区位置図

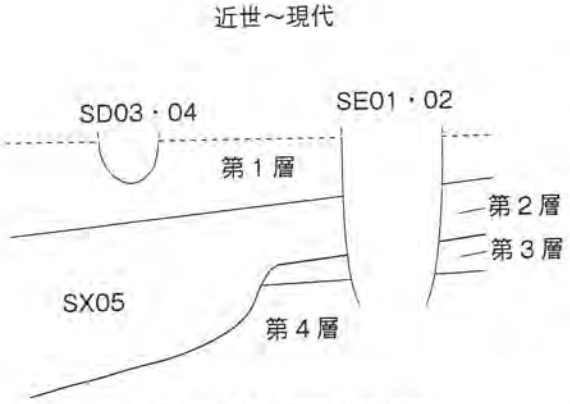


図３　地層と遺構の関係図

第１層：暗褐色(7.5Y3/4)シルト層で、徳川期の整地層である。層厚は調査区北端が最大で30cmである。炭粒や少量の貝殻片を含む。北端部には本層中に灰層が挟在する部分が認められた。

第２層：にぶい黄橙色(10YR6/4)細礫混りシルト質細粒～粗粒砂層で、シルトなどの偽礫を含む整地層である。層厚は南部では20cmほどだが、北に向かって厚くなり60cm以上となる。後述する出土遺物から17世紀前半の整地層である。

第３層：にぶい黄橙色(10YR4/3)中粒～粗粒砂混り粘土質シルト層で、下位層上部が作土化した部分である。

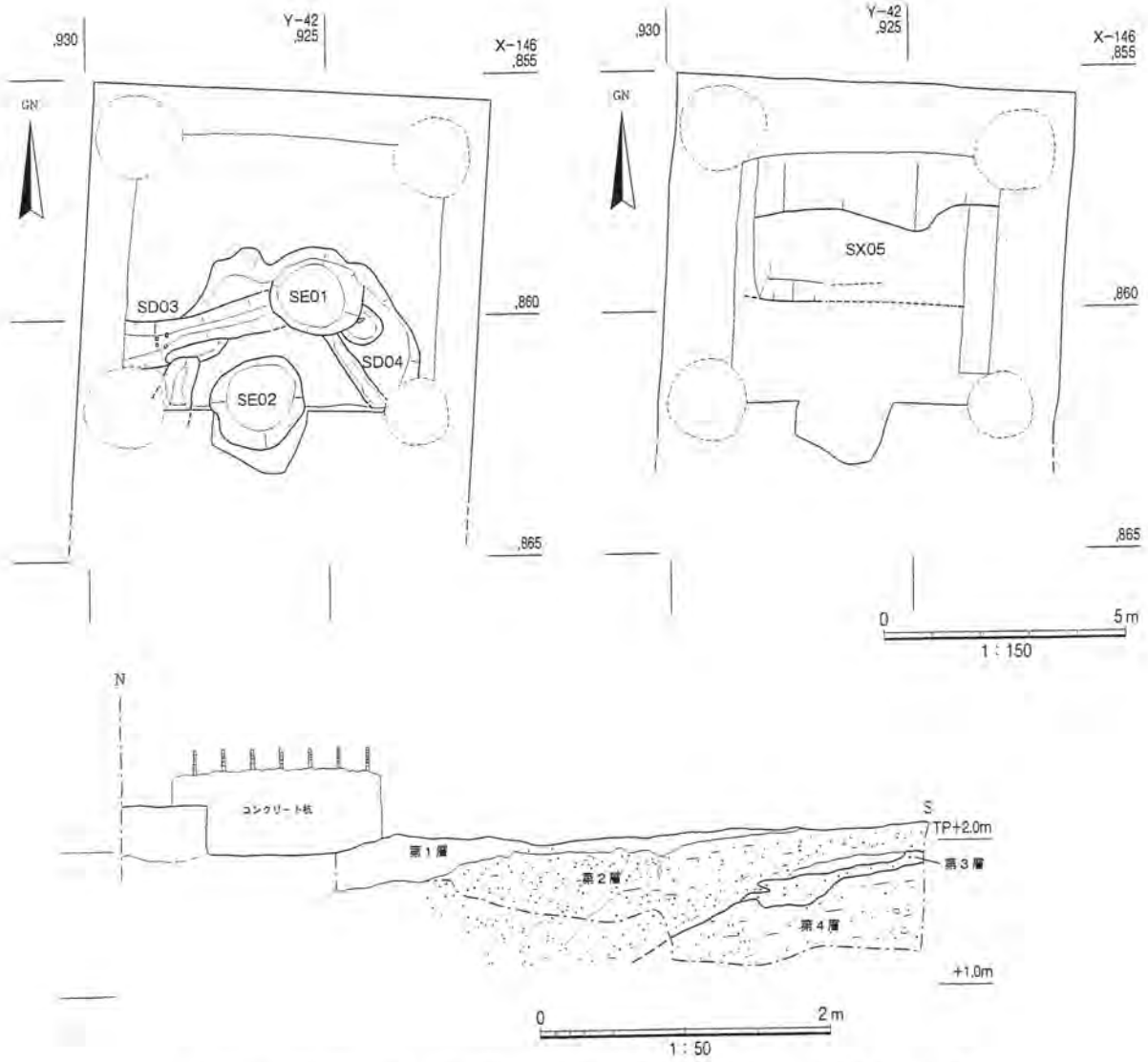


図４　第１層上面(上左)・第４層上面(上右)遺構平面図および東壁地層断面図(下)

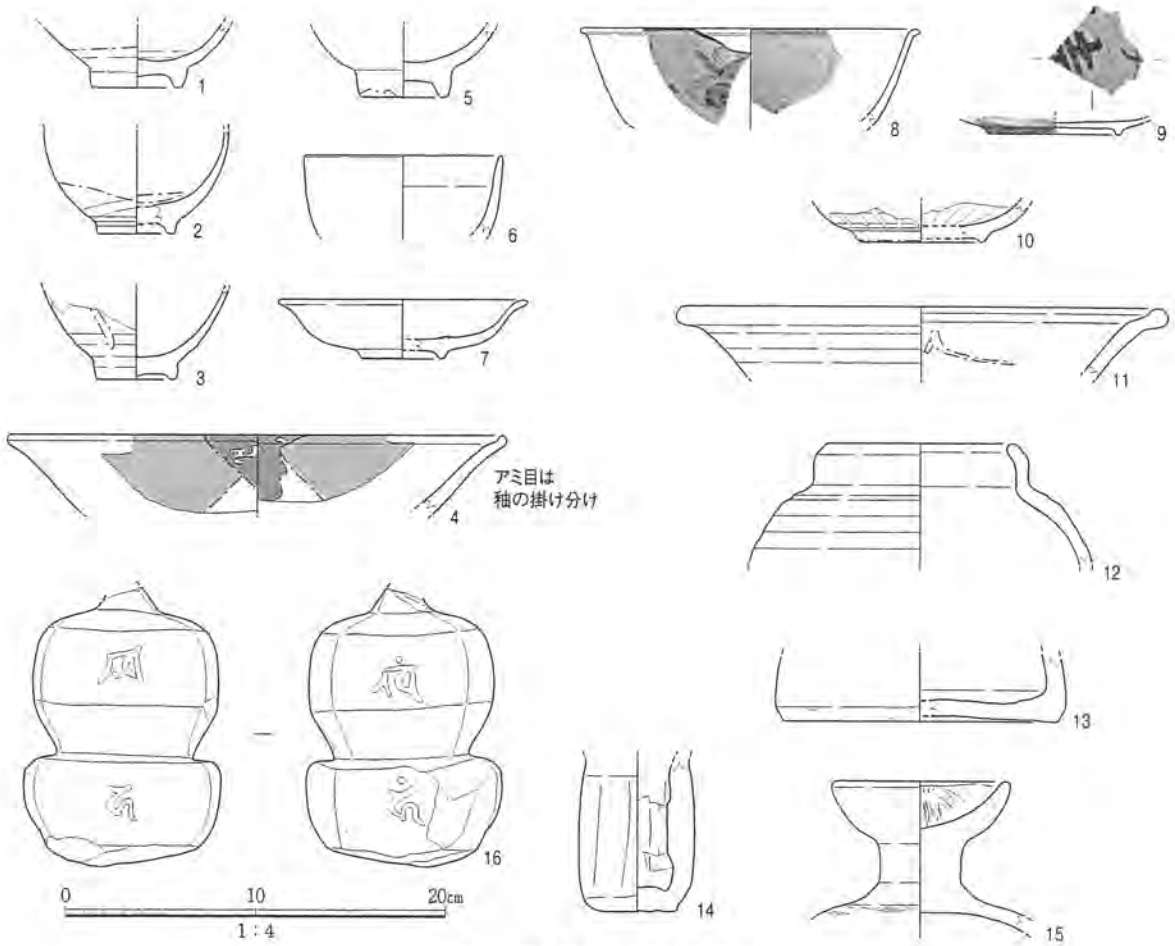


図５　第２層出土遺物実測図

第４層：灰黄褐色(10YR5/2)中粒～粗粒砂混り粘土層で、硬く締まった豊臣期以前の整地層である。

ii)遺構と遺物(図４・５)

第１層上面で井戸SE01・02、SE01に連結する溝SD03・04を検出した。

SE01・02はいずれも直径1.8mの円形の掘形で深さは１m以上ある。SE01からは近世末期の陶磁器片とともにガラス片が出土しており、近代以降に埋められている。SE02からは井戸瓦や肥前陶磁器片が出土している。SD03・04は前者が幅0.6m、後者が幅0.3mを測る。遺物は少量だが、肥前磁器や瓦の小片が出土している。

第３層上面では北半部が北に深く落ち込んでいく遺構SX05を検出した。調査区内では南北約３mの範囲となり、東西方向の堀の一部であると推定される。17世紀前半までの遺物を含む第２層はこの堀を最終的に埋め立てた整地層であると考えられる。

第２層からの出土遺物には、肥前陶器碗１～３・鉢４・皿７、肥前青磁碗５・６、漳州窯青花鉢８、青花皿９、瀬戸美濃焼皿10・鉢11・天目碗、丹波焼壺12、備前焼壺13・擂鉢、土師器焼塩壺14、瓦質土器瓦燈15などがある。瀬戸美濃焼には志野菊皿10や内面に鉄絵のある鉢11があり、豊臣後期とみられる。また砂岩製の一石五輪塔16も出土した。上部の空輪と風輪の部分で16の左側は発心門で「𑖀(カ)」「𑖁(キャ)」、右側は菩薩門で「𑖂(キャン)」「𑖃(カン)」の梵字が両面に刻まれている。

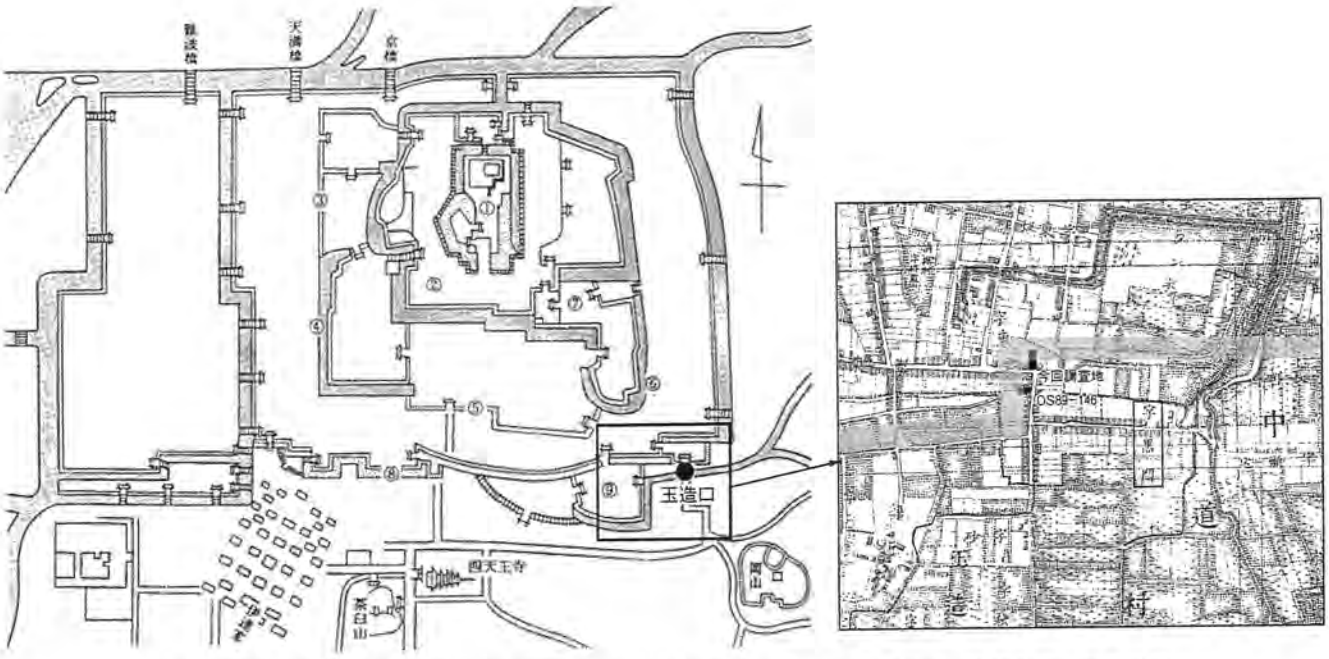


図６　『僊台武鑑』所収「大坂冬の陣配陣図」および『大阪実測図』における調査地の位置と堀の推定位置

OS89－146次調査ではSM201とする堀の東肩部が検出されており、豊臣後期の遺物が出土しているため、1614(慶長19)年の大坂冬ノ陣直後に徳川方によって埋められたと推定されている[大阪市文化財協会2002]。この堀が今回の堀と一連のものとすれば、北80mほどで東に直角に屈曲していたと考えられる。『僊台武鑑』所収「大坂冬の陣配陣図」には、惣構玉造口付近には同様に屈曲する堀が描かれており、その部分に相当する可能性がある。『大阪実測図』に調査地と堀の屈曲部を配置すると、玉造口は玉造筋の東側に推定され、ＪＲ玉造駅付近に残る「黒門」の地名の位置とも整合する(図６)。

３)まとめ

今回の調査は狭小であるとともに作業環境も悪く、十分な調査ができなかったが、最終的に17世紀前半頃に埋められた堀と推定される遺構を検出することができた。従来の調査所見と総合すると豊臣期大坂城惣構堀の一角の状況の推定復元が可能であり、今後の調査研究に寄与する成果を得ることができたといえる。

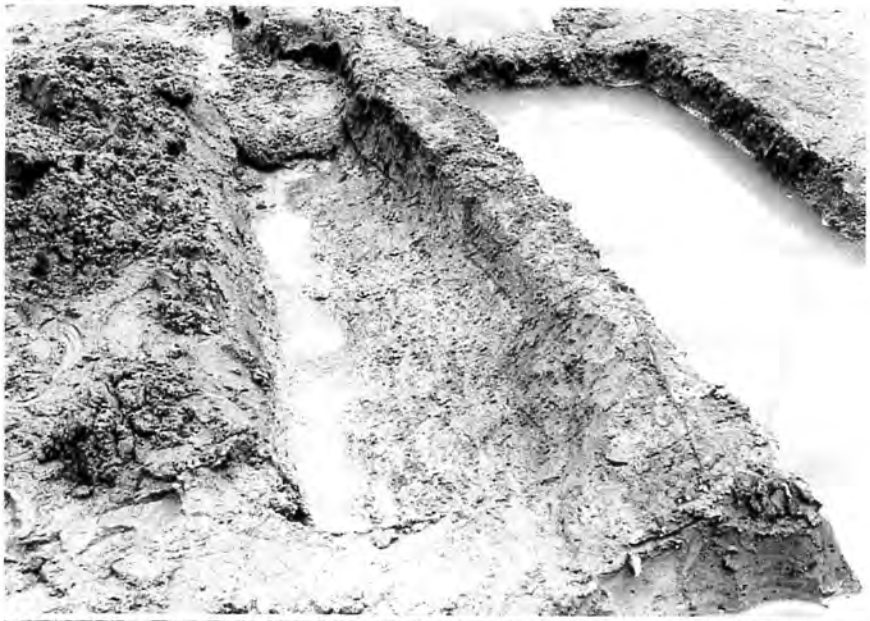
引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』Ⅵ

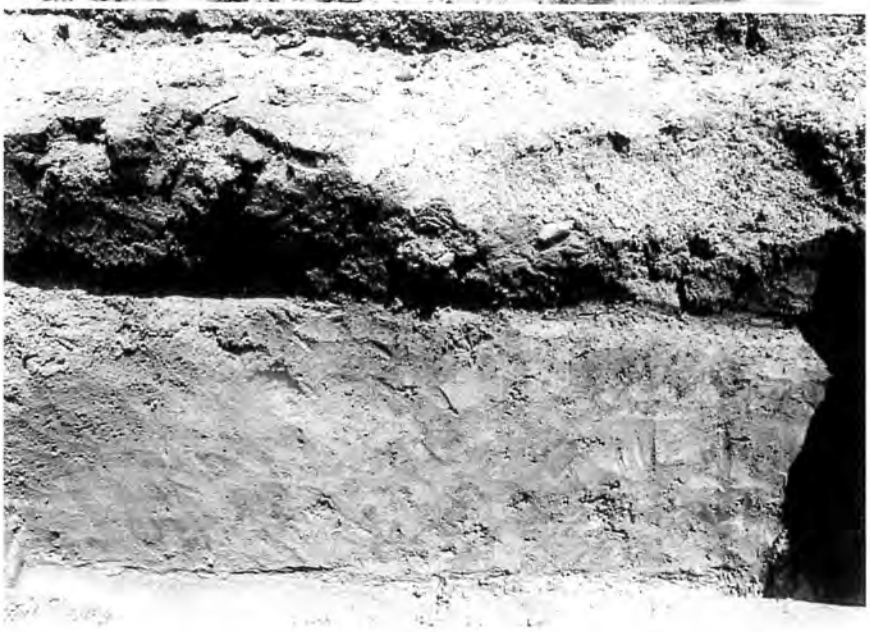
内務省地理局1886、『大阪実測図』

SX05検出状況
（北から）

SX05南肩部
（西から）



東壁地層断面



天王寺区松ヶ鼻町38－9における建設工事に伴う
堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS10－1)報告書

調 査 個 所　大阪市天王寺区松ヶ鼻町38－9
調 査 面 積　24㎡
調 査 期 間　平成23年1月5日～1月8日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

堂ヶ芝廃寺は、細工谷遺跡にあったと推測される「百済尼寺」と対になる「百済寺」に比定される説がある古代の寺院跡である。寺院の中心部は玉造筋を挟んだ豊川稲荷・観音寺の付近と推測され、明確な遺構は見つかっていないが、7世紀後半～8世紀の瓦が数多く出土している(DS87－3・88－1・04－1次調査、図1)。一方、玉造筋の西では4次の調査があるが、古代の瓦の出土は少ない。今回の調査地はさらにその西方、四天王寺東門付近から細工谷交差点へ延びる「真宝院谷」のすぐ西側に位置する。

2010年12月15日、当地にて大阪市教育委員会により2箇所の試掘が行われ、土師器や瓦器が出土する溝状遺構が見つかったことから本調査を実施することになった。この遺構が見つかった試掘壙を含むように調査区を設定し、2011年1月5日より重機掘削を開始し、1月8日にはすべての調査を終えて埋め戻した。

調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中では、TP+○mと表記する。方位は座標北を基準とした。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層：近現代の盛土層で、層厚は30cmである。

第2層：褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂層で、層厚は30cmである。本層以下は段丘構成層で、本

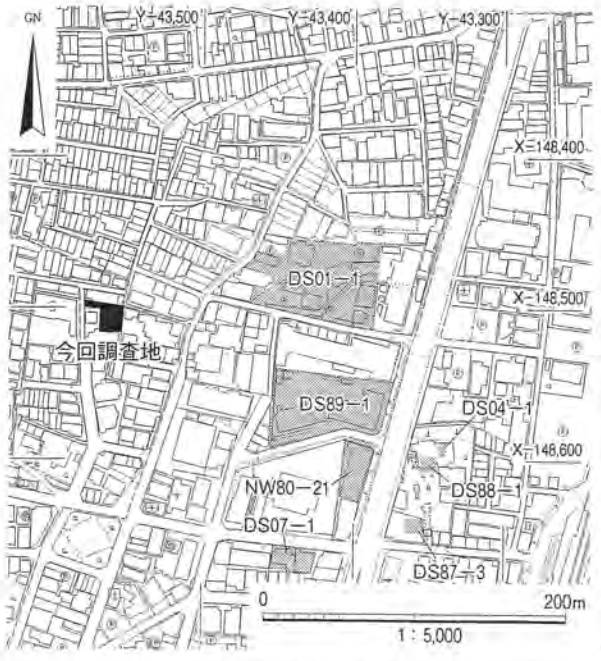


図1　調査地位置図

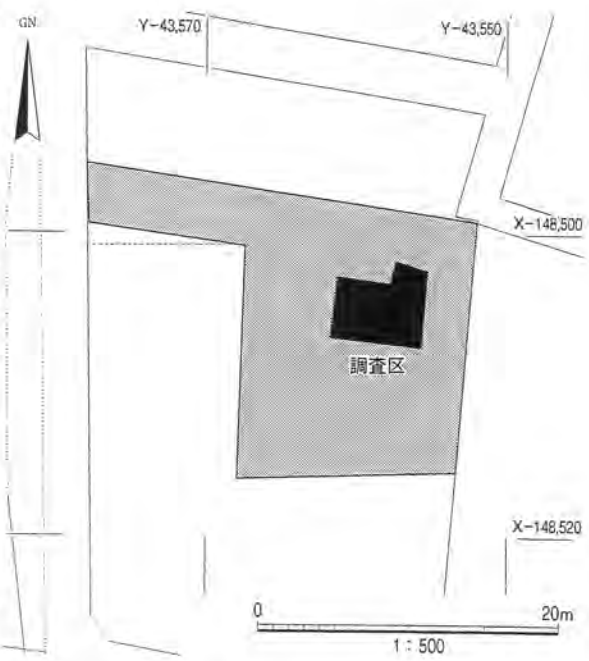


図2　調査区配置図

調査地の地山層に相当する。遺物は出土していない。

第３層：明黄褐色(10YR6/6)粘土質シルト層で、層厚は60cm以上である。上面でサンドパイプを確認した。

ii)遺構と遺物(図４)

第２層上面で北東方向への落込みSX201を検出した。SX201は幅4.5m以上、深さ0.6mで、調査区外の北東方向へ拡がる。底面では平行する鋤溝群を検出し、落込みは耕作地として利用されたことがわかる。鋤溝は幅0.2

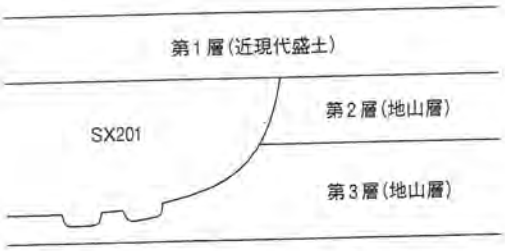
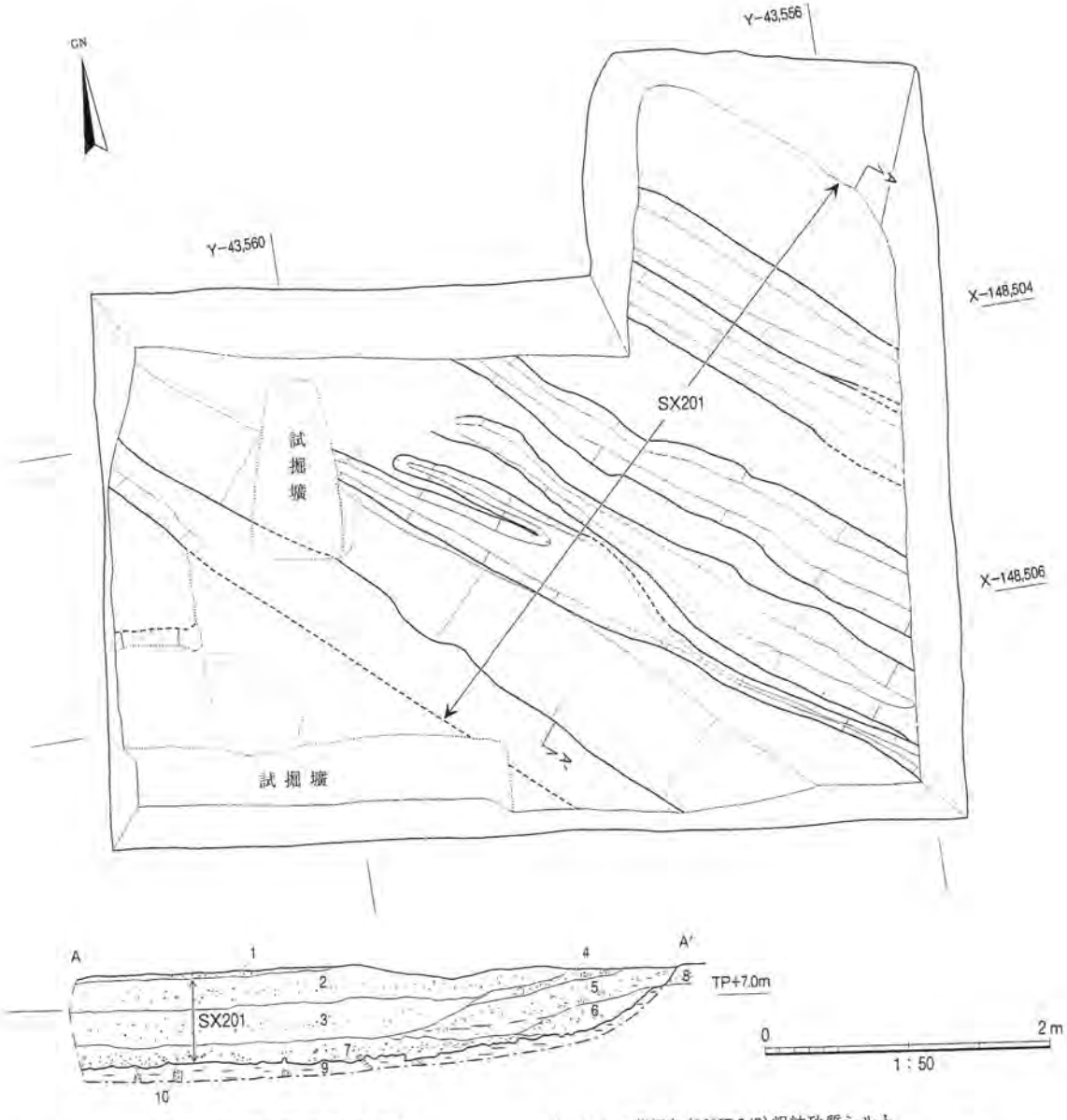


図３　地層と遺構の関係図



1：暗褐色(10YR3/3)中粒砂(第１層、近現代盛土層)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルト(作土層)
3：にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルト(作土層)
4：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルト(地山偽礫を多く含む)
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト(地山偽礫を含む)
6：にぶい黄橙色(10YR6/3)粗粒砂質シルト
7：にぶい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト(作土層)
8：褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂(第２層、地山層)
9：明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂質シルト(第３層、地山層)
10：明黄褐色(10YR6/6)極粗粒砂質シルト(サンドパイプ)

図４　調査区平面・断面図

～0.8m、深さ0.1mである。SX201は肩部が直線的で、ほぼ平坦な底面となっており、調査区東方を北東－南西方向に延びる大きな谷に連なる自然の落ちが整形されたものと考えられる。埋土は大きく３層(図４の２・３・７)に分かれ、最下層はにぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルトで、分級のよい作土層である。上位層は肩部付近は地山層の偽礫が多く含まれ、埋め戻されているが、その北東側は淘汰が進み、作土層である。SX201のいずれの埋土からも、少量であるが、土師器・須恵器・瓦器の小片が出土した。このうち瓦器椀は高台が低く、12～13世紀代に属し、SX201は平安末～鎌倉時代の耕作に係わる遺構と考えられる。

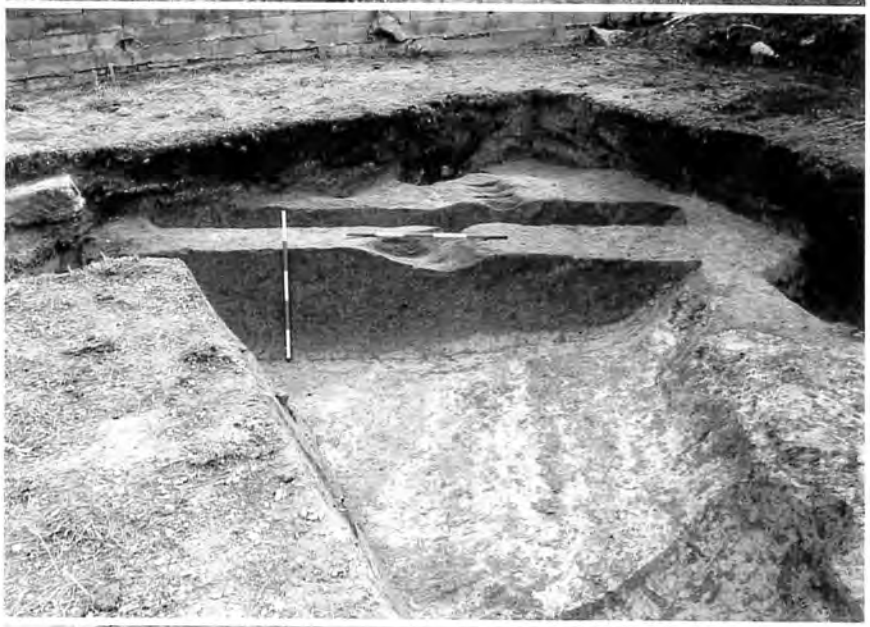
３)まとめ

本調査では、堂ヶ芝廃寺に関わる遺構は確認できなかったものの、平安時代末～鎌倉時代の耕作に関わる遺構を検出し、この地域の土地利用の一端を知る資料を得た。

今後、周辺の地形を復元しつつ地道に調査を重ねることが、堂ヶ芝廃寺の遺構やその分布を明らかにすることにつながると考えられる。

SX201検出状況
（南西から）

SX201堆積状況
（北西から）



SX201完掘状況
（南東から）

天王寺区上汐四丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH10－５)報告書

調査個所	大阪市天王寺区上汐4丁目3－17
調査面積	21㎡
調査期間	平成23年2月23日～3月3日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、趙 哲済、京嶋 覚、小田木富慈美

1）調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は、市内を南北に延びる上町台地の中央部にある。当該地はその南部で、熊野街道が載る台地の主稜線から東へわずかに下った緩斜面に位置する。四天王寺の伽藍からは北北東へ約700mの距離にある。

当該地は前・後期難波京の京域内に当り、難波京朱雀大路跡からは西へ約600mに位置している。近隣の調査では、奈良時代以降の遺構や遺物が多数発見されている（図1）。当該地から北西約60mのUS06－1次調査地では、奈良時代後半～平安時代初頭の建物群が発見され、難波京から長岡京へ遷都された前後の様相を復元する資料を得ている。西へ約130mのUH09－3次調査地では奈良時代の井戸のほか、奈良時代の条坊推定線に重なる中世後期の東西溝を発見している。南東350mのNW81－4次調査地では井戸から「米屋」と記した奈良時代の土器が出土している。その他、北北西約180mのUS04－2次調査地や南200m前後のUS07－1・2次調査地では奈良時代の溝や柱穴、土壙などが検出されている。また、南約400mのUS04－1次調査地では、四天王寺外郭の区画施設とみられる室町時代の溝が発見されている［大阪文化財研究所2010・積山洋2010］。

当該地で建設工事が申請されたことにより、平成23年1月27日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下85cmから古代の土器を含む土壙などが見つかった。そこで協議が行われ、工事掘削により遺構が影響を受けると判断されたため、事前に本調査を実施することになった。

調査地の南寄りに南北7m、東西3mの調査区を設定して、2月23日から調査を開始した（図2）。重機掘削、人力による遺構検出、検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、GPSによる測位、調査区の平面図・断面図の作成、遺構断面の写真撮影・遺構断面図の作成などを順

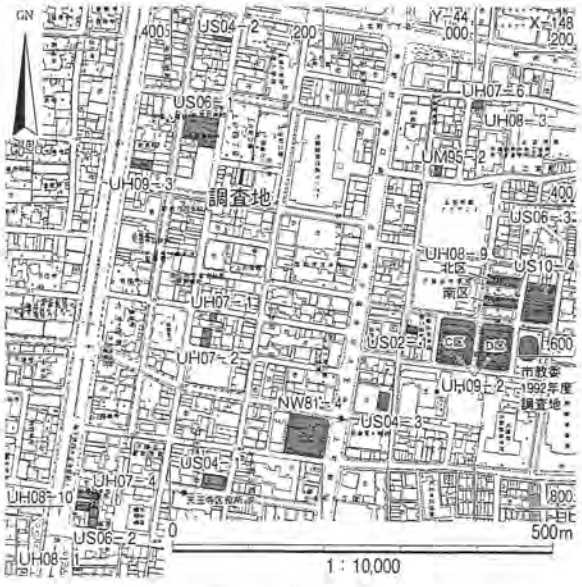


図1　調査地位置図

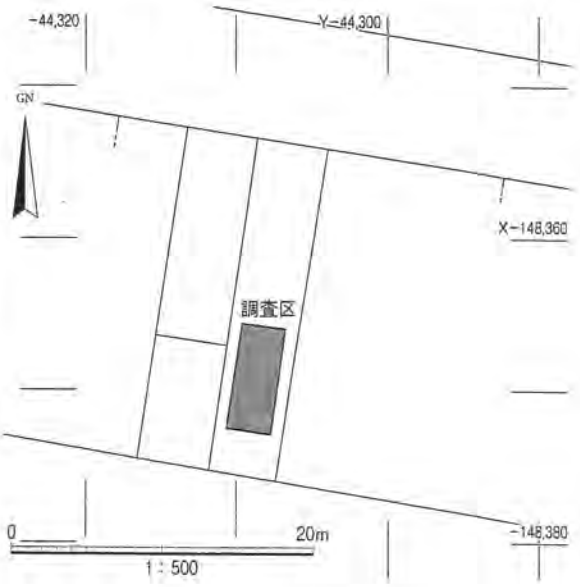


図2　調査区位置図

次行い、２月26日に発掘作業を終了した。埋戻しは２月28日に実施したが、急な大雨で埋戻し土がぬかるみ状態になったので、２日間乾燥させ、３月３日にさらに真砂土を客土して完了した。

本書で用いる座標系はGPS測位に基づく世界測地系である。また、水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、TP＋○mと略記する。

２)調査の結果

ｉ)層序

現地表高はTP＋20.1～20.2mである。基盤層の上町層は浅く、最高地点は調査区北東隅でTP＋19.75m、遺構に削られた中央部の平坦面でもTP＋19.5m前後の高さがある。その間の地層を５枚に区分した(図３・４)。

第０層は調査区を広く覆う現代の盛土層・撹乱埋土層で、層厚は20～50cmであった。

第１層は調査区の東北部に分布した暗褐色(10YR3/4)炭・焼土混り砂質シルトからなる作土層～盛土層であり、層厚は15～25cmであった。SK14は本層上面の遺構である。

第２層は調査区東壁中央で確認した深さ15cm程度の浅い凹地を埋める水漬き堆積層である。主体はオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト層で、下底に２～３cmの粘土薄層を伴っていた。

第３層は調査区に断続的に分布した客土層で、暗褐色細礫混り砂質シルトからなり、層厚は10～50cmであった。全般に軟らかく、マンガン斑紋が顕著に認められた。調査区南縁のSK02は本層上面の遺構とみられる。

第４層は調査区に断続的に分布した客土層で、暗褐色(10YR3/4)～にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトからなり、層厚は25cm前後あった。土器を多く含んでいた。

第５層は上町台地を構成する上町層であり、黄褐色(10YR5/8)中粒砂が上方細粒化して明黄褐色(10YR6/8)粘土に岩相変化した。TP＋18.45mの深さまで確認した。全般に風化物とみられるシルト～粘土を含み、最上部は顕著に風化した土壌層位(註１)のB層であった。当遺跡の基盤層であり、上面でSD05・SP06などを検出した。

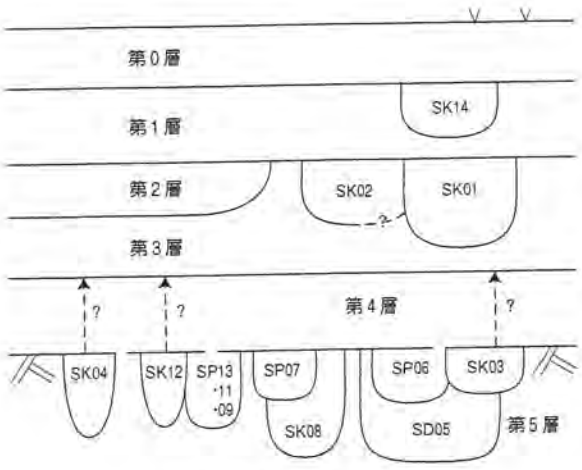


図３　地層と遺構の関係図

ⅱ)遺構と遺物

柱穴、土壙、溝など14の遺構を検出した。重機掘削は第５層の上面まで行ったので、多くの遺構は第５層の上面で検出したものである。この時期の本来の遺構面は、埋没古土壌のA層の層準にあることから、B層上限のTP＋19.75mよりさらに0.2m近く高かったものと推定できる。以下で述べるように、ほとんどの遺構は７世紀後半から８世紀前半に至る遺物を含んでいた。このことは、飛鳥時代後半から奈良時代前半にかけて、当該地周辺に人間の盛んな営みがあった

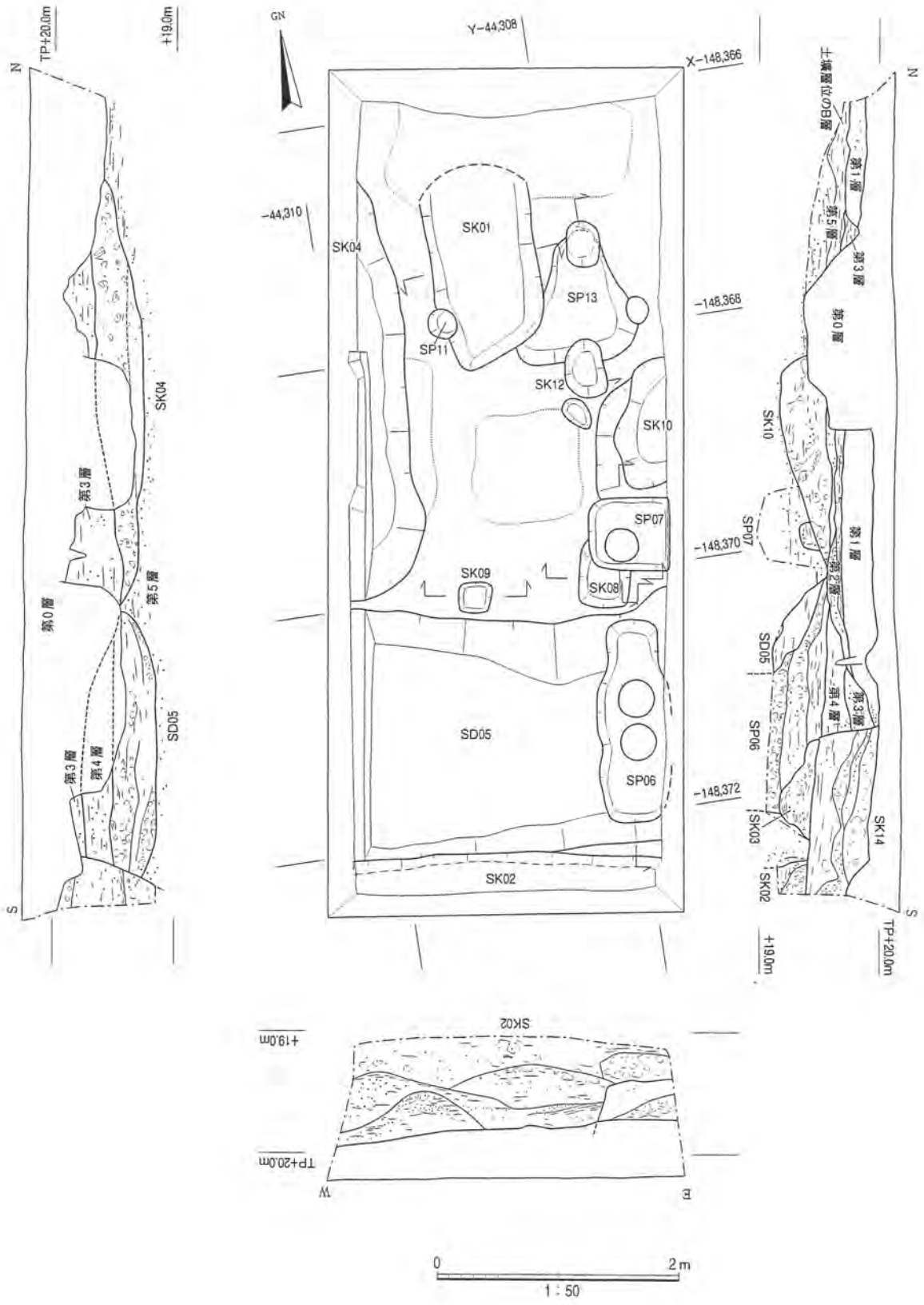


図4　地層断面図および遺構平面図

ことを物語っている。なお、出土土器の分類は、[奈良国立文化財研究所1976]に、その年代は[佐藤隆2000]に基づく。

a. 飛鳥時代後半～奈良時代前半の遺構

SD05は調査区南部をほぼ東西に延びる第５層上面の溝であり、幅2.2m以上、深さ0.4mであった。基盤層である第５層の最高地点と検出面との比高が0.2mあり、土壌層位の欠落0.2m近くを加えると、本来は幅約３m、深さ0.8m程度の溝であったと推測する。埋土は第５層堆積物のにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト偽礫を多く含むにぶい黄褐色～明黄褐色(10YR5/4～6/8)砂質シルト層である。埋土に流れの構造はなく、水漬き堆積層中に偽礫が客土されたようである。埋土中からは土師器甕・杯・高杯・付庇系竈、須恵器甕・杯・鉢のほか、瀬戸内海西部～北部九州地域産の製塩土器が出土している。なお、土師器杯では内面に漆の付着が認められるものが１点あった。

図６の５～８は土師器である。５・６は杯Ａである。５は口縁部が直線的に立ち上がり、端部内面の肥厚はわずかである。内外面ともに磨滅しており、暗文の有無や調整については不明である。６の口縁部は外反したのち、端部をつまんで肥厚させている。内面には１段の斜放射状暗文を施す。図化し得ないが外面にはヘラミガキが認められる。７は台付き杯の脚部片で、内底面には螺旋状暗文が認められる。外面にはハケ調整を施す。８は高杯脚部上半の破片で、杯部との接合部で剥離している。外面はヘラで多面形に面取りしている。９～13は須恵器である。９は杯Ｈである。口径は9.2cmで、底部はヘラ切り後不調整である。10は杯Ｇ蓋である。かえりは短く、下方へは突出しない。11は杯Ｇである。底部はヘラ切り後不調整とみられ、丸みをおびる。12は杯Ｂである。高台は断面形が正方形に近く、口縁部と底部との境よりもやや内側に付く。13は台付壺の脚台部と思われる。１箇所に穿孔を有する。14は製塩土器である。器形は円筒形で、口縁端部はつまみあげて整形している。外面はユビオサエで仕上げ、内面には布目圧痕が認められる。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。積山洋による分類の６類に属し、瀬戸内海西部～北部九州地域に産地が求められよう[積山1994]。

SK04はSD05の北側で調査区西壁に一部がかかる第５層上面の土壙であり、東西0.5m以上、南北3.5m以上、深さは0.4以上であった。埋土は暗褐色砂質シルト偽礫と褐色砂質シルトからなる客土である。図６の２は土師器杯Ａである。口縁部は直線的に立ち上がったのち、端部を肥厚させている。内面には２段の斜放射状暗文が認められる。３は須恵器杯Ｂである。高台断面形は長方形に近い。このほか土師器甕、須恵器杯Ａ・Ｇの破片が出土しているが図示し得なかった。

SK08はSD05の北側にある第５層上面の土壙であり、東西0.42m、南北約0.6mの隅丸方形で、深さは0.22mであった。埋土はわずかに砂質なシルト偽礫の客土である。

SK09はSK08の西側にある第５層上面の土壙であり、東西0.38m、南北0.35mの隅丸方形で、深さは0.1mであった。埋土は暗褐色砂質シルト偽礫であり、偽礫は特に下底部に多い。

SK10はSK08の北側にある第５層上面の土壙であり、東西0.6m以上、南北1.2m以上で、深さは0.45mであった。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)のやや砂質なシルトと砂質シルト偽礫が混在する客土であった。

SP06・SP07・SP13も第５層上面の遺構であるが、SP06・SP07は上述の遺構の上に重なって検

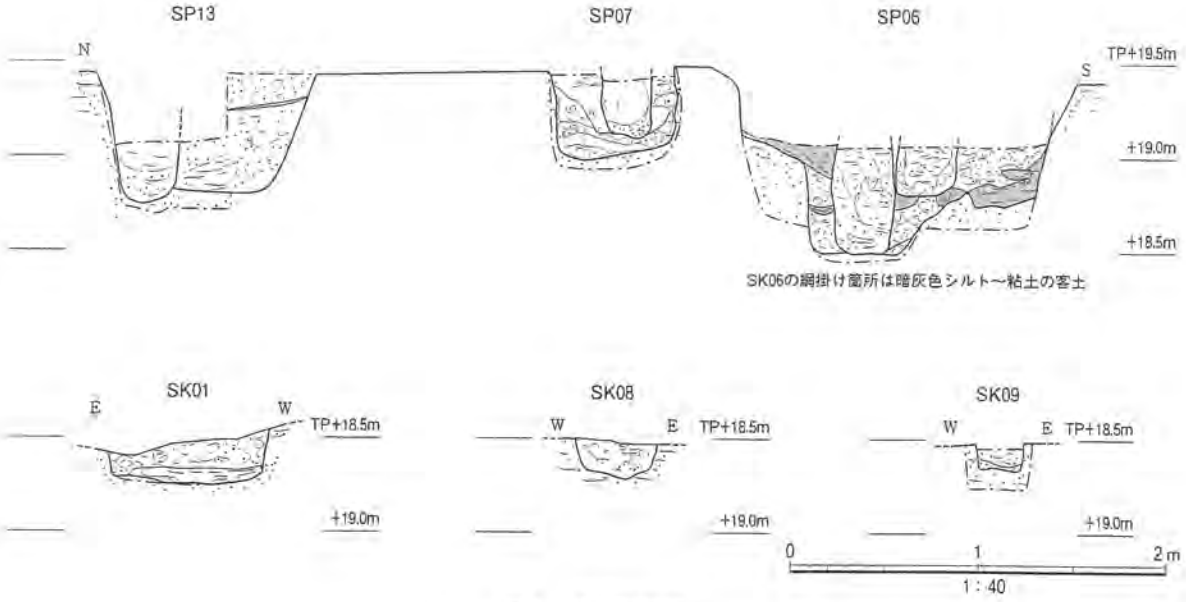


図５　遺構断面図

出した後出の遺構であり、SP13はこれらと同時期と考えられる遺構である(図５)。遺物はどれも細片である。

SP06はSD05に重なって、これに直交する布掘り柱掘形である。SD05が水漬きの暗褐色砂質シルトで0.4m余り埋まった後に掘られている。長さは1.7m余り、幅は北端で0.43m、南側で広く0.6m強であった。わずかな間隙を挟んで長軸方向に２本の柱痕跡が並んでいた。北柱は直径30cm、南柱は直径29cmとほぼ同規模である。掘形の底は高低差がある。北柱側が一辺0.6m余りの方形に掘り下げられ南側より0.3m深い。掘込み面からは1.1mの深さである。北柱は掘形底に接地して立てられ、柱周りを炭を含む暗灰色(2.5Y6/8)シルト～粘土の薄い客土と第５層由来の偽礫の厚い客土が互層している。踏み締めながら埋めていったのであろうか。南柱は掘形底には接地せず、埋土の途中に据えられている。北柱の底からは38cmも上になる。

SP07はSK05・SP06の北側にあって、SK08とSK10に重なる柱穴である。掘形は東西0.66m、南北0.67mの隅丸方形で、底は緩く撓みをもち、深さは0.63mである。柱痕跡の直径は28cmである。掘形埋土はSD05の埋土に類似する暗灰～暗褐色砂質シルトと第５層由来の偽礫からなり、柱据付け前の嵩上げ土と据付け後の根固め土とに２区分される。柱は0.1m嵩上げされて、掘形中心から南西へ少しずれて据えられていた。図６の１は掘形より出土した須恵器で、鉄鉢形の鉢Ａである。口縁部は内湾し、端部をややくぼませている。

SP13はSP07の北にある歪な掘形を持つ柱穴である。掘形は東西1.0m、南北1.2mの隅丸三角形で、深さは0.6m余りであった。掘形の北の頂点の位置に柱抜取り穴があった。抜取り穴の平面は楕円形であり、東西0.27mに対して南北0.38mと長いため、南北に揺すって抜いたのであろう。抜取り穴の底は掘形底より0.1m低く直径24cm前後の丸い窪みが認められるが、これは柱痕跡ではなく、抜取り時の変形とみられる。土師器甕・杯・竈・羽釜、・須恵器甕・杯のほか、瀬戸内海西部～北部九州地域産および淡路・播磨産の製塩土器が出土している。出土遺物はいずれも破片であり、１点を図示した

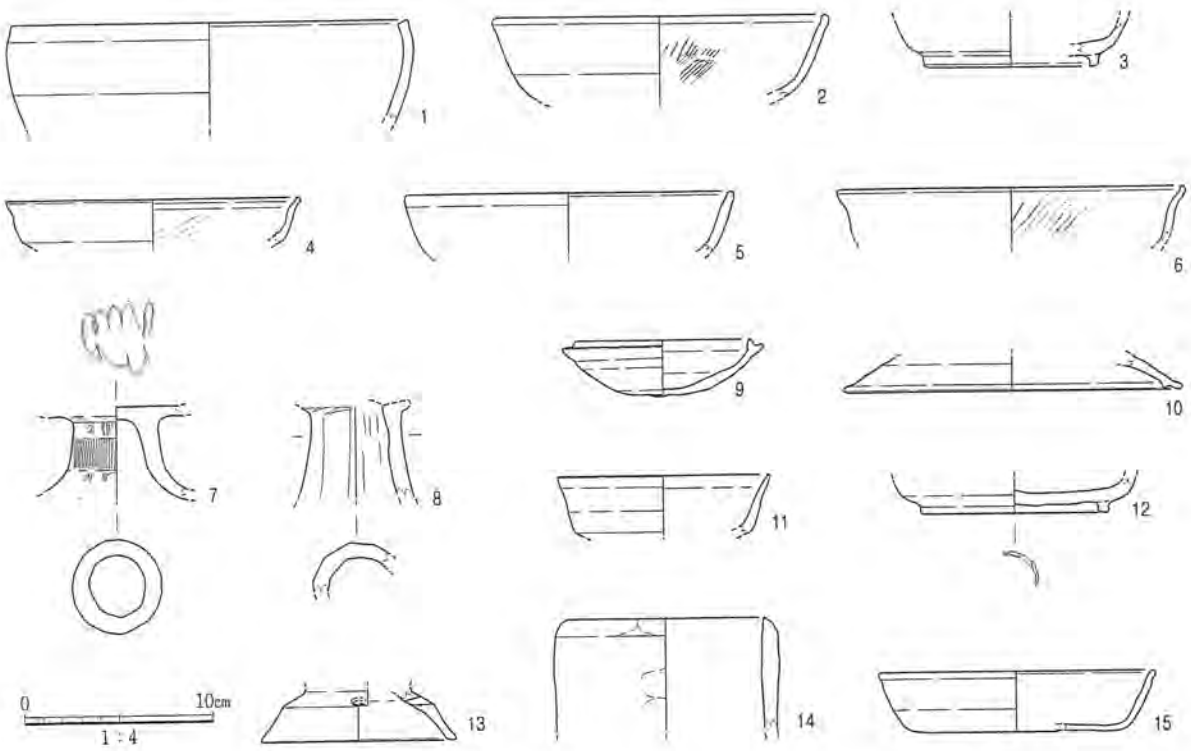


図6　出土遺物実測図
SP07(1)、SK04(2・3)、SP13(4)、SD05(5～14)、SK02(15)

(図6－4)。4は土師器杯Aである。口縁部は外反したのち、端部をつまんで肥厚させている。内面には1段の斜放射状暗文を施す。

以上の遺構出土遺物について、土壙および柱穴出土遺物に関しては出土量が少なく、年代の比定が困難であるが、おおむね難波Ⅳ～難波Ⅴ古段階の7世紀末～8世紀前半に比定される。SP13では土師器杯4が難波Ⅴ古段階に降るもので、他は難波Ⅳに属すると考えられる。また、SD05では、出土遺物のうち古相と考えられるものは難波Ⅲの7世紀中葉に遡る土師器7および須恵器9である。その他のSD05出土土器は難波Ⅳ～難波Ⅴ古段階の7世紀末～8世紀前半に比定され、難波Ⅴ古段階に降るものとしては、土師器杯6・高杯8がある。製塩土器14は[積山1994]の編年により、8世紀前半代に属すると思われる。

b．奈良時代前半かそれ以降の遺構

奈良時代前半と推定される遺構の上に重なって検出された遺構や、上位の第4層の堆積状況から、第5層の上面でも比較的新しいとみられる遺構には、SK03・04・12などがある。これらは第4層上面の可能性もある。また、多種の砂質シルト偽礫が混在し、泥薄層を挟む第3層上面のSK02は中世以降の可能性があり、同じく第3層上面のSK01は堆積状況から水溜が埋め立てられたとみられる土壙であり、出土遺物から江戸時代後期の18世紀前半にまで下ると考えられる。SK02から出土した15は土師器杯Aである。遊離資料とみられる。口縁部は直線的で、端部をつまんでやや内側に肥厚させている。口縁部外面には沈線が巡る。内面には暗文は確認されない。

3）遺構と遺物の検討

ⅰ）難波京古代橋２例目の可能性について

奈良時代前半かそれ以前と考えられるSD05はほぼ東西を向いている。そのSD05に重なるSP06の２本の柱痕跡とSP07・13の計４本の柱痕跡は、ほぼ南北の直線上に並んでいる。

SP06はSD05と直交して、かつ、溝幅内に収まるように掘られている。溝がある程度埋まった後に掘られているとはいえ、溝本来の遺構面を復元すると、約３ｍの幅と0.4m程度の深さが残り、溝がまだその形状と機能を維持していたと推定できる。したがって、SP06は溝を意識して掘削されたと考えられる。

柱間に注目してみると、SP06北－SP07柱間は1.26mであり、SP07－13柱間はほぼその２倍の2.54ｍである。柱間に現れたこの倍数は、これらの柱が計画的に施工されたことを示すと考えられる。寸法の分かった柱は直径28～30㎝と太く、重量物を支える施設であったと推定される。

SP06の北柱は掘形内をさらに掘り下げて他の柱より深く、かつ、よく締まった基盤層に柱底が接地している。そこには堅固に立てる意識が感じられる。一方、SP07の柱は嵩上げして高さを調節している。SP13は抜取り穴であるため詳細はわからないが、北柱ほど深くはない。SP06南柱は、溝のほぼ中央に位置するが、高さ調節の嵩上げをして据えられている。北柱とともに重量物を支えたのであろうか、それとも北柱を補強したのであろうか。

以上からは、SP06とSP07・13の計４本の柱痕跡が、屋敷地を区画する塀などであった可能性を指摘できる。しかし、さらに一歩踏み込めば、４本の柱痕跡は、SD05に架かる橋の下部構造の痕跡であったとも考えられ得る。すなわちSP06とSP07の３本の柱は橋梁を支えた橋脚であり、北端のSP13の柱は橋台の基礎柱であったのではないだろうか。もしそうであるなら、対となるもう一列の柱並びは、調査区の東側に埋もれているのであろう。ただし、SP13の柱を橋の下部構造に含めると、相当大規模な橋を想定することになるので、SP13は別遺構と見た方がよいかもしれない。

難波京の橋はUH09－２次調査地[大阪文化財研究所2010]で発見されている。この橋は朱雀大路から西へ１本目の南北路、[大阪文化財研究所2010]のいう西一路にあり、[積山2010]の復元では難波宮の南面道路から南へ７本目の東西路(仮に南七路と呼ぶ。以下同様)の少し北にある小谷に架かっている。今回発見の遺構群は条坊路からは外れて条坊区画の中にある。SD05は南六路から20余m南に、橋と推定する４本の柱並びは西二路から60余m西に位置している(図７)。条坊区画内における屋敷地などの敷地利用の一端を垣間見せているのであろう。

遺構の年代について、留意しておきたい。条坊区画内の溝と推定したSD05出土遺物は、７世紀後半～８世紀前半のものを含んでおり、７世紀後葉～８世紀前半のものが最も多いことから、溝の存続年代もこのころとみられる。本調査地から北西300mの地点で行われたUS04－２次調査では難波京条坊に関連するとみられる東西方向の溝が検出されている[平田洋司2004]・[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。この溝は８世紀前半に機能しており、８世紀中葉には埋められている。今回検出された溝SD05出土遺物はこれよりもやや遡るものを含んでおり、条坊に係わる溝とすると、年代決定には慎重を要する。

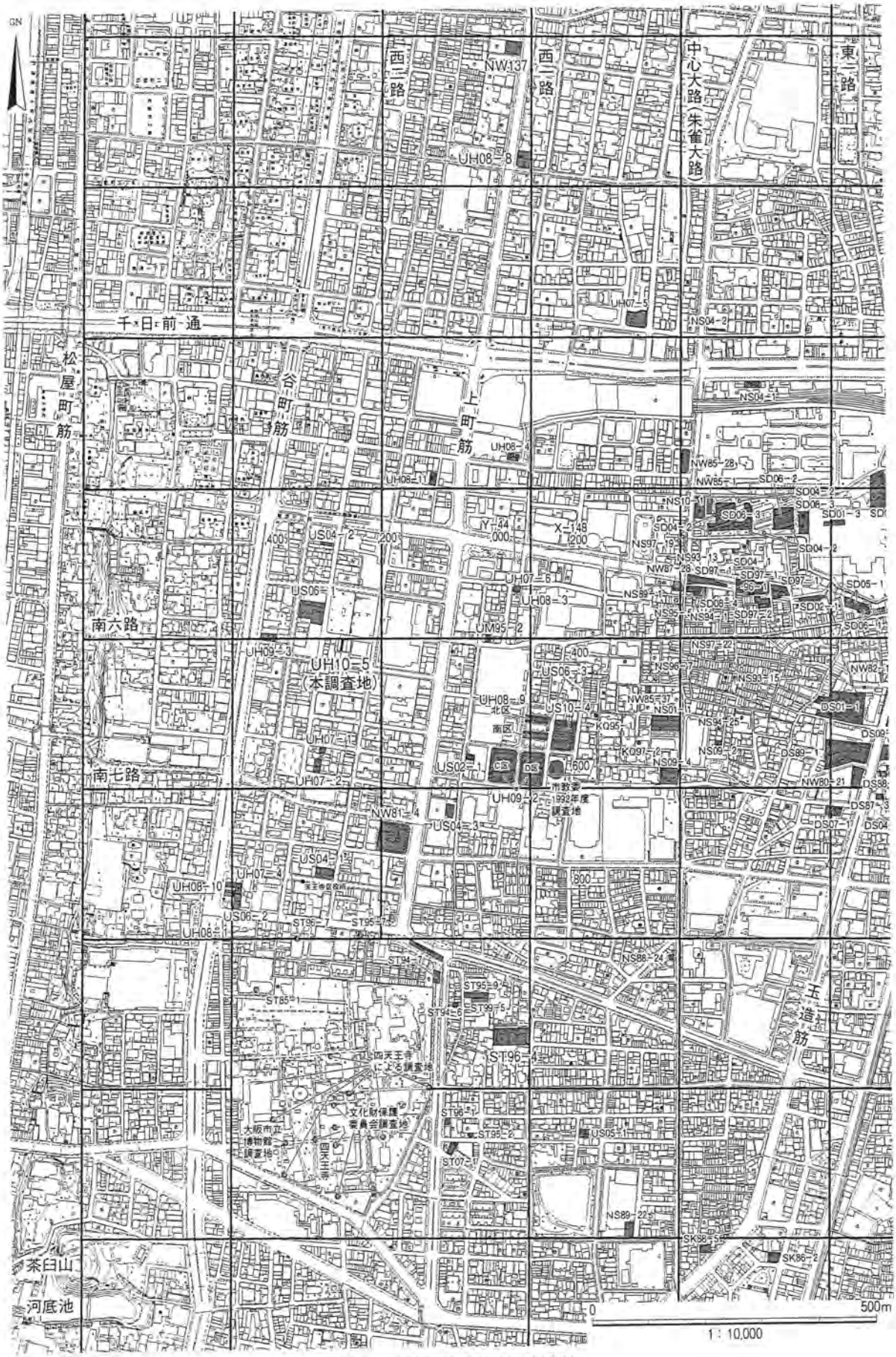


図7　上本町遺跡と推定条坊線

ii)製塩土器について

今回の調査では、量は多くないが淡路・播磨地域産、瀬戸内海西部～北部九州地域産の製塩土器が出土しており、後者の出土量が前者をやや上回っている。製塩土器はUS04－2次調査でも多量に出土している。調査報告によると、淡路・播磨地域産のものが大半で、瀬戸内海西部～北部九州地域のものは少量とされ、今回の例とは相反している。なお、上記報告によれば、『続日本紀』に四天王寺北方にあったと記載のある「難波市」と製塩土器との関連が示唆されており、今回の出土例はこれに関する新たな一資料を提示するものといえよう。

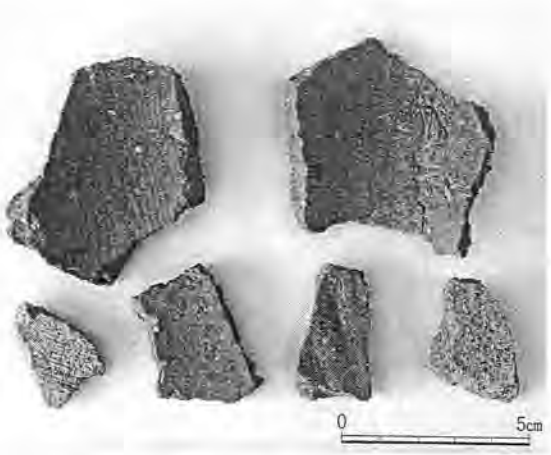


写真1　製塩土器(左上が報告番号14)

4)まとめ

この発掘では、難波京の京域内で、飛鳥時代後半～奈良時代前半の遺物を含む遺構を検出した。そのなかで、東西溝を難波京東西路に平行する条坊区画内の溝と推定した。また、東西溝に直交する柱並びを溝に架かる橋の橋脚や橋台基礎であった可能性を指摘した。また、淡路・播磨地域産、瀬戸内海西部～北部九州地域産の製塩土器を、奈良時代の「難波市」に関連する遺物とみた。

当該地周辺における難波京存続時期の遺構の検出例は徐々に増加しており、局所的にではあるが、当時の景観が描画できるようになってきている。広域にかつ鮮明に景観復元するためのより詳細な情報を、今後の調査に期待したい。

註

(1)離水した地層は、気温や水、動植物などの影響を受けて土壌に変化する。土壌はしだいに土色、腐植や礫の状態、硬さ、粒度組成、構造、水分状態、根の分布などに違いが生じて上下方向に分化し、土壌層位が形成される。地表付近で土壌動物や植物の活発な攪乱を受けて形成される土壌層位のA層は、暗色の腐植に富んでおり、人間の活動痕跡をもっともよく残している。土壌層位のB層はA層とC層(自然堆積層)との中間に位置し、C層より風化が進み、A層から溶脱した成分が集積して粘土化が進んでいる。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(UN04－2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』 pp.203－210

大阪文化財研究所2010、『大阪市天王寺区上本町遺跡発掘調査報告』Ⅰ、82ps.

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」:『難波宮址の研究』第十一　大阪市文化財協会　pp.253－265

積山洋1994、「律令制期の製塩土器と塩の流通－摂河泉出土資料を中心に－」:『ヒストリア』第141号　大阪歴史学会

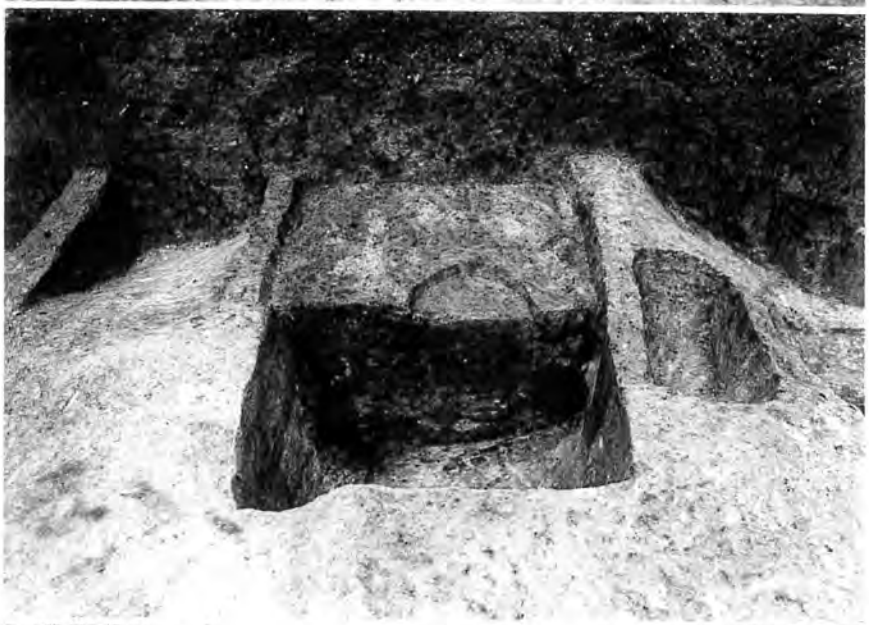
第５層上面での遺構検出状況
（北から）

溝SD05内で見つかった
布掘り柱掘形と柱痕跡
（南西から）

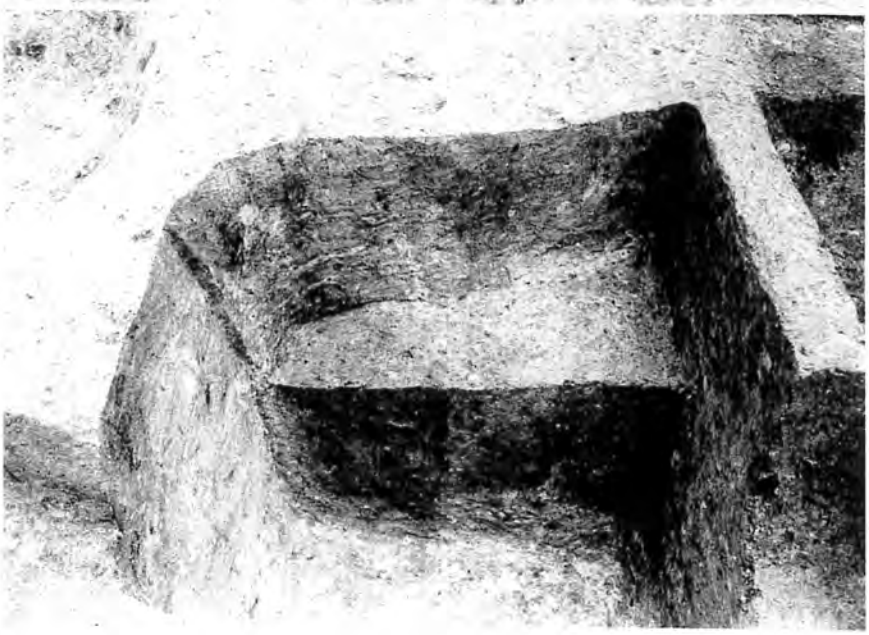
溝SD05より北側の遺構群
（北から）

SP06断面
（西から）

SP07断面
（西から）



SP13断面
（西から）



東淀川区東中島四丁目における建設工事に伴う
崇禅寺遺跡発掘調査(SZ10－１)報告書

調査個所	大阪市東淀川区東中島4丁目10－1の一部・10－11
調査面積	100㎡
調査期間	平成22年12月20日～12月28日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、杉本厚典

1)調査に至る経緯と経過

当調査地は淀川の南岸に位置し、縄文時代に形成された長柄砂堆・砂嘴上に立地する。弥生～中世の崇禅寺遺跡の西部に位置し、中島惣社からは西30mの所に位置する(図1)。1981年に淡路1丁目・東中島5丁目に所在する府営崇禅寺住宅の建替えに伴って行われた調査で、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多数出土したほか、素環頭大刀などが出土した[大阪府教育委員会1982]。また府営住宅西側で行ったSZ89－13次調査では、溝・土壙から多数の土器が出土したほか、1,600個以上のセタシジミが出土した。SZ88－4次調査では古墳時代中期の土器埋納遺構が検出され、須恵器杯身と蓋、須恵器蓋と土師器壺がそれぞれセットで置かれていた。このように、崇禅寺遺跡では弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構・遺物がこれまで見つかっている。また多くの調査地で土錘が見つかっており、漁撈活動が盛んであったことをうかがわせる。

近年、崇禅寺遺跡周辺での調査が盛んに行われており、本調査地の西側に位置するNJ10－1次調査地では、TP+0.3mで13世紀代の溝が検出された[大阪文化財研究所2011a]。さらにその西に位置するWN10－1次調査では、同じ標高で湿地の堆積層が見つかっている[大阪文化財研究所2011c]。一方、調査地南南東200mのNJ10－3次調査ではTP+2.0mで古墳時代前期の古土壌層が検出され、それ以下も砂堆が厚く堆積するようすが明らかにされている[大阪文化財研究所2011b]。これらの調査から本調査地の東側および南側に崇禅寺遺跡の集落が拡がっており、西には湿地が分布する状況が推測された。

今回の調査に先立って、大阪市教育委員会が11月18日に試掘調査を行ったところ、現地表下1.3～1.5mの深さで弥生時代～古墳時代の遺物を含む地層を確認した。

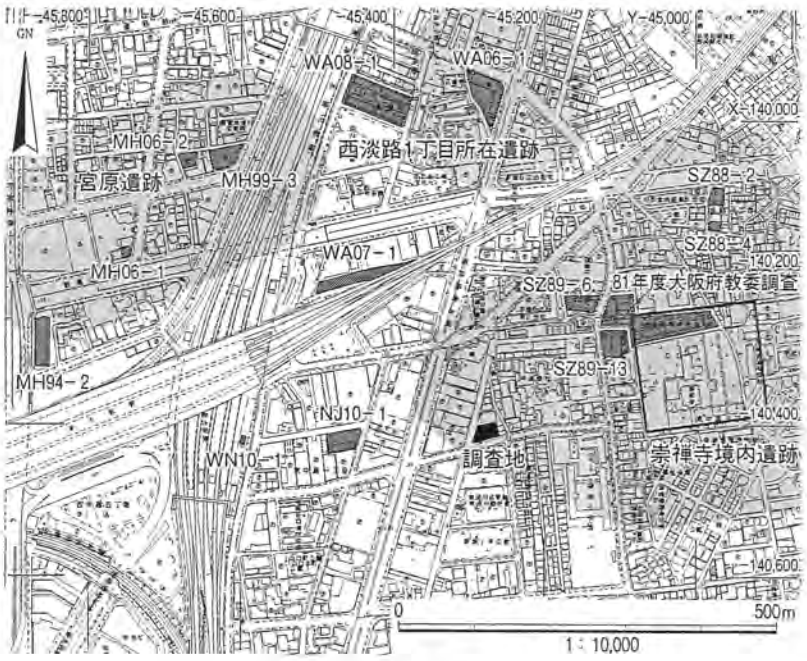


図1　調査地位置図

本調査においては南北5m×東西20mの調査区を設定した(図2)。12月20日に重機による上掘りを開始した。現地表下1.1～1.2mの近・現作土層までを重機によって除去した後、人力により遺構検出を行いながら調査を行った。12月28日に下位層を確認した後、直ちに埋戻しを行い、復旧作

図２　調査区位置図

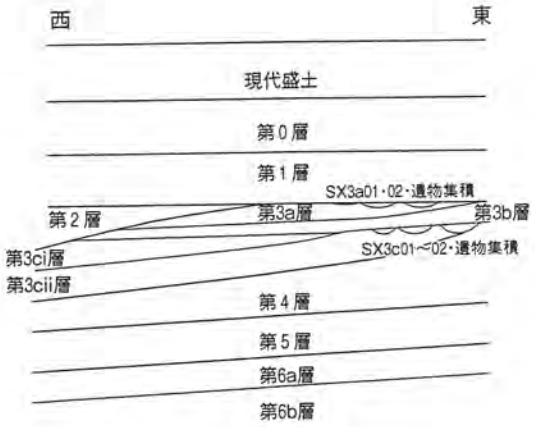


図３　地層と遺構の関係図

業を含む発掘調査を終了した。なお、本報告書では水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP＋○mと示した。また平面図は、図１が座標北を基準とし、図２・５は磁北を基準として作成した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４・６)

第０層：層厚20cmの灰色(5Y4/1)粗粒砂質粘土からなる近・現代作土層であった。

第１層：層厚10～20cmの灰色(10YR3/1)黒褐色粗粒砂質粘土からなる作土層であった。本層下面は変形が著しく、加工痕と判断された。

第２層：層厚10～40cmの黒色(10YR2/1)シルト質粘土からなる湿地性堆積層で、下部を中心に枝・葉などの腐食した植物遺体が多く含まれていた。層厚は西に向かって厚くなっていた。

第3a層：黒褐色(10YR2/2)細粒砂層である。上部は暗色化し、粘土が含まれていた。

第3b層：10～20cmのにぶい黄褐色(2.5Y6/3)細礫質細粒砂層である。調査区東部に分布していた。

写真１　砂堆西縁の自然木堆積状況(南西から)

写真２　管状土錘出土状況(北西から)

第3ci層：調査区西側に分布していた10～20cmの黒褐色(2.5Y3/1)シルト層である。細粒砂～細礫を多く含んだ淘汰の悪い泥層であった。層中には腐食した植物遺体を多く含んでいた。第3cii層によって形成された砂堆の西縁に自然木が多く堆積していた(写真１)。

第3cii層：５～20cmの暗灰黄色(2.5Y5/5)中粒～細粒砂層である。上部が暗色化しており古土壌化していた砂堆の高まりを形成しており、調査区東側に分布していた。

第４層：層厚10～20cmのにぶい黄色(2.5Y6/3)細礫で構成される水成層である。層中に細礫が含まれており、淘汰が悪かった。

第５層：平均層厚30cmのにぶい黄色(2.5Y5/3)細礫で構成される水成層であった。層中に１～３cm大の礫などが多く含まれており、上方に向かって細粒化していた。

第6a層：層厚20～30cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂層であった。

第6b層：層厚40cm以上の暗灰黄色(2.5Y6/8)細礫砂層であった。

ii)遺構と遺物

a. 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物(図５・６)

第3a層上面でSX3a01・3a02・遺物集積、第3cii層上面でSX3c01～3c03・土器集積・砂堆の肩を検出した。SX3c01～3c03はいずれも浅い窪みであり、遺構か自然による窪みか判定できなかった。第3a層上面で検出した遺物集積は５個の管状土錘がまとまって出土したものである(写真２)。明確な掘形は認められなかったため、旧地表面に散らばっていたものと判断され

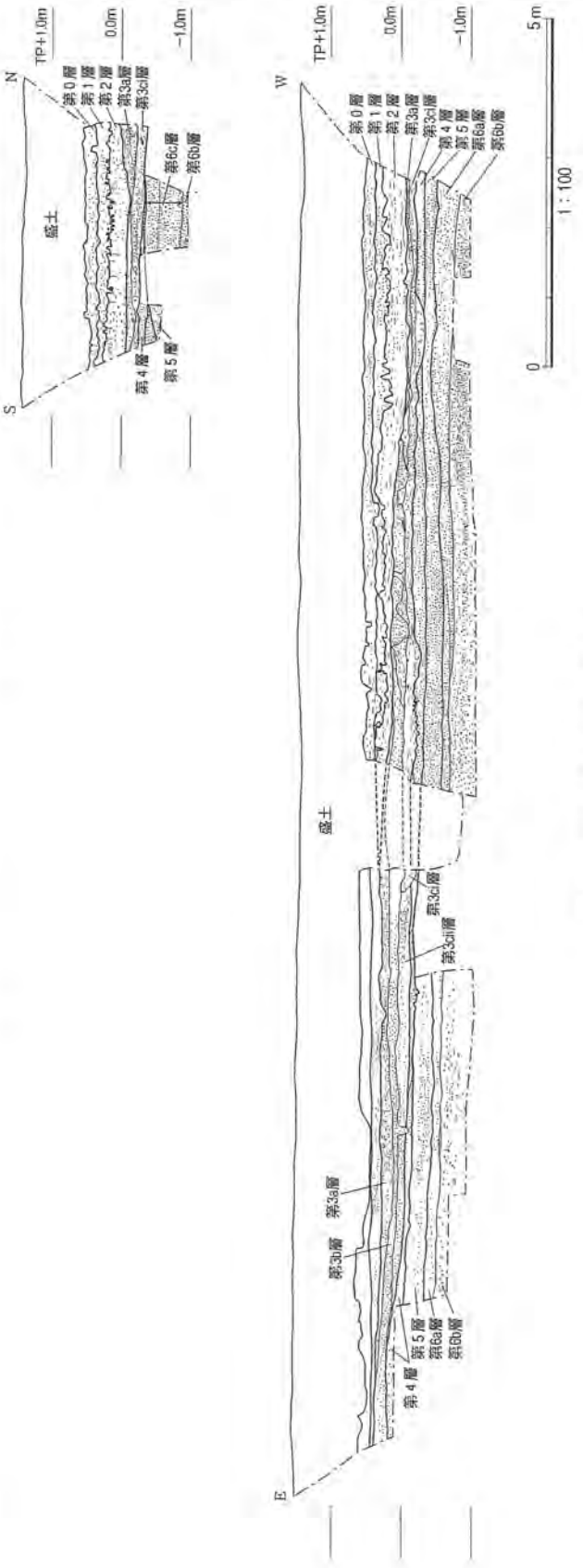


図４　西壁・南壁地層断面図

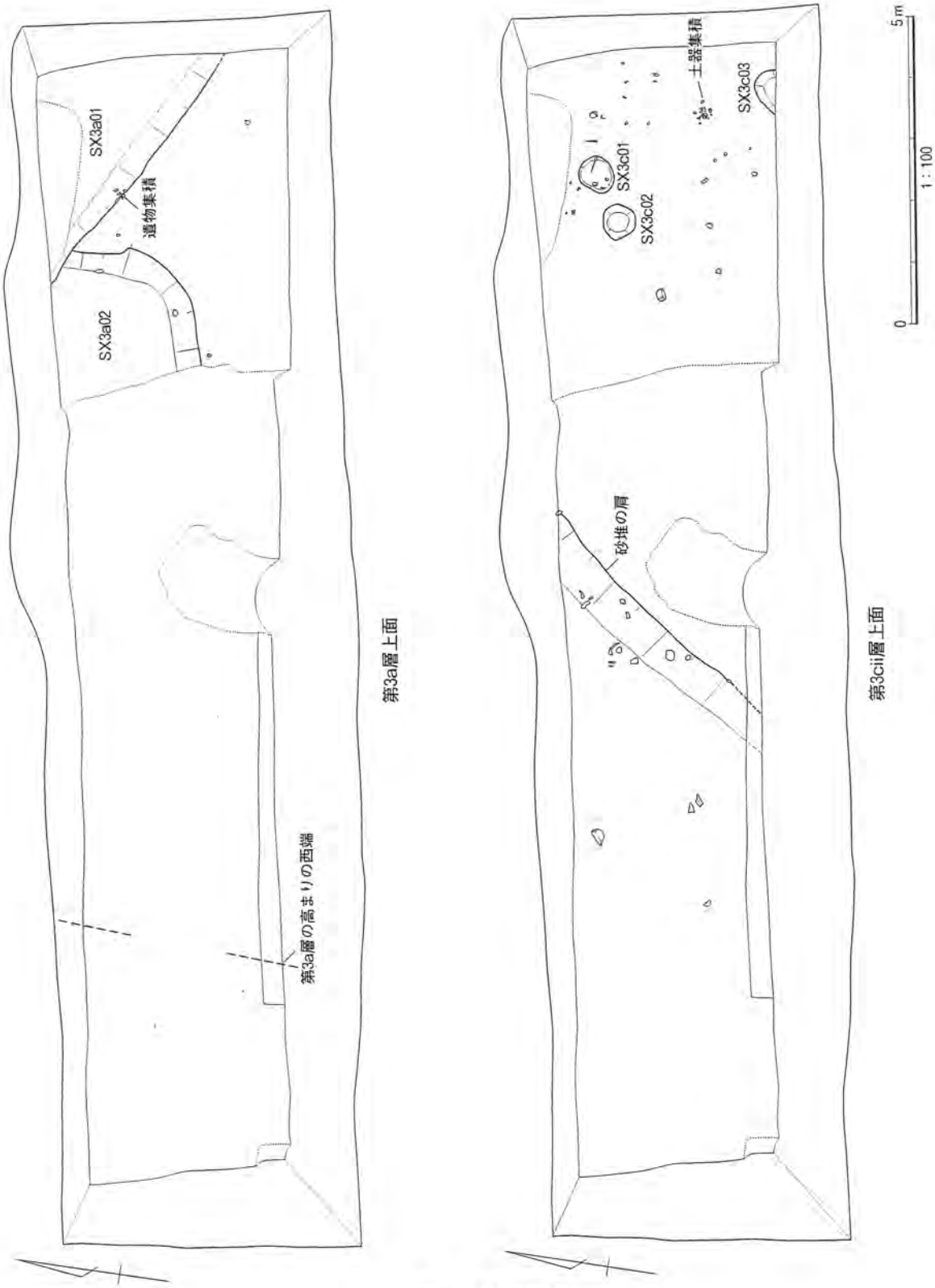


図5　遺構平面図

る。

1～6は管状土錘である。いずれも長さ7.0cm、直径3.0cm前後のもので、完形のものは重さ80～100gである。

7は庄内式甕の口縁部である。器壁は3㎜前後と薄手である。左上がりのタタキを施し、内面はハ

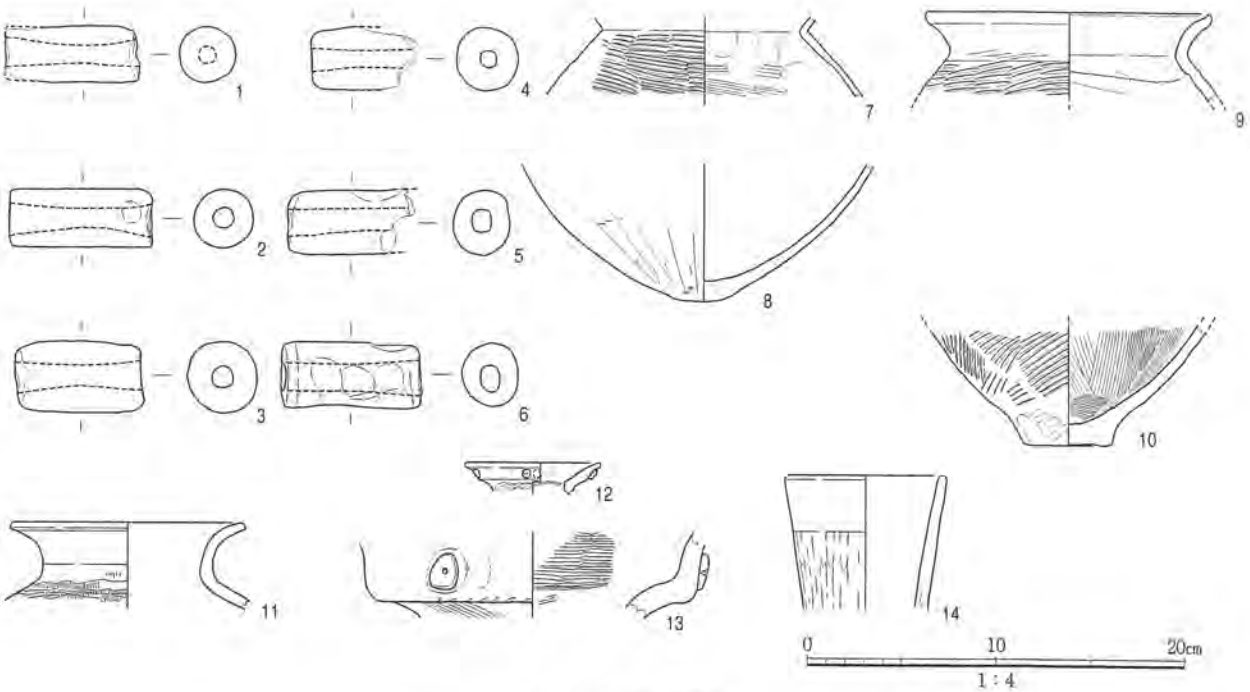


図6　出土遺物実測図

遺物集積(1～5)、第3a層(8・12)、第3b層(7)、第3ci層(6・9～11・13)、第4層(14)

ケ調整後にユビオサエを施す。非生駒西麓産の胎土であり、タタキ目の方向も左上りであることから、大和地域の可能性がある。

8も庄内式甕の底部である。外面を縦方向にケズリを施して整える。底部がやや厚みを持っていることから、庄内式期前半のものとみられる。9は弥生時代後期の甕であり、器壁は6㎜前後と厚手である。10は9と同じ弥生時代後期の甕の底部である。11は広口短頸壺の口縁部である。外面をタタキで整形した後、縦方向のハケで整える。12はミニチュアの二重口縁壺の口縁部である。2個1対の円形浮文を4箇所に施していたとみられる。外面は斜方向のミガキで整える。13は二重口縁壺の口縁部である。口縁外反部分に刻目を施す。内面は黒色物質を塗布後、丁寧にミガキを施し、外面はナデで整える。14は長頸壺の頸部である。縦方向のミガキで外面を整える。弥生時代後期後葉に属する。

3)まとめ

今回の調査地では調査区の東半部分で南北方向に延びる砂堆を検出した。この砂堆は部分的に土壌化しており、古土壌中には弥生時代後期から古墳時代前期の浅い落込みや遺物の集積が認められた。

一方、調査区の西半部分は東よりも0.2m低くなっており、TP 0.0m付近において湿地状の環境が拡がっていた。この湿地性堆積層から貝殻や生痕化石などは認められなかったが、梶山・市原の研究によると当時、調査地の西側は陸化しておらず海水域であったとされている[梶山彦太郎・市原実1986]。

これらの知見から、本調査地は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、干潟に面した砂堆上に立地しており、漁撈活動を中心とした生活が営まれていたようすが復元される。崇禅寺遺跡ではこれまで砂堆上で弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が数多く検出されてきたが、今回の調査で当時

の集落の西縁の一部を明らかにすることができたといえる。

この弥生時代後期～古墳時代前期の生活面は古代から中世にかけて自然に埋没し、中世から近世にかけては耕作地として用いられていた。本調査地では明確な遺構は検出できなかったがNJ10－１次調査地では13世紀代の溝が見つかっている。嘉吉２(1442)年に崇禅寺が創建され、付近の土地開発も盛んになったと推測されるが、その実態や景観について明らかにするためには、さらなる調査の蓄積が必要とされよう。

参考文献

大阪市文化財協会1999、『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪府教育委員会1982、『崇禅寺遺跡発掘調査概要』Ⅰ

大阪文化財研究所2011a、『東淀川区東中島一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(NJ10－１)報告書』

大阪文化財研究所2011b、『東淀川区東中島三丁目における埋蔵文化財試掘調査(NJ10－３)報告書』

大阪文化財研究所2011c、『東淀川区西中島五丁目における建設工事に伴う西中島遺跡C地点発掘調査（WN10－１）報告書』

梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』青木書店

第3cii 層（弥生時代後期～古墳時代前期）上面の状況（北西から）

第3ci 層（弥生時代後期～古墳時代前期）上面の状況（南西から）

第3a 層（弥生時代後期～古墳時代前期）上面の状況（東から）

旭区新森五丁目における建設工事に伴う
森小路遺跡発掘調査(MS10－２)報告書

調 査 個 所　大阪市旭区新森５丁目56－1
調 査 面 積　21㎡
調 査 期 間　平成23年３月16日～３月22日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、平田洋司、小倉徹也

1）調査に至る経緯と経過

森小路遺跡は、弥生時代中期および古墳時代を主体とする複合遺跡として知られており、新森五丁目を中心とする直径800mの範囲が遺跡に指定されている。本調査地はその新森五丁目に位置し、周辺ではMS89－41次やMS93－35次のほか、数多くの調査を行っている（図１）。MS89－41次では弥生時代中期～古墳時代の小穴や土壙が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]。MS93－35次では地層が良好に残されており、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式および古墳時代と畿内第Ⅱ・Ⅲ様式の遺構面が検出され、また、ほぼ原形をとどめた状態で銅剣形石剣が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1995]。

建設工事に伴って試掘調査を実施したところ、現地表下0.9mで弥生土器や古代以前とみられる遺構面が検出された。この試掘結果を受け、工事に先立って発掘調査を実施することになった。

調査は当初、設計35㎡の調査区を設定して行う予定であったが、残土置き場確保が困難であることから大阪市教育委員会の指示を受け、敷地北寄りに21㎡（７ｍ×３ｍ）の調査区を設定して2011年３月16日から開始した（図２）。遺構・遺物の検出に努めるとともに、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録保存作業を行い、３月22日に現地における作業を完了した。

本報告書で用いた水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）で、図中ではTPと略記した。また、方位は座標北を基準にしている。

2）調査の結果

ｉ）層序

図１　調査地位置図

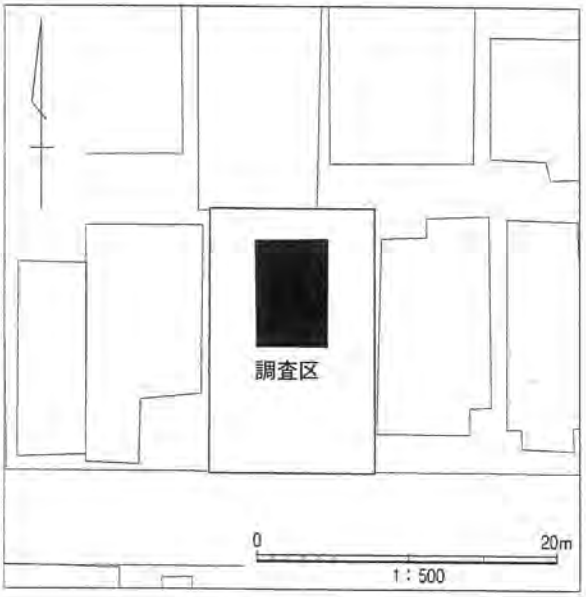


図２　調査区配置図

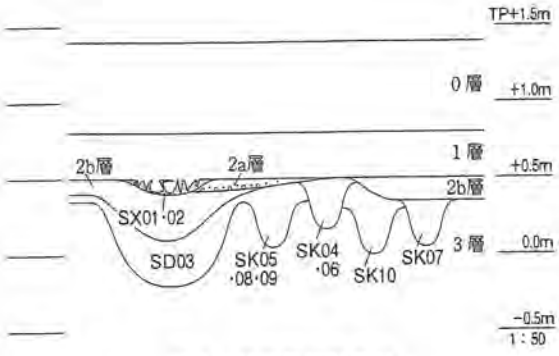


図3　地層模式断面図

調査地における現地表の標高はTP＋1.4m前後で、ほぼ平坦であった。現地表下1.6m(TP－0.2m)までの地層を観察した。その結果を以下に記し、地層と遺構の関係を図3に示す。

第0層は現代盛土層で、層厚は55～70cmである。

第1層は近世以降の作土層で、褐灰色の極細粒～細粒砂質シルトからなり、炭を含む。層厚は20～35cmで、調査区全域に分布する。下位層との層理面は極めて明瞭であった。また、下面には著しい生物擾乱が認められ、後述する調査区南部のSX01・02付近で顕著であった。本層からは肥前磁器が出土している。

第2層は第2a層と第2b層に区分した。第2a層は中礫の目立つ灰黄色の中粒～極粗粒砂からなり、層厚は5cm以下で、調査区西部に部分的に分布する。第2b層は灰オリーブ褐色のシルト質細粒～中粒砂からなり、層厚は40cm以下で、調査区東半部～南部に分布する(図4右参照)。

第3層はわずかにシルトを含む灰黄色の細粒～中粒砂からなり、酸化黒雲母がよく目立つ。層厚は60cm以上で、堆積構造は明瞭でなかった。本層上面でSD03・SK04～10を検出した。

ii)遺構と遺物 註1)

平面的な調査は第3層上面および重機掘削後の第2層上面で行った。第2層上面および第3層上面遺構平面図を図4に、出土遺物実測図を図5に示す。

a．弥生時代の遺構と遺物

第3層上面で溝SD03、土壙SK04～10を検出した。

SD03　検出した幅は2.5m、深さは0.3～0.6mで、方向は北東－南西であった。埋土は上部と下部に区分でき、下部は黒褐色ないしオリーブ黒色細粒砂質シルトからなり、暗灰黄色粗粒～中粒砂の薄層を挟む。上部はオリーブ黒色細粒砂質シルト～シルト質細粒砂からなり、下底に灰黄色中粒～粗粒砂が観察され、最上部付近はやや暗色化していた。

埋土から以下に記す弥生土器および石製遺物が出土した。1は筒状の頸部から口縁部が大きく開く広口壺で、口縁部の外端面にキザミメを施す。口縁部の内外面の調整は横方向の密なヘラミガキで、頸部の調整は内外面とも左上がりあるいは横方向のハケである。頸部の外面には櫛描直線文間に扇形文を加えた流水文がある。2は口縁部がわずかに内湾して立つ鉢で、体部の調整は外面が左から右上がりのハケ、内面はヨコナデである。口縁部の調整は内外面ともヨコナデで、上端面が浅く凹む。3は櫛描波状文のある壺体部片の外縁部に打撃を加えて加工した径7.0～7.3cmの円板である。紡錘車の未製品であろう。4は口縁部が緩やかに短く開く甕で、体部の調整は外面が縦方向のハケ、内面は縦方向のナデである。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ調整で、器体の外面に煤が、内面には炭化物が付着している。5は口縁部が頸部から一旦短く立ったあと、短く開く甕である。口縁部の外面はタテハケのあとヨコナデ調整しているが、内面には粗い横方向のハケメが残る。体部の内面の調整は縦方向のナデである。6は口縁部が緩やかに外反する甕で、口縁部を丸くおさめる。体部の調整は外面

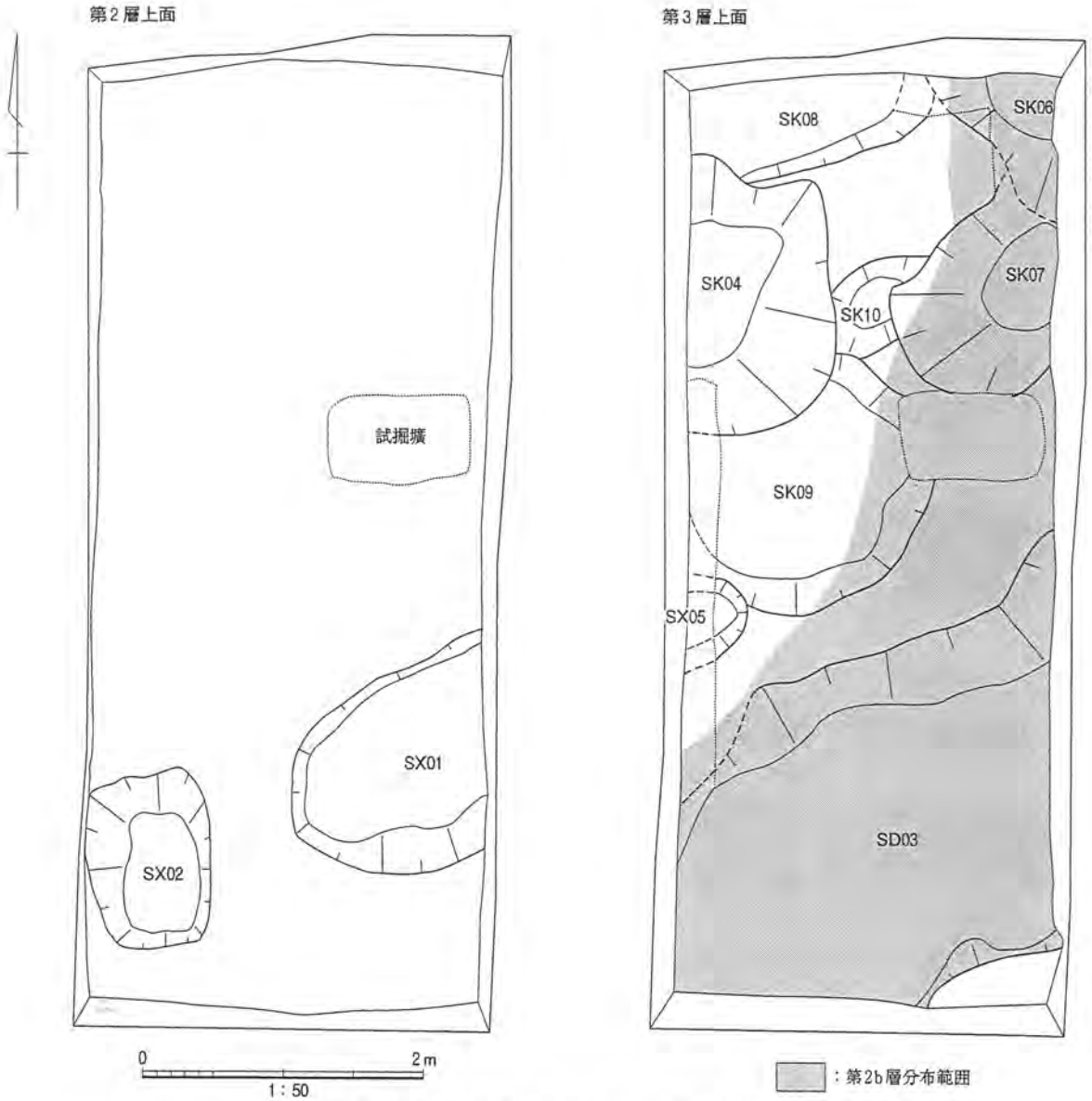


図４　第２層上面および第３層上面遺構平面図

が縦方向のハケで、内面は横方向のヘラミガキである。器体の外面には煤が厚く付着している。

７は背が丸味のある両刃の外湾刃磨製石庖丁の破片で、器体の内外面に敲打痕がある。紐孔が３個あることから再加工品であろう。石材は緑色片岩である。

以上の遺物のうち、１・２・４～６は弥生時代中期前葉(摂津Ⅱ－２・３様式)に属するものであろう。これらの他にも胎土に結晶片岩粒を含む紀伊産の甕の体部片、弥生時代中期中葉に属する土器片も出土していることから、溝は弥生時代中期中葉頃には機能を失ったものと考えられる。なお、磨製石庖丁７は破片ではあるが、形態からみて弥生時代中期前葉に属する可能性がある。

SK04　西北部において確認した土壙で、その西部分は調査範囲外であった。確認した東西長は1.1m、南北長は2.0m、残存する深さは0.6mで、後述するSK08～10を切っていた。埋土は下部が炭をわずかに含む黒褐色細粒砂質シルトからなり、暗灰黄色粗粒～中粒砂の薄層を挟む。上部が炭を含む黒褐色細粒砂質シルト～シルト質細粒砂からなる。

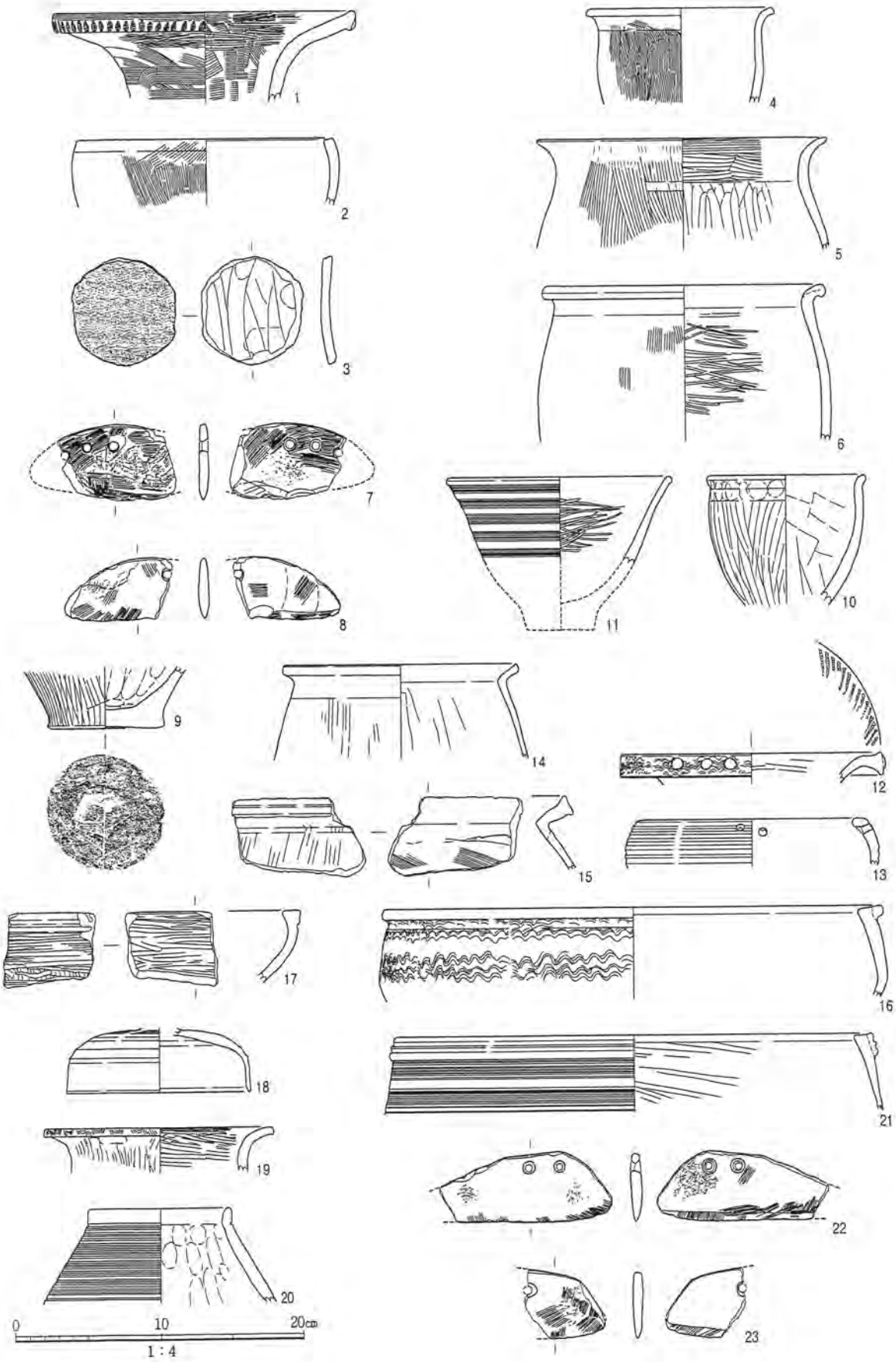


図5　出土遺物実測図

SD03(1～7)、SK04(8・9)、SK09(10・11)、SX01(12～18)、SX02(19)、第0層(20～23)

埋土から以下に記す8・9の石製遺物および弥生土器が出土した。8は刃部が両刃の直線刃半月形の磨製石庖丁で、紐孔が1孔ある。刃部には使用痕が見られる。石材は緑色片岩である。

9は甕の底部で、器面調整は外面が粗いタテハケ、内面は縦方向のナデである。底部の裏面がわずかに凹んでおり、木葉の圧痕がある。

SK05　西部において確認した土壙で、その西部分は調査範囲外であった。確認した東西幅は0.4m、南北長は0.7m、残存する深さは0.3mで、後述するSK09を切っていた。埋土は黒褐色細粒砂質シルト～シルト質細粒砂からなる。

SK06　東北端において確認した土壙で、その北部分および東部分は調査範囲外であった。確認した東西長は1.0m、南北長は1.1m、残存する深さは0.5mで、後述するSK07・08を切っていた。埋土は下部が炭を含む黒褐色シルト質細粒砂で、遺構側壁付近には肩部から洗い出されたとみられる細粒～中粒砂のラミナが観察された。上部は炭を含む黒褐色シルト質細粒砂～細粒砂質シルトからなる。

SK07　東北部において確認した北東－南西方向の土壙で、その北部分はSK06に切られ、東部分は調査範囲外であった。確認した長さは1.4m、幅は1.1m、残存する深さは0.5mであった。埋土は下部が炭を含む黒褐色シルト質細粒砂からなり、上部が灰オリーブ褐色のシルト質細粒砂からなる。

SK08　北部において確認した土壙で、その北部分および西部分は調査範囲外であった。確認した東西長は1.3m、南北長は0.8m、残存する深さは0.4mで、SK04・06に切られていた。埋土は黒褐色細粒砂質シルトからなる。

SK09　中央部において確認した土壙で、その西部分は調査範囲外であった。確認した東西長は1.7m、南北長は1.8m、残存する深さは0.3mで、北部分はSK04に、西南部分はSK05に切られていた。埋土はオリーブ黒色細粒砂質シルトからなり、灰色シルトの偽礫を含む。下底付近に炭が目立つ。

埋土から10・11の弥生土器が出土した。10は底部を欠損した口縁部が短く開く小型の甕である。器体の調整は外面が縦方向のナデ、内面も左上がりのナデである。11は体部から口縁部が外上方に直線的に開く鉢である。口縁部から体部の下半にかけて5帯の櫛描直線文が巡る。体部内面の調整は横方向のヘラミガキである。

SK10　中央部において確認した土壙で、東西をSK04・07・09に切られていた。確認した長さは1.0m、幅は0.5m、残存する深さは0.2mであった。埋土は黒褐色細粒砂質シルトからなる。

以上、SK04・06～09の埋土から弥生中期前葉(摂津第Ⅱ－2・3様式)に属する弥生土器が出土し、SK05・10の埋土から遺物は出土していないが、埋土の層相から他の土壙と同時期、弥生時代中期前葉のものと考えられた。

b．古墳時代の遺構と遺物

第2層上面でSX01・02を検出した。

SX01　東南部において確認した遺構で、その東北部分は調査範囲外であった。検出した長さは1.5m、幅は1.4mで、残存する深さは0.1～0.2mであった。埋土はわずかに細粒砂を含む黒色粘土質シルトである。下底付近には著しい生物擾乱が観察された。

埋土からは弥生土器12～17および須恵器18が出土している。ここでは弥生土器から記述する。12は

一旦開いた口縁部を上下に拡張した広口壺である。口縁部の外端面に櫛描波状文のあと、3個一対の円形浮文を貼り付けている。13は口縁部が内傾する無頸壺で、口縁部の外端面に6条以上の凹線文が巡る。器体の外面から内面に向けて紐孔を穿つ。14は口縁部が頸部から短く開く甕で、口縁端部をわずかに上方に肥厚している。体部の調整は外面が縦方向の粗いハケ、内面は左上がりのナデである。15は頸部から短く開く口縁部の上下端を肥厚した甕である。口縁部の調整は内外面ともヨコナデで、体部の調整は外面が粗いタテハケ、内面は左上がりのハケである。16は内傾する体部の上端に粘土紐を足して低い段状口縁部を形成した大型鉢である。口縁部の下端から体部外面の中程にかけて2条一対の櫛描波状が2帯巡る。17は内傾する体部の上端に粘土紐を足して、低い段状口縁部を形成した鉢の細片である。器体の調整は内外面とも横方向のヘラミガキを密に施している。

18は天井部中央のつまみを欠損した有蓋高杯の蓋で、天井部の2／3以上を時計回りにヘラケズリ調整している。口縁部と天井部の境界の稜線は低い。

以上の土器のうち、12～17は弥生時代中期後葉(摂津Ⅳ－1～3様式)に、須恵器18はTK23型式に属するものであろう。

SX02　西南部において確認した遺構で、東西長0.9m、南北長1.2m、残存する深さは0.1～0.2mであった。埋土および下底付近の状況はSX01と同様で、埋土から古墳時代中期後半の須恵器のほか、弥生土器19が出土した。19は口縁部が緩やかに水平に開く甕で、口縁部の内外の調整は外面が粗いタテハケのあと、横方向のナデ、内面は粗いヨコハケである。口縁部の外端面に櫛描波状文が巡る。弥生時代中期前葉(摂津Ⅱ－2様式)に属するものである。

このほかに第0層ではあるが、以下の遺物が出土している。20は内傾した体部から短い口縁部が立つ無頸壺である。器体の外面に4帯以上の櫛描直線文が巡る。体部の内面をユビオサエで整えている。21は内傾する体部の上端に粘土紐を足して低い段状口縁部を形成した大型鉢で、口縁部の外端面には2条の凹線文が巡る。体部の外面には2帯以上の櫛描直線文が巡る。

22・23は両刃の直線刃磨製石庖丁で、22は2個、23は1個の紐孔を表裏面から穿つ。22の表裏面には敲打痕が、22・23の刃部には使用痕が見られる。石材は22・23ともに緑色片岩である。

以上の遺物の時期は、20が弥生時代中期前葉(摂津Ⅱ－2・3様式)、21は同中期後葉(摂津Ⅳ－1・2様式)に、磨製石庖丁22・23は形態からみて弥生時代中期後葉に属するものであろう。

3)まとめ

今回の調査で得られた成果を以下にまとめる。

弥生時代中期前葉に属する溝1条、土壙8基を検出し、同時期の弥生土器が多量に出土した。建物などの住居に係わる痕跡は確認できなかったが、弥生時代中期前葉の集落はより北側へと拡がっていたと推定できよう。また、多くの弥生時代中期の遺構、遺物のほか、古墳時代中期後半の遺物も出土したことから、この時期の集落が近隣に存在したと推定される。

註)

(1)出土遺物の執筆は、同文化財研究所統括研究員 田中清美による。

引用・参考文献

森田克行1990、「摂津地域」:『弥生土器の様式と編年』近畿地方Ⅱ、pp.97−146

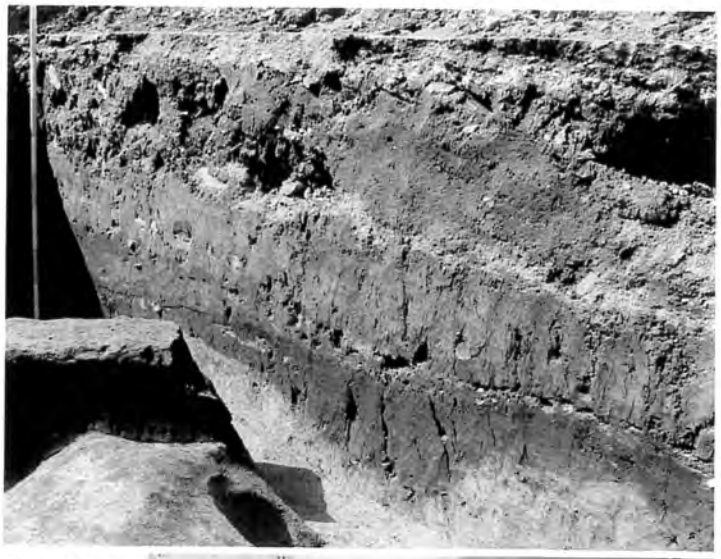
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1991、「金崎氏による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS89−41)略報」:『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.115−120

1995、「仲宗根建設工事に伴う発掘調査(MS93−35)」:『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.62−74

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』I

西壁地層断面
（南半部：北東から）



第３層上面検出状況
（南から）

SD03断面
（東壁：北西から）

阿倍野区阿倍野筋四丁目における建設工事に伴う
阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS10－１)報告書

調 査 個 所　大阪市阿倍野区阿倍野筋４丁目12－12
調 査 面 積　10㎡
調 査 期 間　平成22年９月15日～９月18日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、杉本厚典

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は阿倍野筋南遺跡の東南部にあり、阿倍野筋より東に位置する(図1・2)。調査地の近隣では、東でAS06－2次調査、南ではAS99－3・4次調査が行われている。AS06－2次調査地では庄内式期・布留式期の竪穴住居がそれぞれ1基検出され、古墳時代中期の土壙や柱穴なども検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。この土壙からはTK208型式の須恵器甕、無蓋高杯などとともに碧玉製の管玉が出土している。またAS99－3・4次調査地では、布留式期古段階の竪穴住居1基と、それより古いとみられる竪穴住居2基、古墳時代後期に埋没する溝1条が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001]。

2010年9月10日に大阪市教育委員会が試掘調査を実施し、現地表下0.6～0.9mにかけて古墳時代の包含層を検出したことから本調査となった。調査は2010年9月15日に着手した。敷地の北側に調査区を設定し、重機で表土を0.6～1.0m除去した後、人力による遺構の掘削を行った。検出した遺構・出土遺物の記録を行い、9月18日に調査を終了し、埋戻し・整地作業を行った。

本報告書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPとした。また、図1は座標北、図2・4は磁北を基準に作成した。

2)調査の結果

図1　調査地位置図

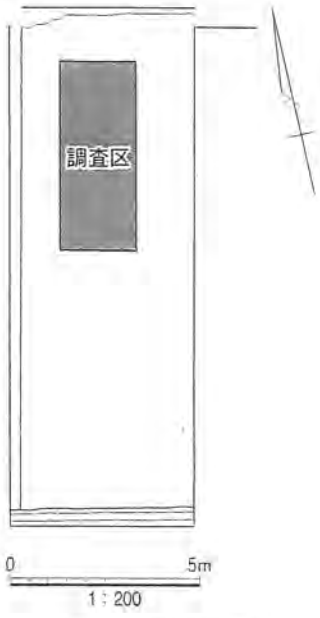


図2　調査区位置図

i)層序(図3・4)

第1層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトで構成される近現代の整地層であり、層厚は10～20cmであった。

第2a層：層厚15～30cmで、にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂質細粒砂で構成される作土層である。下面で鋤溝を検出した。

第2b層：層厚は5～16cmで、オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質細粒砂で構成される作土層である。第2a層と同様に、下面で鋤溝を検出した。

第3層：黒褐色(10YR2/3)細粒砂質シルトで構成される整地層で古土壌化していた。層厚10～25cmで弥生時代後期～古墳時代前期の土器、古墳時代の須恵器甕破片などの遺物が含まれていた。

第4a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土よりなる古土壌で層厚10～14cmであった。本層上面で庄内式期、古代の遺構を検出した。本層下部には植物の根の痕跡が顕著であった。

第4b層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土よりなる段丘構成層であった。層厚は30cm以上であった。

ii)遺構と遺物

第4a層上面で庄内式期とみられる竪穴住居と、第3層中より古代の瓦を含む土壙を検出した(図5・6)

庄内式期の遺構

SB401　調査区南側で検出したベッド状遺構をもつ竪穴住居である。遺構の配置は磁

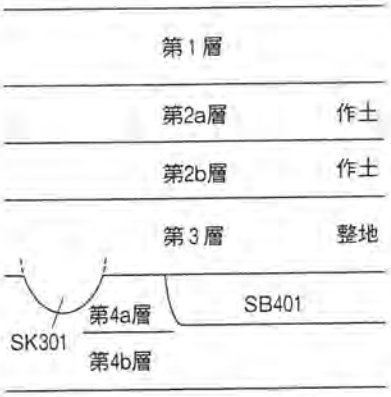


図3　地層と遺構の関係図

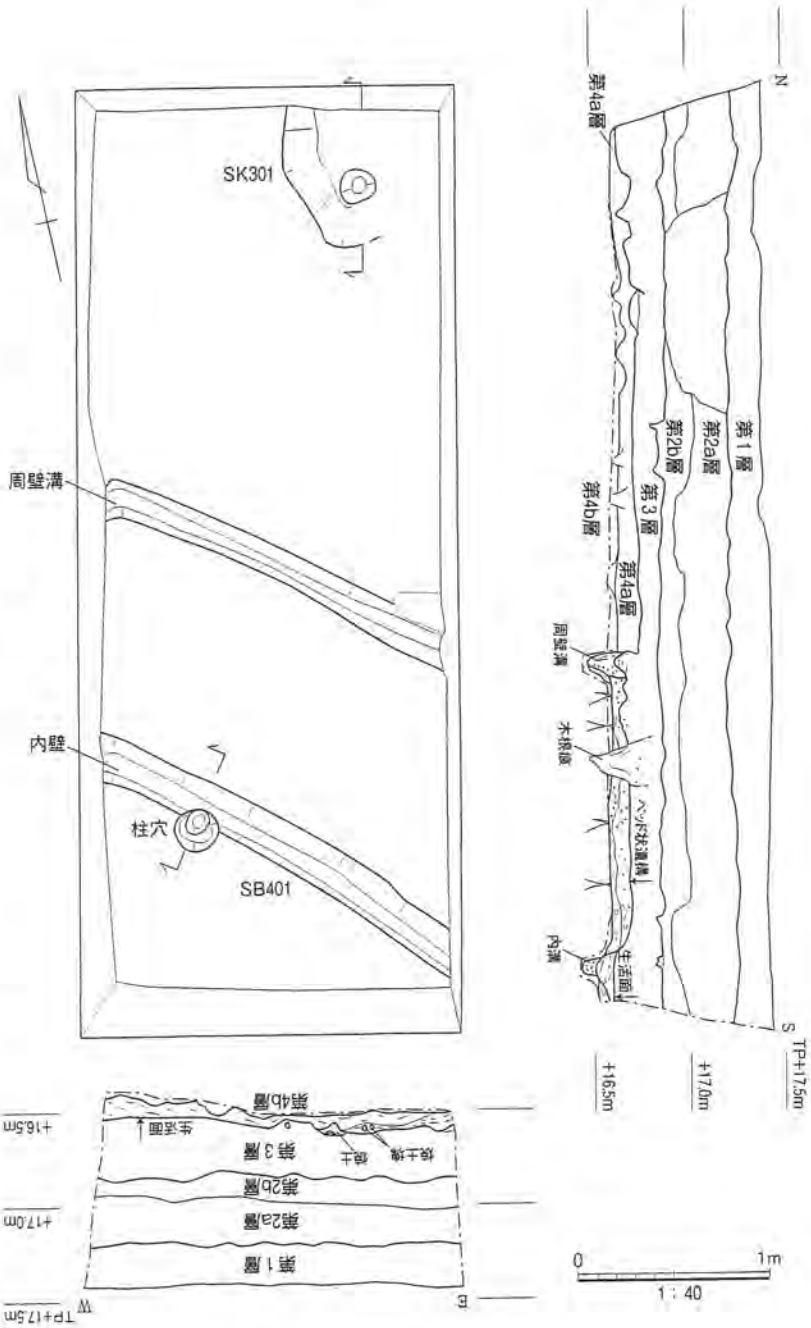


図4　地層断面図・遺構平面図

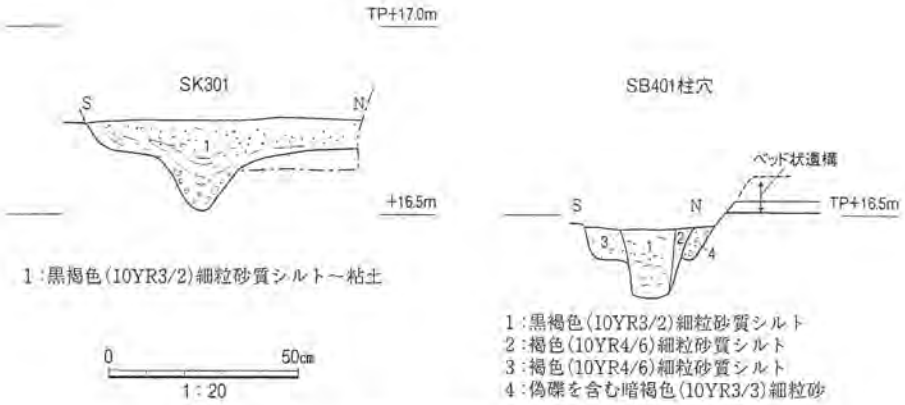


図５　遺構断面図

北から45度偏る。一辺２m以上、深さはベッド状遺構上面まで0.06m、床面まで0.14m、加工面まで0.21mであった。遺構の大部分が調査区外に拡がっているとみられるため、今回の調査部分は、本来の竪穴住居の北西隅部分にあたるとみられる。

竪穴住居の埋土は炭化材や２～３cm大の炭、焼土の細片を含む黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土であり、それを除去したところで、周壁溝･ベッド状遺構、焼土などを検出した。周壁溝は幅0.16～0.18m、深さ0.12mであった。溝内部に板や編物などやそれらの痕跡は認められなかった。

ベッド状遺構は基部が1.26m、上部が1.10m、高さが0.12mであった。ベッド状遺構は第4b層に由来する１～５cm大の偽礫を含んだにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土で構成されていた。この黄褐色シルト質粘土層は２層に分かれ、下層には加工に伴って起こされた３～５cm大の偽礫が含まれていたのに対し、上層の偽礫は１～３cmと細かくなっていた。

焼土は南壁断面において検出した。東西0.1mにわたって分布しており、その周辺に２～３cmの偽礫となった焼土が認められた。焼土の拡がりはさらに調査区より南に延びているとみられ、地床炉の可能性がある。またこの焼土の北側でふせた状態で壺底部片７が出土しており、土器片・焼土片が拡がるこの面を生活面と判断した。

さらに生活面のベースとなっていた黒褐色(10YR3/2)～褐色(10YR4/6)の細粒砂質シルトを除去し、加工面まで下げると柱穴とベッド状遺構の内側に溝(以下、内溝と呼称する)を検出した。柱穴は直径0.30m、深さ0.20mであり、柱痕跡あるいは抜き取りに伴うものとみられる直径0.10～0.15mの黒褐色(10YR3/2)粘土層が認められた。内溝は幅0.12～0.18m、深さ0.12mで、埋土には第4b層に由来する３～５cm大の偽礫が含まれていた。掘削後、短い時間で埋め戻されたとみられる。また柱穴はこの内溝を切って設けられていた。

なお、竪穴住居の周囲には周堤帯は検出できなかった。

遺物は２・４～８が出土した。２は甕底部である。底面に木葉の圧痕が認められる。４は波状文を施した土器片である。13条の櫛描波状文が２帯以上施される。二重口縁壺の口縁部とみられる。５はミニチュア土器である。内外面には指頭圧痕が認められる。６は小型壺の胴部下半である。外面に縦方向のミガキが施される。７は中型の壺の底部である。外面をナデ、内面を縦方向のハケで整える。底面に木葉の圧痕とみられるものが認められる。８は高杯脚柱部である。低い脚部に復元される。透

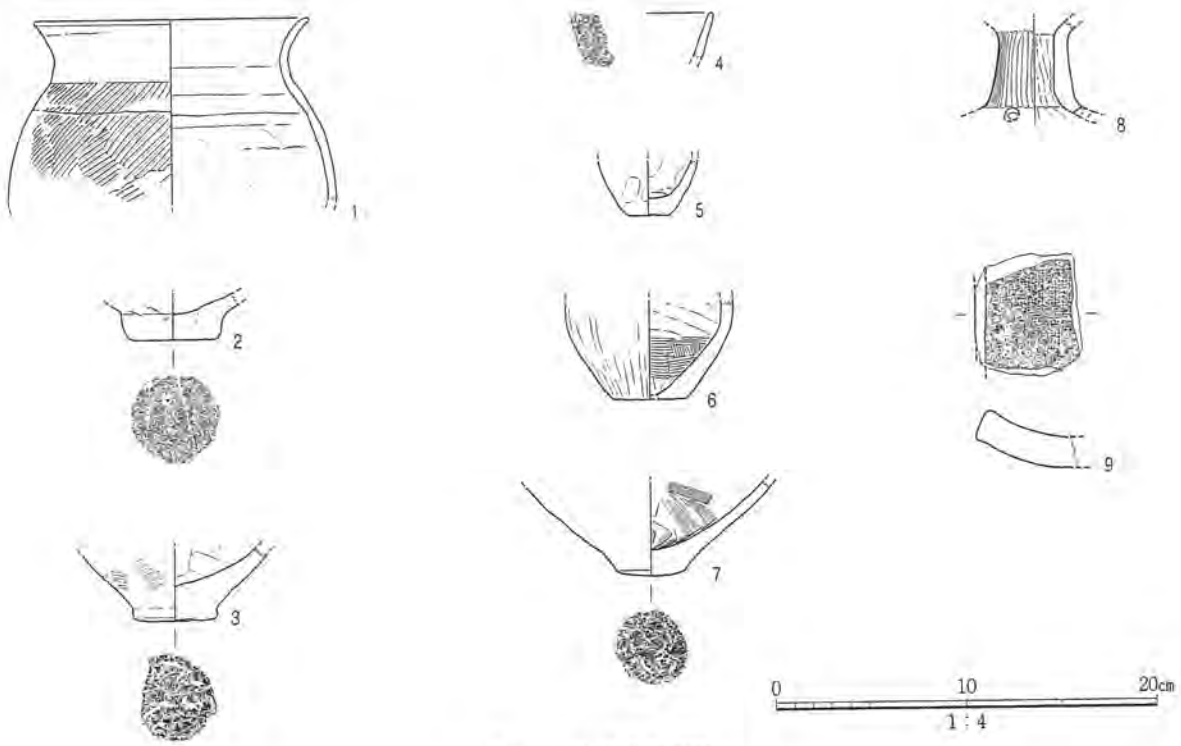


図6　出土遺物実測図

第3層(1・3)、SB401(2・4～8)、SK301(9)

孔は3箇所に復元され、外面を縦方向のミガキで整える。内面にはシボリ痕が認められる。

高杯の脚部が短く、壺の底部が狭いといった特徴から弥生時代後期後葉から庄内式期にかけての資料とみられる。

古代の遺構

SK301　調査区北側で検出した土壙である。排水用のトレンチのため遺構の東半を削ってしまった。南北0.75m以上、東西0.52m以上であり、深さ0.26mであった。黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトで、第4b層に由来する1～3㎝大の偽礫が認められた。埋土中より古代の平瓦片9が出土した。凹面には布目痕が顕著である。

第3層の遺物

1は甕の上半部である。外面はタタキ、内面はナデで整える。肩部がやや張り出した形状で、粘土帯の接合痕が顕著である。3は甕底部である。植物茎の圧痕が認められる。

3)まとめ

本調査地では弥生時代後期後葉から庄内式期のものとみられる竪穴住居1基と、古代の土壙1基を検出した。

調査地周辺では庄内式期から布留式期にかけての竪穴住居・掘立柱建物が多数検出されており、南北500m、東西400mにわたってこの時代の集落が営まれていたことが明らかにされてきた。

阿倍野筋南遺跡では調査地区によって建物や出土品に特徴が認められる。阿倍野筋の西側のAS98－7次調査地では、庄内式期から布留式期にかけては数少ない総柱の大型掘立柱建物[杉本厚典1999]

が検出され、その南側に隣接するAS97－８次調査地では一辺９ｍの大型竪穴住居が見つかっており、朱を入れた土器が出土している[辻美紀1998]。

一方、その周辺では大型掘立柱建物は見つかっておらず、規模が明らかにされている竪穴住居は一辺が４～６ｍ程度と標準的な大きさのものが多い。またいずれの調査地でも漁撈を営んでいたことを示唆する土錘などの遺物が出土しているが、遺跡の北側に当るAS98－２次調査地では土錘、飯蛸壺、鉄製のヤスなど漁撈関連の遺物の出土が特に顕著である[寺井誠1998]。

こういった建物規模や形状の違いや出土遺物の傾向を整理すると、阿倍野筋南遺跡の古墳時代集落について、中心から周辺へかけての集落内構造や居住域ごとの生業差の把握が可能になると考えられる。今回の調査は面積は限られていたが阿倍野筋南遺跡の集落復元にとって貴重な知見をもたらしてくれたといえる。

参考文献

大阪市文化財協会1999、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、「駒井勝治氏による建設工事に伴う阿倍野筋遺跡発掘調査(AS99－4)報告書」:『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.75－79

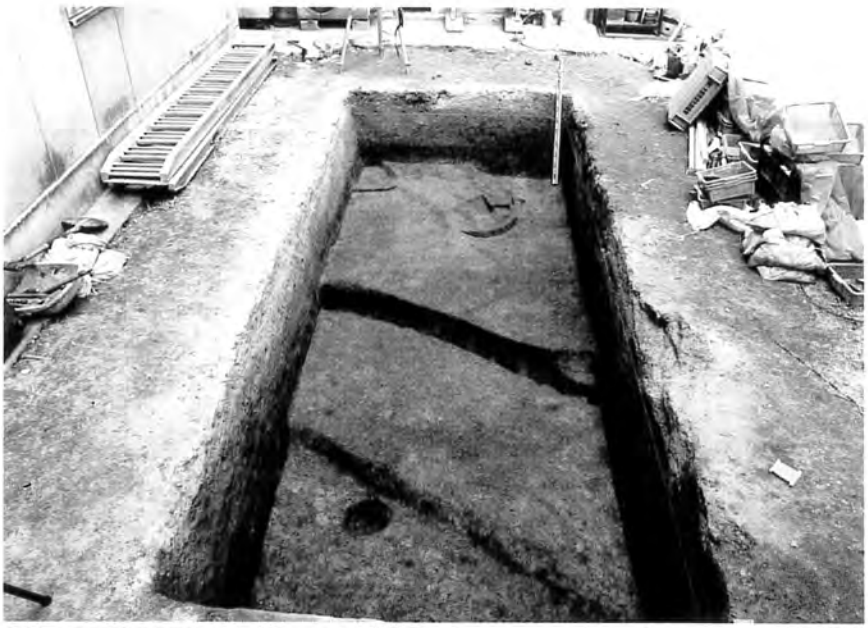
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS06－２)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.87－95

杉本厚典1999、「阿倍野筋遺跡で見つかった大型掘立柱建物跡」:大阪市文化財協会編『葦火』78号、pp.４・５

辻美紀1998、「大型竪穴住居と朱入り土器」:大阪市文化財協会編『葦火』73号、pp.４・５

寺井誠1998、「海を見おろすムラ阿倍野筋遺跡」:大阪市文化財協会編『葦火』77号、pp.４・５

調査区全景
（南から）



SB401機能面
（南西から）

SB401加工面
（南西から）

住吉区墨江二丁目における建設工事に伴う
住吉行宮跡発掘調査(SN10－１)報告書

調 査 個 所　大阪市住吉区墨江２丁目41－１
調 査 面 積　17.5㎡
調 査 期 間　平成22年９月15日～９月17日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、絹川一徳

1)調査に至る経緯と経過

調査地は国史跡に指定されている住吉行宮跡の北東側に位置する(図1)。一帯は上町台地南部の西縁に当たり、南・西側に向って緩やかに傾斜する地形となっている。調査地の北側には住吉大社、西側には細江川(細井川)河口の入江を利用した住吉津と呼ばれる古代の港が存在し、この港と大和を繋ぐ古代の街道である磯歯津道も設置されていたことから、周囲は交通の要衝であった。調査地近傍に所在する住吉行宮跡は住吉大社の社家であった津守氏の居館(正印殿)が置かれた場所で、南北朝時代に南朝第2代の後村上天皇が当地に滞在し、1352(正平7)年から1368(正平23)年にかけて二度にわたり行宮が営まれたとされる[三浦圭一1988]。

調査地周辺では、既往の調査としてSM88－4次調査、SN95－1・98－5・05－1次調査が実施されており、古代～中世の遺物包含層が確認されている(図1)。このうち、SN95－1・98－5・05－1次調査では古代の柱穴が検出され、SM88－4、SN95－1・98－5・05－1次調査で中世の井戸・柱穴・土壙・溝などの遺構が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991・2000・2006]。

2010年8月に当該地において宅地建設工事が計画され、その後に実施された大阪市教育委員会の試掘調査では、地表下約10cmの地山直上で中世の遺物を包含した遺構が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。

調査は2010年9月15日に開始した。敷地中央に南北5.8m、東西3mの調査区(図2)を設定し、現

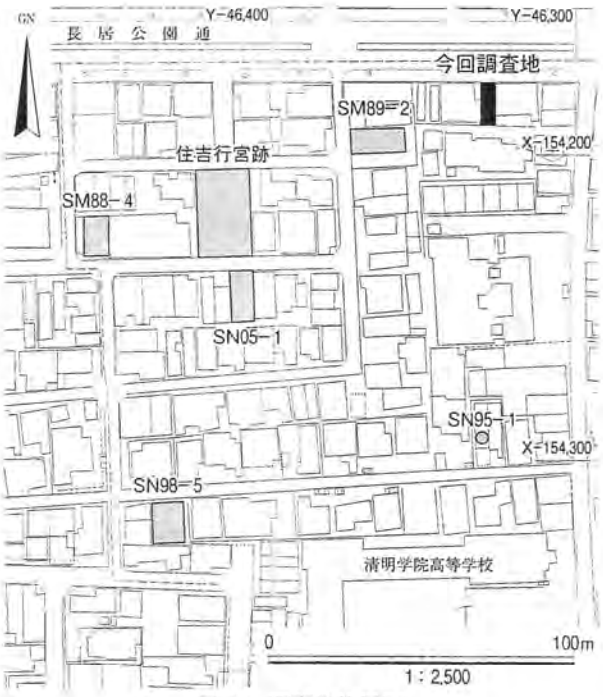


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

代盛土を重機により掘削した。その後、地山上面で遺構の検出と掘削作業を行い、併せて実測・写真撮影などの記録作業を実施した。9月17日に埋戻しを行い、現地におけるすべての作業を完了した。なお、本報告で用いた水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、挿図中ではTP+○mと記した。また、方位は座標北を基準としている。

2)調査の結果

i)層序

調査地の現地表はほぼ平坦で標高は+4.5mであった。全域で現代盛土層が10～20cmの厚さで堆積しており、その下位は明褐色砂礫質粘土の更新統堆積物で地山層であった。地山層の上部は後世の開発により大きく削平を受けており、本来、その上位に堆積していた地層もすべて失われていた。このため、すべての遺構検出作業は地山層上面で行った。

ii)遺構と遺物(図3・4)

a.中世の遺構と遺物

調査区の南半において井戸SE02を検出した(図3)。井戸掘形・井戸側内・井戸側抜取穴で構成される。

SE02の掘形(図3遺構平面図のアミかけ部分)は、調査区外へ拡がるため正確な形状や規模は判然としないが、一辺2.9mの隅丸方形とみられる。埋土(図3遺構断面図の地層12)はにぶい黄色の細粒砂を少し含むシルトまたは粘土質シルトであった。一般住宅予定地であったため、掘削深度に制限があって部分的な掘削に留めざるをえなかった。遺物は出土しなかった。

SE02の井戸側抜取穴は径2.5mの円形の土壙である。埋土(図3遺構断面図の地層1～10)は細礫を含む細粒～中粒砂混り粘土質シルトを主とする。埋土からは土器とともに数cm径の河原石が多数出土した。遺物は埋土各層から出土し、遺物の年代も共通していることから、この抜取穴は一度に埋められたものと考えられる。また、河原石は井戸の周囲に敷かれていた可能性が高い。

抜取穴の下底で一辺1.0mの井戸側内とみられる方形土壙を検出した。埋土(図3遺構断面図の地層11)は灰黄褐色粘土質粗粒砂であり、抜取穴の埋土とは異なっていた。土壙形状も抜取穴の掘削による変形をあまり受けていないと思われる。したがって、本来存在したであろう井戸側の形状も方形であった可能性が高い。掘削深度の制限のためTP+2.7m付近で掘削を止めたが、少なくとも停止面より深さは0.5m以上ある。遺物は出土しなかった。

一方、上述した抜取穴からは多数の遺物が出土した。出土遺物には土師器小皿・皿・椀・羽釜、瓦器小皿・椀、瓦質土器三足羽釜、擂鉢、青磁碗・瓦のほか、全体形状は復元できなかったが、風炉の可能性がある箱形の瓦質土器がある。年代はほぼ13世紀後半のものに限られている。図4に一部を図示した。1は瓦器小皿、2～4は土師器小皿で、いずれも手づくねにより成形されている。5～9は回転台を用いて成形された土師器小皿で、いずれも底面に糸切り痕がみられる。10～14は土師器皿で、口縁・体部の内外面をナデにより調整している。いずれも手づくねによる成形である。11・12は体部

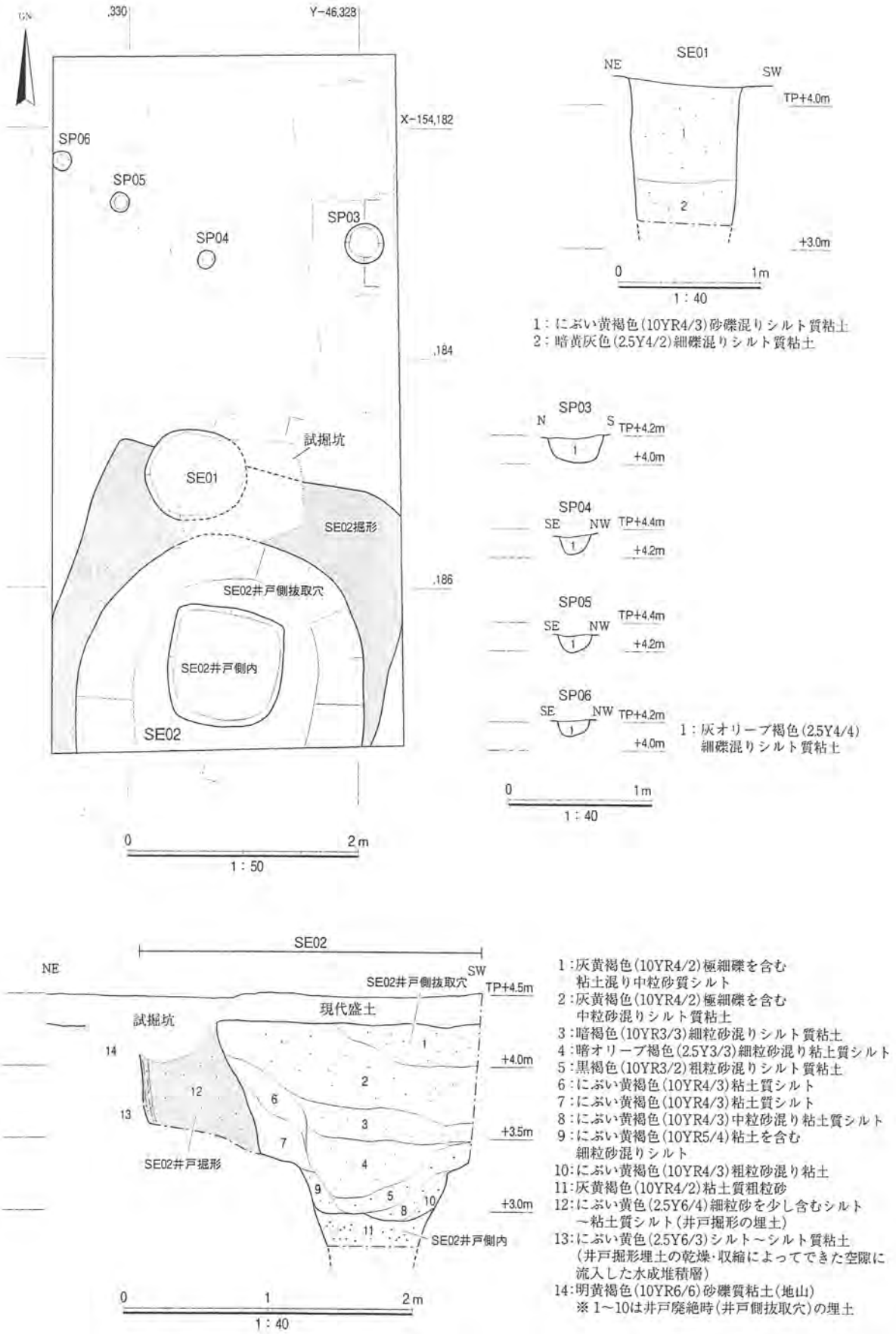

GN
,330
Y−46,328
X−154,182
,184
,186
SP06
SP05
SP04
SP03
試掘坑
SE01
SE02掘形
SE02井戸側抜取穴
SE02井戸側内
SE02
0
2m
1：50
SE01
NE
SW
TP+4.0m
+3.0m
0
1m
1：40
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混りシルト質粘土
2：暗黄灰色(2.5Y4/2)細礫混りシルト質粘土
SP03
N
S
TP+4.2m
+4.0m
SP04
SE
NW
TP+4.4m
+4.2m
SP05
SE
NW
TP+4.4m
+4.2m
SP06
SE
NW
TP+4.2m
+4.0m
1：灰オリーブ褐色(2.5Y4/4)
細礫混りシルト質粘土
0
1m
1：40
SE02
NE
SW
SE02井戸側抜取穴
TP+4.5m
現代盛土
試掘坑
+4.0m
+3.5m
+3.0m
SE02井戸掘形
SE02井戸側内
0
1
2m
1：40
1：灰黄褐色(10YR4/2)極細礫を含む
粘土混り中粒砂質シルト
2：灰黄褐色(10YR4/2)極細礫を含む
中粒砂混りシルト質粘土
3：暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト質粘土
4：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂混り粘土質シルト
5：黒褐色(10YR3/2)粗粒砂混りシルト質粘土
6：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
8：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂混り粘土質シルト
9：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土を含む
細粒砂混りシルト
10：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混り粘土
11：灰黄褐色(10YR4/2)粘土質粗粒砂
12：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂を少し含むシルト
～粘土質シルト(井戸掘形の埋土)
13：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト～シルト質粘土
(井戸掘形埋土の乾燥・収縮によってできた空隙に
流入した水成堆積層)
14：明黄褐色(10YR6/6)砂礫質粘土(地山)
※1～10は井戸廃絶時(井戸側抜取穴)の埋土

図3　遺構平面・断面図

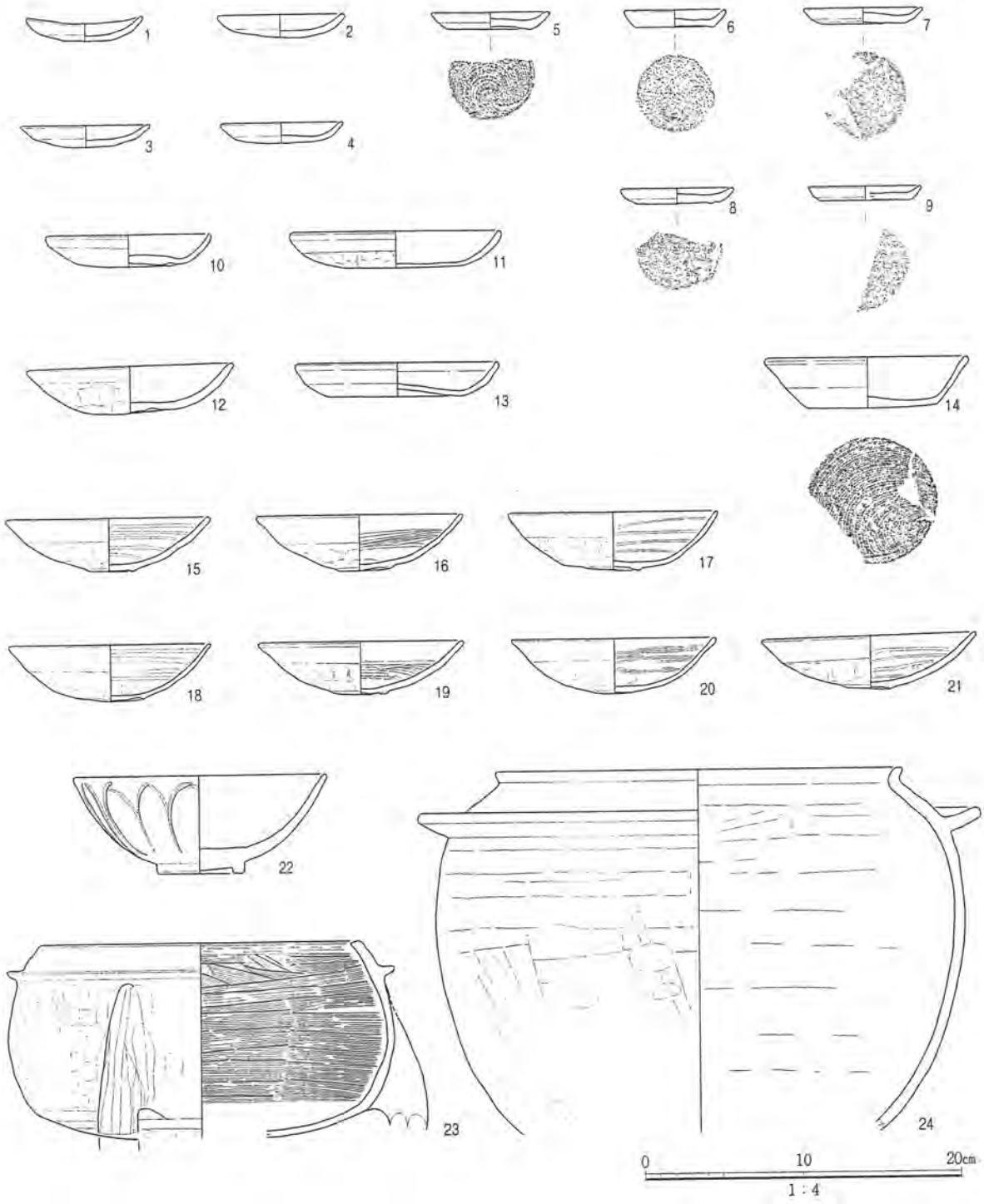


図４　出土遺物実測図

外面下部にユビオサエを残す。14は回転台成形で底面に糸切り痕がみられる。15～21は瓦器椀である。いずれも器径13.0cm前後、器高3.5cm前後で、高台は薄く平らな粘土紐を貼り付けたもので、ほぼ痕跡程度に消失したものもある。体部内面のヘラミガキは連結輪状または渦巻き状で間隔も疎らなものが多い。また、18～21には見込み部分に粗い平行線状や格子状の暗文が認められる。いずれも年代は13世紀後半とみられる。22は龍泉窯系の青磁碗で、体部外面に蓮弁文が施されている。23は瓦質土器三足羽釜、24は土師器羽釜である。

ｂ．近世・近代の遺構

調査区の北半で小穴SP03～06、中央南寄りで井戸SE01を検出した。SP03～06の埋土はいずれも共通しており、灰オリーブ褐色細礫混りシルト質粘土である。調査区中央南半で部分的に認められた同じ地層から近世磁器の細片が出土した。SE01はTP＋3.1mまで掘削した。埋土は上下２層に分かれ、上層がにぶい黄褐色砂礫混りシルト質粘土、下層が暗黄灰色礫混りシルト質粘土である。近代磁器が出土した。SP03～06は近世、SE01は近代の遺構とみられる。

3）まとめ

今回の調査では13世紀後半に廃絶された中世の井戸SE02を検出した。大型で方形の掘形をもち、廃絶時に掘られた井戸側抜取穴からは土器とともに数cm径の河原石が多数出土したことから、井戸の周囲は礫敷であったと推定される。井戸の規模が大きく、住吉行宮跡にも近接した場所であるため、津守氏の居館の敷地内に設置されていた井戸であった可能性がある。

住吉行宮はもともと津守氏の居館内にあった正印殿が後村上天皇の在所として整備されたものである。井戸SE02は正印殿の推定地から北東の方向にある。この方位はちょうど艮(うしとら)で、陰陽道では鬼門に当たり、特に井戸の設置は忌避されていた。こうした事情も勘案すると、井戸SE02は津守氏の正印殿が設置され、徐々に整備が進んでいく過程で廃絶された可能性も考えられよう。

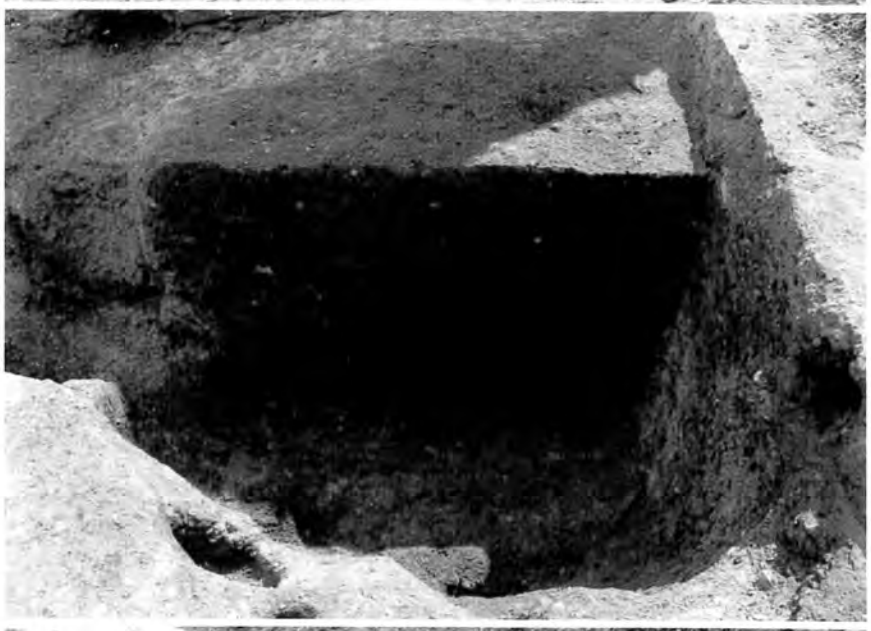
今回の調査は小規模ながら、住吉行宮跡の実態を知るための貴重な知見とともに、今後の周辺地域の調査のための手がかりが得られたといえる。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
1991、「木下邸建設に伴う住吉行宮跡発掘調査(SM89－２)略報」：『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.233－238
2000、「一二氏による建設工事に伴う発掘調査(SN98－５)」：『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.103－107
2006、「住吉行宮跡発掘調査(SN05－１)報告書」：『平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
三浦圭一1988、「第三章第一節 南北朝内乱の幕開き」：新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第２巻

地山上面遺構検出状況
（南東から）

SE02断面
（西から）



SE02完掘状況
（北から）

東住吉区駒川一丁目における建設工事に伴う
桑津遺跡発掘調査(KW10－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区駒川１丁目93－２・94
調 査 面 積　30㎡
調 査 期 間　平成22年７月12日～７月16日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

桑津遺跡は大阪市東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に拡がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、戦前から大阪府下を代表する弥生時代の遺跡として知られている。今回調査地は桑津遺跡の南部で、田辺廃寺推定寺域の東辺から東方80mに位置する(図1)。西隣のKW91−18次調査では、縄文時代草創期の有茎尖頭器、飛鳥時代の井戸、平安時代末の建物・井戸・溝が検出され、その南方のKW91−26次調査でも有茎尖頭器が出土している。建設工事に伴い、大阪市教育委員会が本年6月

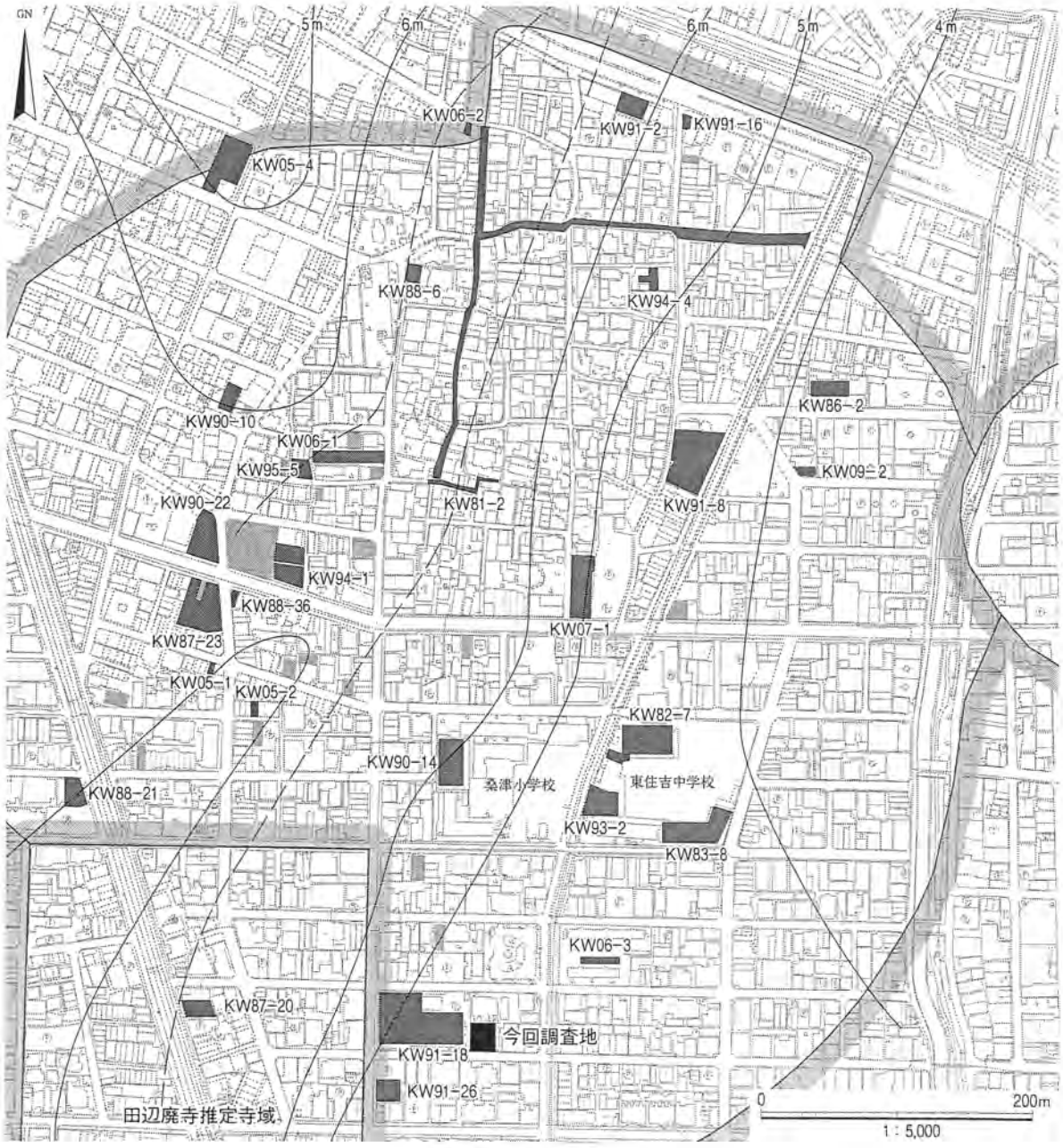


図1　調査地位置図

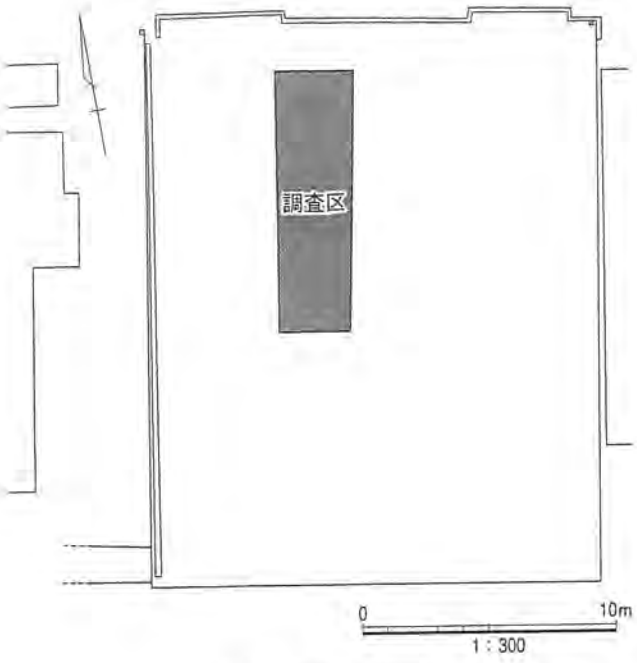


図２　調査区位置図

14日に敷地南端で試掘調査を行ったところ、中世の遺構・遺物が確認されたことから、本調査を実施することになった。敷地内の西側に東西３m、南北10mの調査区(図２)を設定して、７月12日から本調査を行った。調査はまず、重機によって現代盛土層と現代作土層を除去した後、以下を人力によって掘下げた。遺構や遺物の検出に努めるとともに、それらの平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。７月16日に資材を撤収し、現地におけるすべての作業を完了した。

平面図は図１のみ座標北を、その他は磁北を基準にしている。標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP＋○mとした。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

第０層：層厚20cmの現代盛土層である。

第１層：層厚10cmのオリーブ褐色(2.5Y4/1)中粒砂質シルトからなる現代作土層である。

第２層：層厚10～15cmの褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトの作土層である。調査区の一部にしか遺存しない。

第３層：層厚15～25cmの粘土質シルトの作土層で、上部はオリーブ褐色(2.5Y4/4)、下部は還元されてにぶい黄褐色(10YR4/5)を呈する。瓦器椀・青磁碗・布目瓦など、古代～中世の遺物を含む。

第４層：黄褐色(2.5Y5/3)粘土の地山層で、上面に踏込み跡が見られる。

ii)遺構と遺物

ａ．古代の遺構(図５～７)

SB201　SP201～204からなる掘立柱建物で、棟を北東－南西方向にとり、真東に対して北に35度

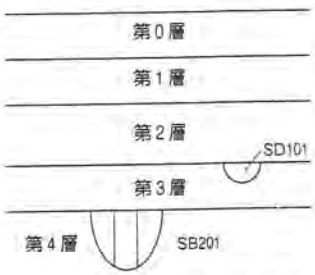


図３　地層と遺構の関係図

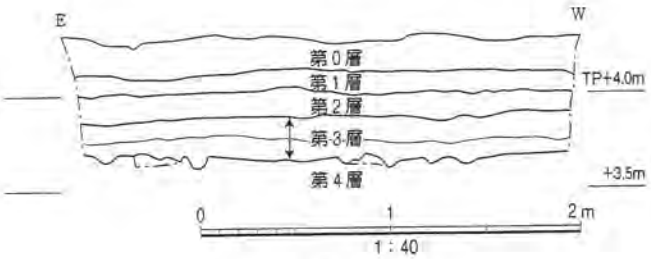


図５　南壁地層断面図

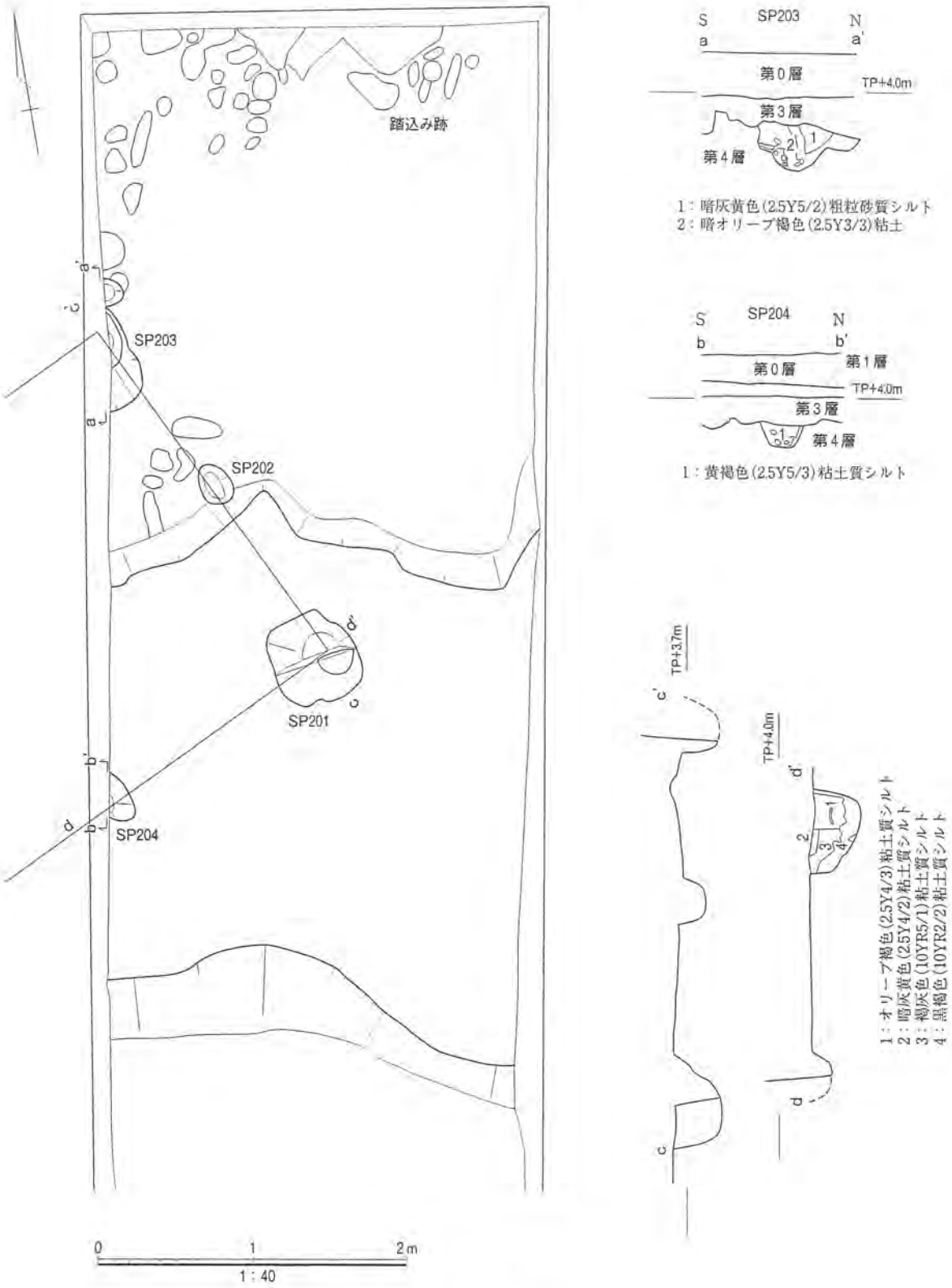


図5　第4層上面遺構平断面図

振る。梁側は2間(2.6m)、桁側は1間(1.7m)以上で、妻柱掘形が直径0.3m、桁側柱掘形も直径0.3mと小振りな建物である。SP201の柱痕跡は直径0.2mで、柱除去後に落ち込む形で、飛鳥Ⅰ(7世紀前半)

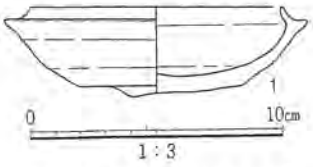


図6　SP201柱痕跡出土土器

の須恵器杯身1(図6)が出土した。

b．中世の遺構(図7、写真上)

SD101　真東に対してやや北に振る幅0.3m、深さ0.1m、長さ3.0m以上の溝で、10YR4/4褐色中粒砂質シルトを埋土とする。

また第4層上面で多数の踏込み跡を検出した。これは第3層を作土とした頃のものである。調査区中央の第4層上面に見られる帯状の高まりは、高さ0.05～0.10mを測り、やはり第3層を作土とした耕作時の踏込みである。

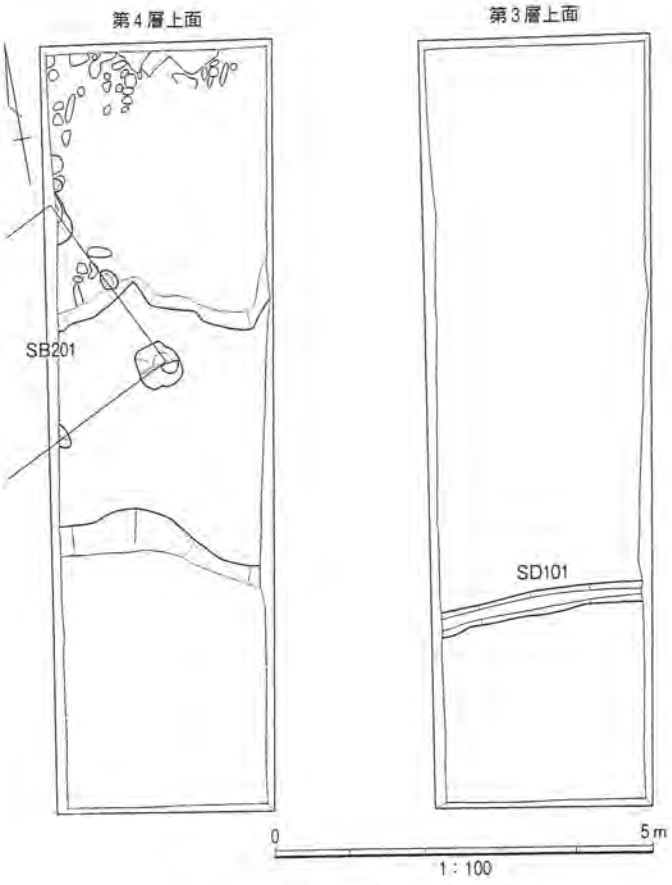


図7　第4層・第3層上面遺構平面図

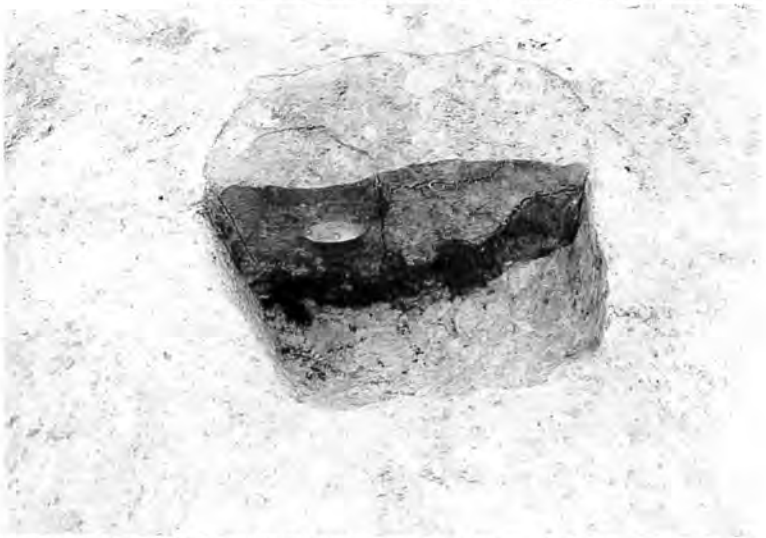
3)まとめ

飛鳥時代の掘立柱建物を検出した。梁側2.6m、桁側は1.7m以上という小規模なものだが、棟を真東に対して北に35度振る方向をとり、正方位に復元される田辺廃寺跡の近隣地としては、やや異様である。西隣のKW91－18次調査地では調査区の西端で、やはり飛鳥時代の井戸を検出しているが、時期は7世紀後葉とやや下る。それは一辺1.2m、深さ0.9mの隅丸方形の小規模な井戸で、SB201とは60mほど離れているから、白鳳時代(飛鳥時代後期)創建の田辺廃寺のそばとしては、遺構の分布は過疎である。

また調査地周辺は平安時代末の遺構・遺物が濃密に分布するところで、今回も包含層から瓦器椀・青磁碗などの遺物を得た。周辺の調査が進めば同時代の集落と耕作地との関係が、より明瞭になるものと思われる。

調査区全景
（第４層上面、南から）

柱穴SP201
（北から）



SB201（北東から）

東住吉区桑津三丁目における建設工事に伴う
桑津遺跡発掘調査(KW10－３)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区桑津３丁目29番
調 査 面 積　15㎡
調 査 期 間　平成22年７月28日～７月31日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、杉本厚典

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は桑津遺跡の西北部に位置する(図1・2)。東隣のKW84－7次調査地では弥生時代中期の溝、掘立柱建物、さらにその東に隣接するKW95－5次調査地では弥生時代中期の井戸、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物1棟と土壙が1基検出されている。この弥生時代の井戸からは魚類骨片、炭化米のほか、ガラス小玉が1点見つかっており注目される[大阪市文化財協会1998]。これらの調査成果から、本調査地でも弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が見つかることが予想された。

調査は2010年7月28日に着手した。敷地の北側に調査区を設定し、重機で表土を0.1～0.3m除去した後、人力による遺構の掘削を行った。検出した遺構・出土遺物の記録を行い、7月31日に調査を終了し、埋戻し・整地作業を行った。

本報告書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPとした。また、図1・7は座標北、図2・5は磁北を基準に作図した。

2)調査の成果

i)層序(図3・4)

第1層：褐色(10YR4/4)シルト混り細粒砂で構成される近・現代の整地層であり、層厚は10～30cmであった。

第2層：褐色(7.5YR4/6)シルト質粘土で構成される古土壌であり、層厚は4～10cmであった。

第3層：褐色(10YR4/6)シルト質粘土よりなる段丘構成層で、本調査地の地山に相当する。層厚は80cm以上であった。

図1　調査地位置図

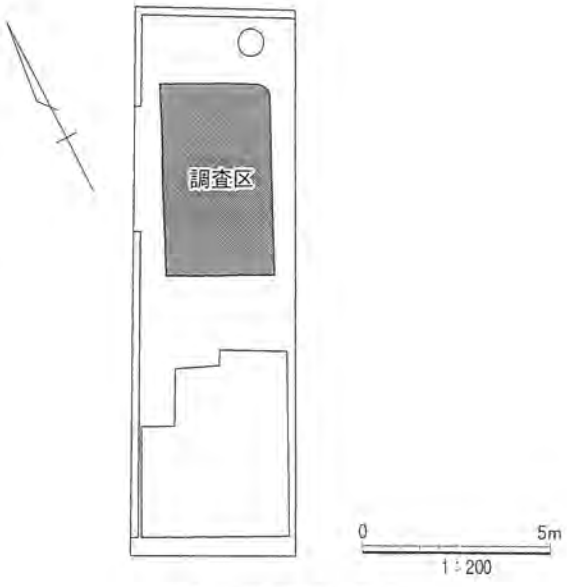


図2　調査区位置図

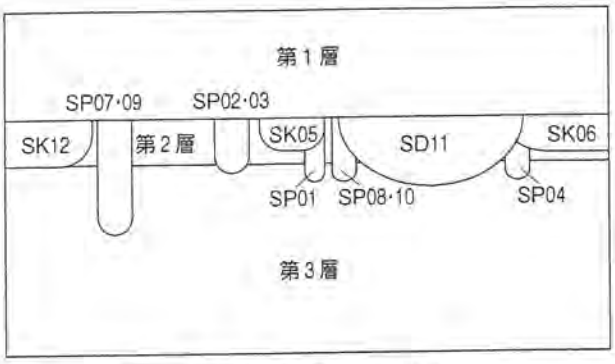


図3　地層と遺構の関係図

ii)遺構と遺物(図5・6)

第2層基底面検出遺構

第2層基底面において弥生時代中期(SP01～04、SK05·06)、古墳時代(SP07～10)、中世(SD11·SK12)の遺構を検出した。

SP01　調査区西側中央で検出した小穴で、直径0.27m、深さ0.18mであった。北側をSK05に切られていた。埋土から弥生土器の細片が出土した。

SP02　調査区西南で検出した小穴で、直径0.21m、深さ0.50mであった。底に直径0.08m、深さ0.06mの窪みが認められた。

SP03　調査区東側中央で検出した小穴で、東西0.20m、南北0.27m、深さ0.31mであった。

SP04　調査区東南で検出した小穴でSK06に切られていた。直径0.26m、深さ0.45mであり、埋土中より甕底部4が出土した。4は外面が被熱により変色しているが、ナデで表面を整えていることがうかがえる。また底部は縁の部分をつまみだしており、上げ底状になっており、弥生時代中期前～中葉に属するとみられる。

SK05　調査区西側中央で検出した東西0.70m以上、南北1.00m、深さ0.35mの土壙で、上部がにぶい黄褐色細粒砂、下部が明褐色細粒砂で埋め戻されていた。埋土内から多数の弥生土器の破片が出土した。埋土中より弥生土器壺底部2·3が出土した。2は角閃石を多く含んでおり、生駒西麓産の胎土である。内面にユビオサエの痕跡が認められる。3はやや上げ底状である。いずれの底部も混和材として胎土に含まれる砂粒の粒径が大きく、多く含まれており、弥生時代中期中葉以前の特徴を示す。

SK06　調査区東南で検出した土壙で、東西1.3m以上、南北1.1m以上、深さ0.42mであった。上層が黒色シルト、下層が分級の良い細粒砂で埋っていた。埋土中から弥生時代中期の土器片が出土した。1は上層から出土した広口壺口縁部である。口縁端部下縁に5㎜間隔で刻みを施しており弥生時代中期前～中葉に属する。

SP07　調査区北西で検出した柱穴とみられる遺構である。直径0.52m、深さ0.52mで、柱痕跡は認められず、3.0cm大の地山の偽礫を含む褐色細粒砂で埋め戻されていた。埋土中より土師器の細片が出土した。

図4　東壁地層断面図

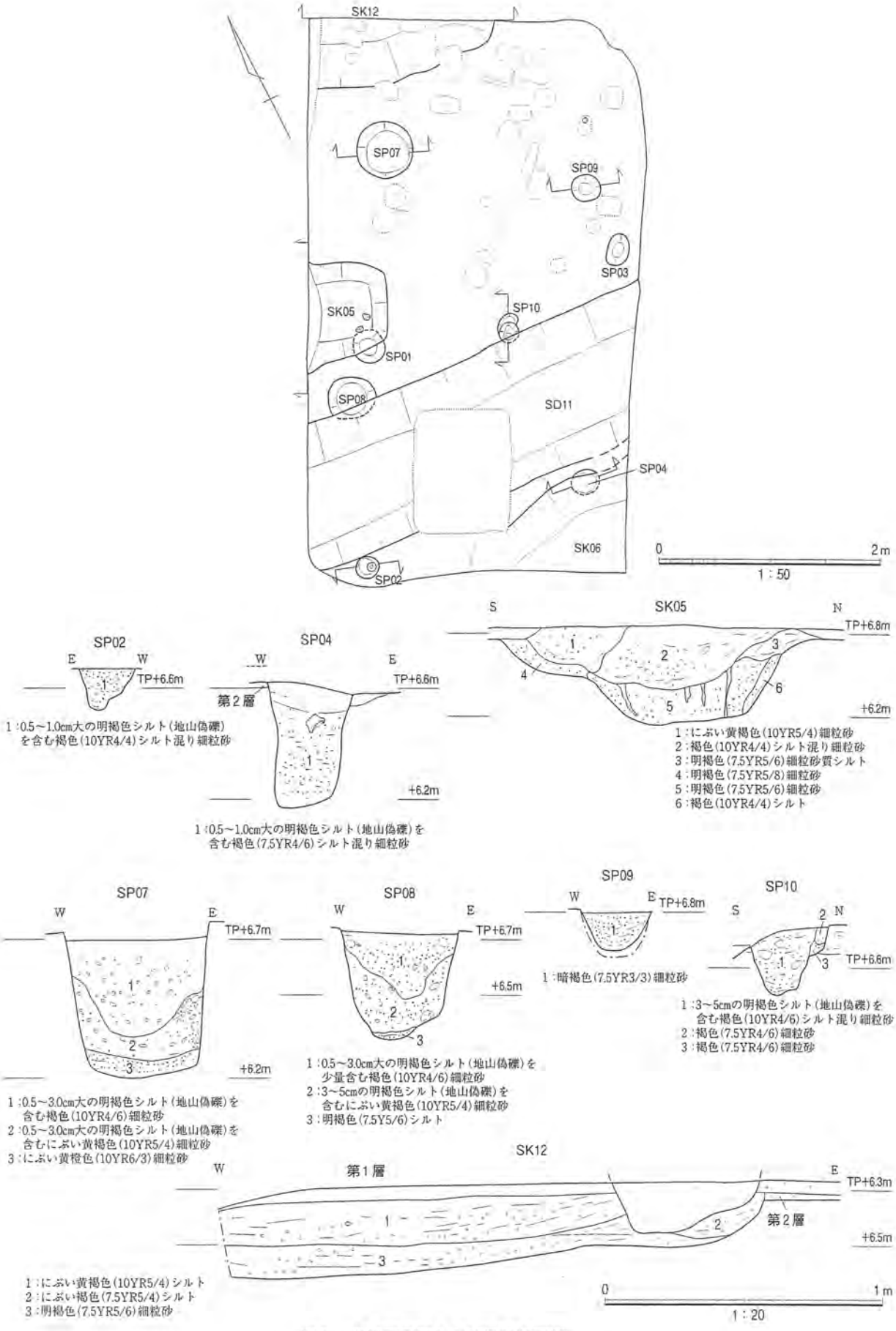


図5　遺構平面図および遺構断面図

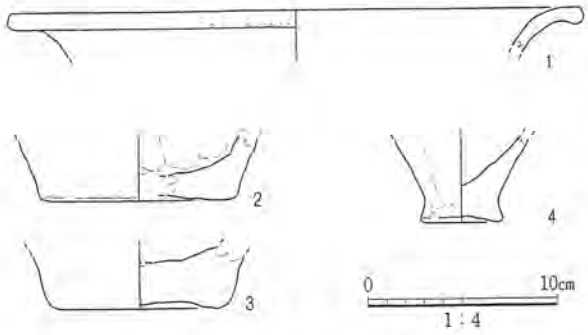


図6　出土遺物実測図
SP04(4)、SK05(2・3)、SK06(1)

SP08　調査区西側中央で検出した柱穴とみられる遺構で、東西0.43m、南北0.36m、深さ0.40mであった。0.5～3.0cm大の地山偽礫を少量含む褐色細粒砂で埋め戻され、南側をSD11に切られていた。

SP09　調査区北東で検出した小穴で、直径0.26m、深さ0.15mであった。

SP10　調査区中央で検出した小穴で、東西0.20m、南北0.29mの楕円形で深さ0.26mであった。南側をSD11に切られていた。

SD11　幅1.25m、深さ0.36mの溝で、東西方向に延びていた。溝底に0.06mの褐色シルト質細粒砂が水成堆積し、その上を褐色細粒砂で埋め戻されていた。遺物は少なかったが、褐色細粒砂層中から瓦器椀の細片が出土した。

SK12　調査区北西で検出した東西1.96m以上、南北0.60m以上、深さ0.32mの浅い窪みである。埋土中から瓦器椀の細片が出土した。

3)まとめ

本調査地では弥生時代の土壙・柱穴、古墳時代の柱穴、中世の溝・土壙を検出した。東隣のKW84－7・95－5次調査地[大阪市文化財協会1998]と同様に遺構の密度が比較的高いと言える(図7)。

弥生時代から古墳時代にかけては、柱穴・小穴が多く検出されたことから、居住域であったと考えられる。弥生時代の出土遺物は中期前～中葉のものが多く、凹線文を施した中期後葉の土器は認めら

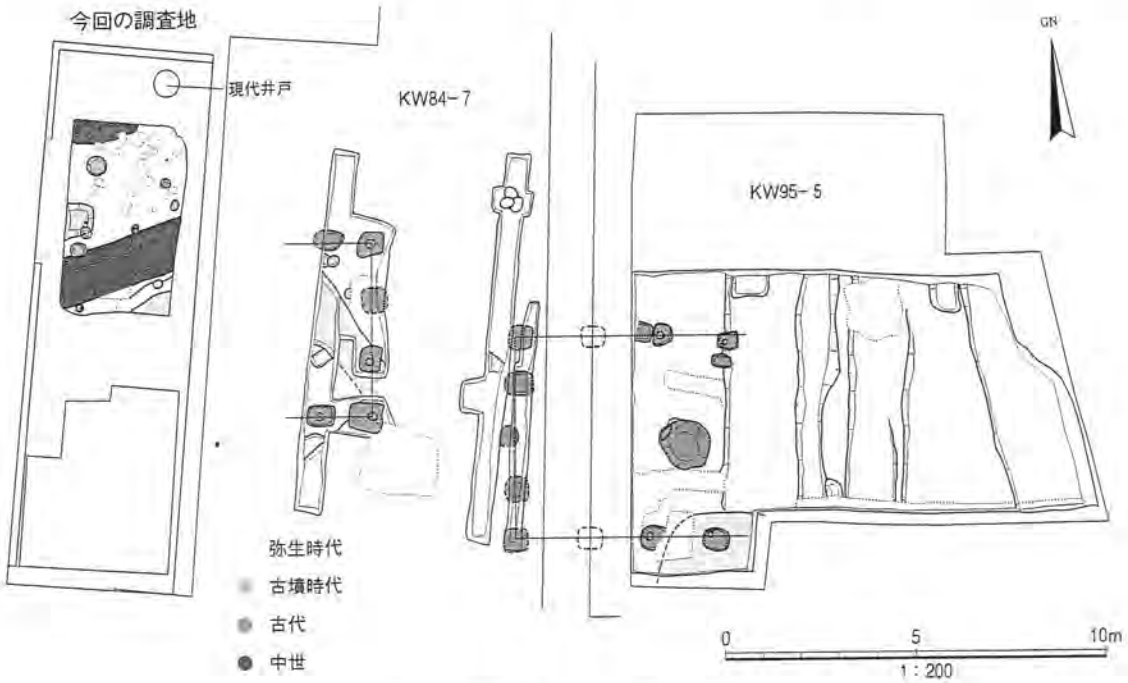


図7　今回調査地と周辺調査地

れなかった。KW95－５次調査地で検出した井戸も中期中葉のものであったため、居住域はこの時期を中心に営まれたとみられる。

また正確な時期の把握や柱筋の復元はできなかったが、古墳時代の柱穴群を検出した。古墳時代の遺構は、調査地の南南西100mに位置するKW87－23次調査地において、古墳時代中期の南北に弧状に延びる溝が検出されているが、桑津遺跡における古墳時代の遺構は少なく、集落を復元するほどの資料は蓄積されていない。今回検出した柱穴群は、未解明な部分が多い桑津遺跡の古墳時代集落復元のための基礎データとして重要であろう。

本調査地では古代と特定できる遺構は検出できなかった。しかし、隣接する調査地で掘立柱建物が多数検出されていることから、調査地が古代の居住域に含まれる可能性は高い。

さらに、中世の溝・土壙を検出した。これらの方位は古代の遺構と主軸が約17°異なっており、明らかに方位が違う。古代から中世にかけて建物や敷地の方位が変化した可能性が高く、古代集落が中世の環濠集落に再編される過程を読み取るための重要な手掛かりになると考えられる。

今回の調査地では面積は限られていたが、既往の調査成果と照らし合わすと上述したように、一つ一つの遺構・遺物が集落復元のための重要な資料になっていることがうかがえる。今後とも遺跡の実態解明に向けて調査成果をさらに蓄積することが望まれる。

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』

調査区全景
（南から）

SK05（東から）

SP07（南から）

SP08（南から）

SD11（西から）

東住吉区桑津四丁目における建設工事に伴う
桑津遺跡発掘調査(KW10－５)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区桑津４丁目56－１・57－１
調 査 面 積　54㎡
調 査 期 間　平成22年８月９日～８月16日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、清水和明、京嶋 覚

1)調査に至る経緯と経過

桑津遺跡は東住吉区の桑津・駒川・西今川・北田辺一帯に拡がり、上町台地東側の緩斜面に位置している。旧石器時代～近世の複合遺跡であり、特に、弥生時代から古代において大阪平野でも拠点的な集落遺跡として知られている。

調査地は本遺跡の東北外縁にほぼ接し、国道25号線にある桑津東四丁目の交差点から南へ180m、遺跡東縁を北流する今川から西へ約50mに位置する。周辺には、西50m付近のKW86－２次、170m付近のKW91－８次、南西80m付近のKW09－２次、南南東150m付近のKW94－16次調査地などがある。KW91－８次調査地では古墳時代末～飛鳥時代の２時期にわたる掘立柱建物群・井戸のほか飛鳥時代の呪符木簡が見つかり、官人層の住まう宅地が想定されている。KW09－２次調査地でも古代の掘立柱建物が見つかっている。また、本調査地に最も近いKW86－２次調査地では飛鳥時代の掘立柱建物のほか、古墳時代中～後期の埴輪片が少量ではあるが出土し、KW94－４次調査地でも同様の埴輪が見つかっている。これらは近隣にかつて古墳が存在したことを示すものとして注目される。一方、遺跡の低地側になるKW94－16次調査地では、奈良～平安時代の水田跡が見つかっている。

調査地は2010年７月16日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地表面下約70cmで中世とみられる耕作土が見つかった。そのため、８月９日から開始した本調査では、そこまでを重機によって掘削し、以下の地層を人力で掘削した。途中、古代の水田の検出と記録保存を行い、現地表面下約150cmの段丘構成層の上面までを調査した後、埋め戻して現地調査を終了し、８月16日に撤収した。

以下、本書に使用した方位は、図１が座標北、ほかは磁北を基準としている。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP＋○mと表記した。

図１　調査地位置図

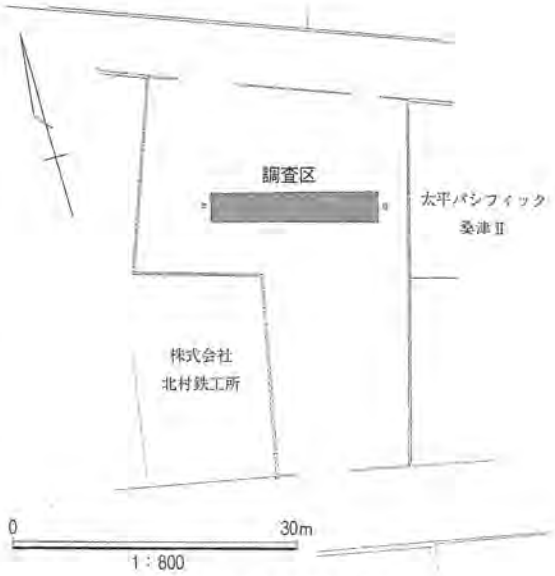


図２　調査区位置図

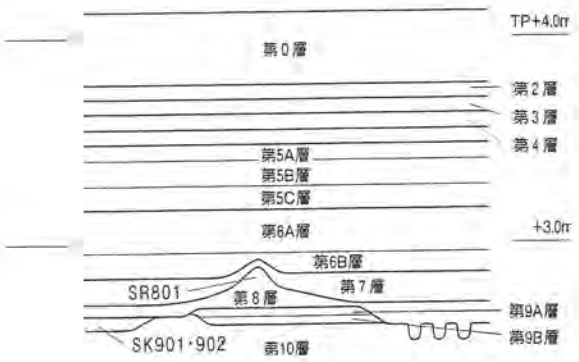


図3　地層と遺構の関係図

2）調査の結果

i）層序（図3・4）

第0層：コンクリート片・グリ石を多く含む暗褐色中粒～粗粒砂層で、現代の整地層である。層厚は30cm程度で、調査地全体にほぼ水平に堆積している。

第1層：黒褐色(2.5Y3/1)細礫混りシルト質極細粒砂層で、現代の整地層である。層厚は10cm程度である。

第2層：灰オリーブ色(7.5Y4/2)細礫混りシルト質極細粒砂層で、層厚10cm以下の近現代の整地層である。

第3層：黄灰色(2.5Y6/1)細礫混り極細粒砂質シルト層で層厚10cm程度の近現代の整地層である。

第4層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫混りやや極細粒砂質シルト層で、層厚10cm程度の近現代の整地層である。

第5A層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒砂層で、層厚5～15cmの中世作土層である。

第5B層：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂層で、層厚10～20cmの中世作土層である。

第5C層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～粗粒砂混りシルト質極細粒砂層で、層厚15cm程度の中世作土層である。

第6A層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫～細粒砂の水成層で、層厚10～20cmである。部分的にラミナの乱れや踏込みが認められる。

第6B層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂～シルト質極細粒砂の水成層で、層厚15～20cmである。上方へ向かって粗粒化する。

第7層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層で、炭化物のラミナがわずかに認められる水漬き層である。層厚10～15cmである。

第8層：灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂質シルトの水田耕作土層で、層厚20～30cmである。調査区の中央付近に畦畔SR801があり、その東側では踏込みによる下面の凹凸が顕著である。

第9A層：褐灰色(10YR4/1)シルト層で、多くは第8層の水田耕作によって失われ、SR801の下位およびその東側の幅約2mにのみ残っている。層厚10cm以下である。踏込みによると思われる下面の凹凸が認められ、第8層の水田が形成される以前の水田耕作土層である可能性がある。

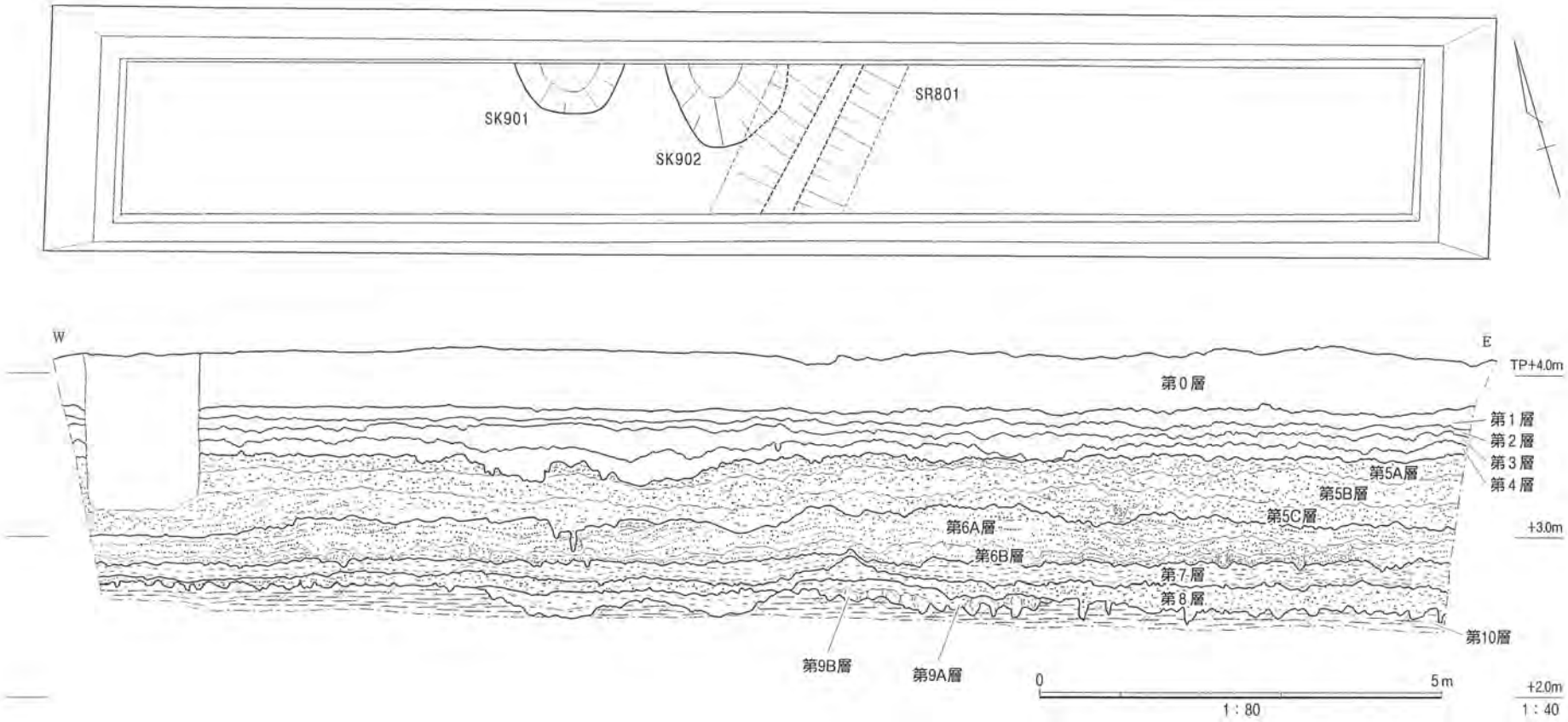
第9B層：黒褐色(10YR3/1)～暗褐色(10YR3/3)シルト層で、SK901・902の埋土および第9A層の下位で踏込みによって変形し、偽礫化した状態で認められた。層厚5cm程度である。

第10層：明黄褐色(10YR6/6)粘土層で、段丘構成層にあたる。

ii）遺構と遺物

a．古代以前の遺構と遺物

第9層で埋まる浅い落込みSK901・902が見つかった。最大幅は1.3m～1.5m、深さは0.2mである。



第０層：含コンクリート片・グリ石、暗褐色中粒～粗粒砂（整地層）
第１層：黒褐色（2.5Y3/1）細礫混りシルト質極細粒砂（整地層）
第２層：灰オリーブ色（7.5Y4/2）細礫混りシルト質極細粒砂（整地層）
第３層：黄灰色（2.5Y6/1）細礫混り極細粒砂質シルト（整地層）
第４層：暗灰黄色（2.5Y5/2）細礫混り極細粒砂質シルト（整地層）
第５Ａ層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質極細粒砂（作土）
第５Ｂ層：褐色（10YR4/4）ややシルト質極細粒砂（作土）
第５Ｃ層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒～粗粒砂混りシルト質極細粒砂（作土）
第６Ａ層：暗灰黄色（2.5Y5/2）細礫～細粒砂（水成層）
第６Ｂ層：黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂～シルト質極細粒砂（水成層）
第７層：暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト（水漬き）
第８層：灰黄色（2.5Y6/2）中粒砂質シルト（作土）
第９Ａ層：褐灰色（10YR4/1）シルト
第９Ｂ層：黒褐色（10YR3/1）～暗褐色（10YR3/3）シルト
第１０層：明黄褐色（10YR6/6）粘土（段丘構成層）

図４　西壁地層断面図

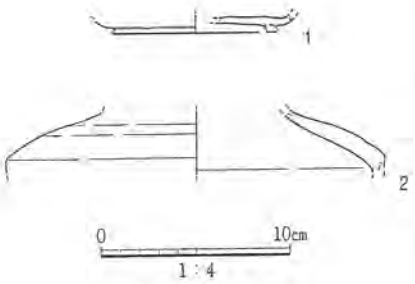


図５　出土遺物
第８層（１・２）

北側は調査区外に続くため全体の大きさは不明である。遺物は出土せず、基底面は下位層の第10層と漸移的であるため、植物根痕の可能性も考えられる。

調査区の中央からやや東側は古代の水田が続いていた。調査区中央に北東－南西方向のSR801が１条見つかっているが、調査では第6B層の上面で精査した後、第７層および第８層を一連で掘削したため、SR801の確認は調査区の南北両壁面にて行った。その結果、SR801は幅0.8m程度、水田上面との比高0.2m以内で、特に中心の0.5m程度が高まっている。畦畔から東側は層厚20～30cmで、耕作による下面の凹凸も顕著であるが、西側は層厚10cm以内で西へ離れるほど薄くなっている。そこで、水田として利用された範囲はSR801よりも東側の範囲と考えられる。耕作土からは古代の土師器細片や須恵器片が出土している（図５）。１は須恵器杯Bの底部片で、２は須恵器壺の肩部片である。どちらも詳細な時期は不明だが、奈良時代のものであろう。

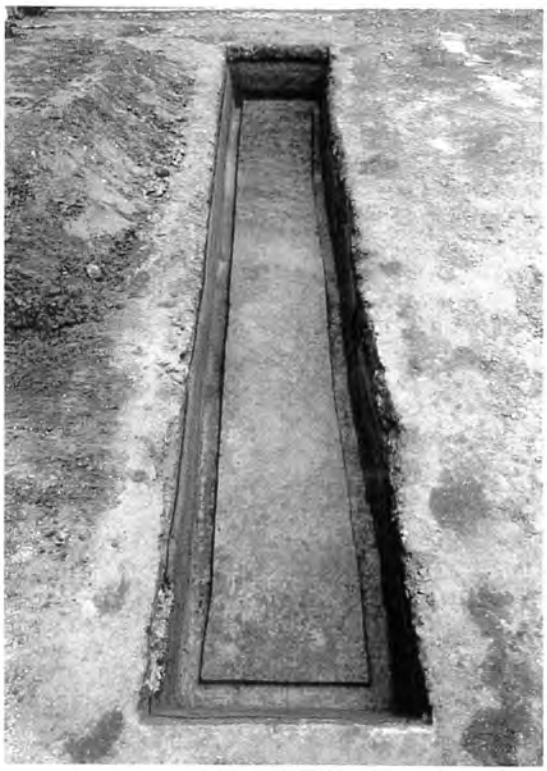
b．中世の遺構と遺物

第５層は断面観察からは耕作土とみられ、中世の水田耕作によるものであろう。

3）まとめ

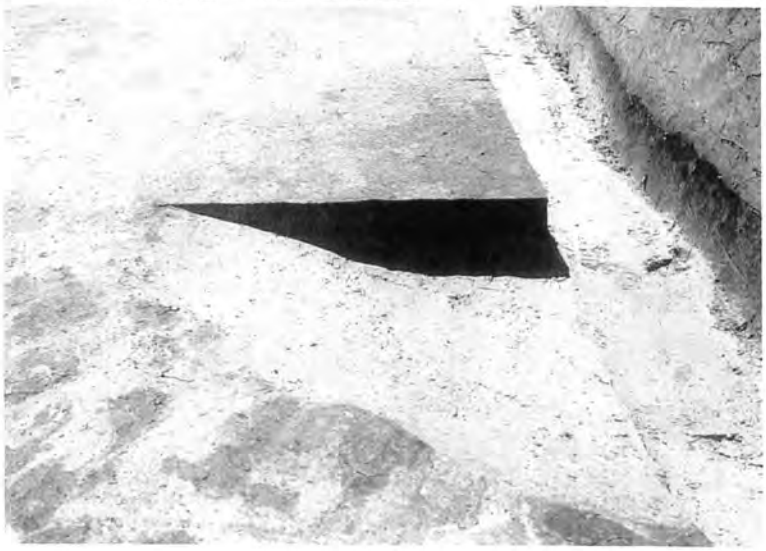
本調査では古代の水田が検出された。本遺跡の東北部は比較的調査例が少ないが、標高が高くなる遺跡の中心部側に古代の建物群が拡がっているのに対し、東側では水田が形成され、地形にあった土地利用がなされていることが明らかとなった。検出された畦畔周辺の状況を鑑みると、この畦畔を境とし、水田域の多くは本遺跡の東側に拡がっていることが考えられる。KW94－16次調査地の検出例からは、水田域は今川につながる低湿地を中心に、南へも続いている可能性が考えられ、周辺域における今後の調査の進展が待たれるものである。

第５層下面の検出状況
（東から）



第８層下面の畦畔周
辺に見られた踏込痕
およびSK901・902
検出状況（北東から）

SK901埋土の
堆積状況（東から）



東住吉区南田辺一丁目における建設工事に伴う
難波大道跡発掘調査(ND10－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区南田辺１丁目１－37
調 査 面 積　15㎡
調 査 期 間　平成22年８月18日～８月20日
調 査 主 体　財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　大阪文化財研究所次長　南 秀雄、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

調査地は古代の道路跡とされる難波大道跡に位置する。北西には山坂遺跡が所在し、ND90－10・94－15次調査では掘立柱建物など6世紀代の集落跡が検出されている。また、調査地の北西に位置する山坂神社境内は、周囲より高くなっていることから前方後円墳とする考えもある。

今回調査地では、大阪市教育委員会によって行われた試掘調査の結果、古代と推定される遺構が検出されたため、建設工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査は平成22年8月18日より開始した。現代盛土層である後述の第1層を重機により除去し、ほかは人力による掘削で調査を進めた。遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、同年8月20日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。

調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP＋○mと表記する。方位は座標北を基準とした。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図3）

ごく薄い現代の整地層直下は遺構埋土部分を除き段丘構成層であった。

第1層　現代の整地層で層厚は約3cmである。

第2層　明褐色（7.5YR5/6）シルト質細粒砂～細粒砂層である。段丘構成層であり、当地の地山層に当たる。上部ほどシルト質となる。

ⅱ）遺構と遺物（図3・4）

図1　調査地位置図

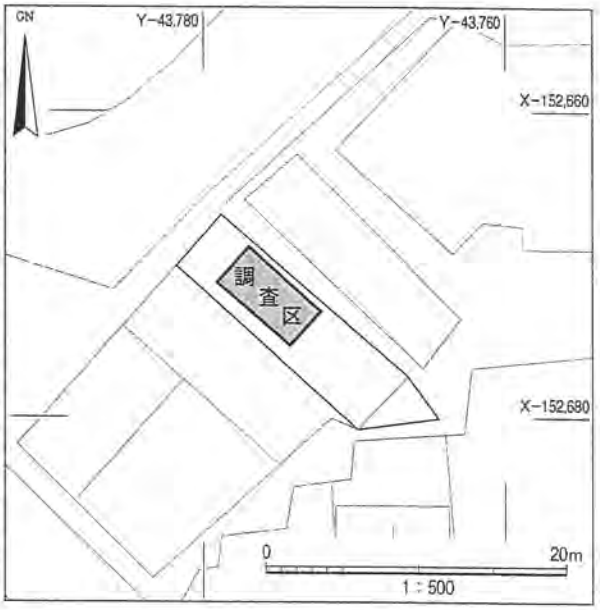


図2　調査区配置図

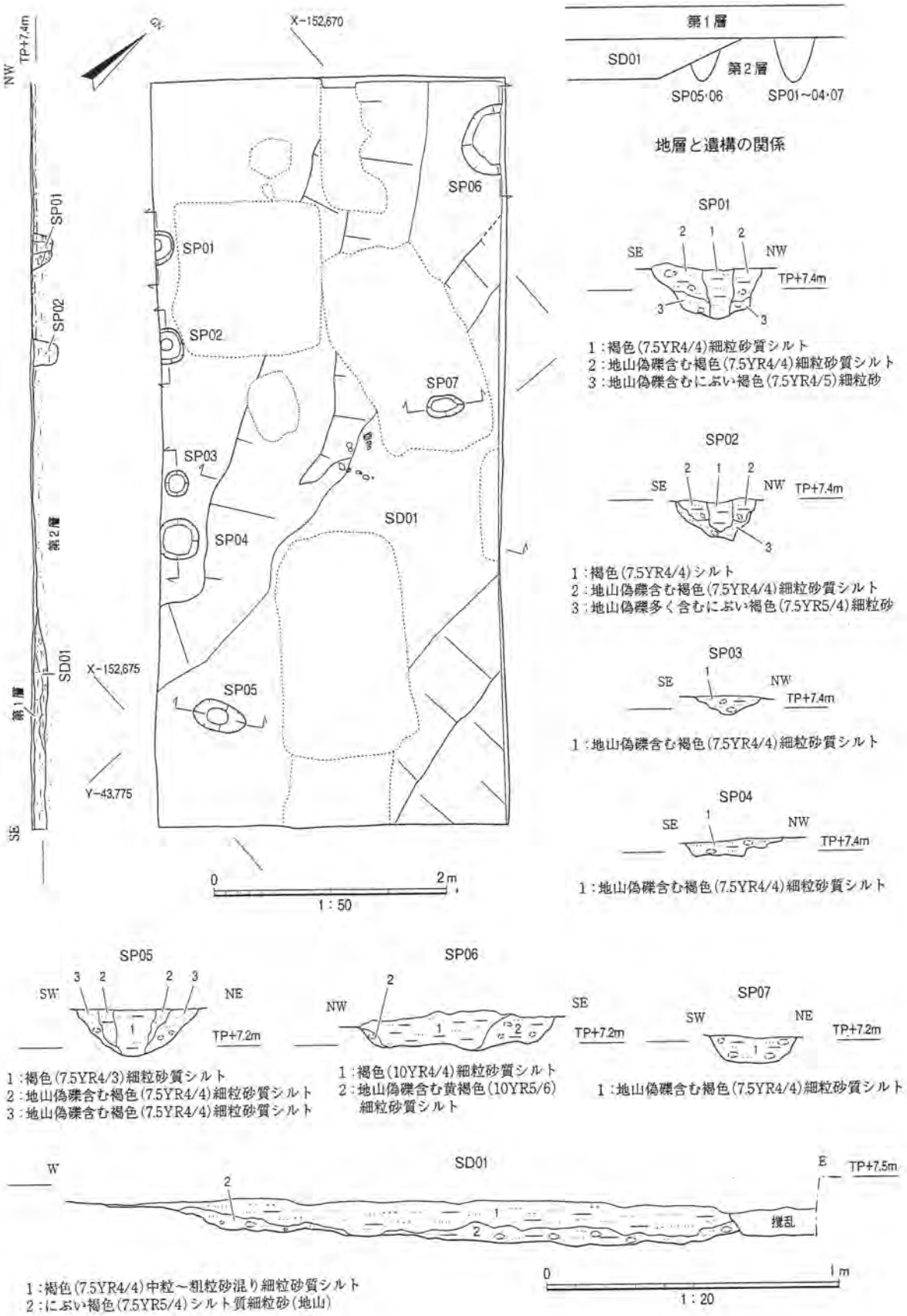


図3　地層断面図および遺構平面・断面図など

遺構は第２層上面で検出作業を行った。溝のほか柱穴・小穴がある。

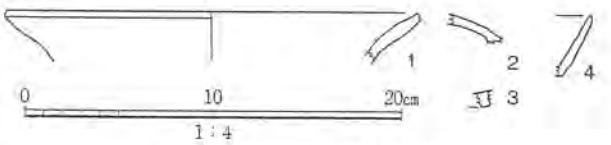


図４　SD01出土遺物実測図

SD01　幅３m以上、深さはもっとも深い部分で検出面より0.15mである。削平を受けていることから上端部の形状は不明瞭であるが、底付近では概ね南北方向に深い部分が認められたことから溝と判断した。埋土は２層に分かれ、下部は第２層に由来する偽礫を多く含む加工時形成層、上部は機能時堆積層である。出土遺物は少量の土師器･須恵器片が出土したのみである。１は土師器甕である。埋土上部から同一個体の破片がまとまって出土したが、風化が著しく調整などは不明である。２～４は須恵器片であるが、いずれも小片のため径は復元できなかった。２は杯蓋である。３は高台を有する。器壁の薄さから壺ではなく杯Bと考えられる。４は杯身であるが高台の有無は不明である。

これらの出土遺物はいずれも７世紀後半～８世紀代に位置づけられよう。なお、黒色土器片など平安時代に降る遺物は出土しなかった。

この溝であるが、ほぼ正南北方向であること、また、小片であり遺構本来の時期を示していない可能性があるものの、飛鳥時代後半～奈良時代の遺物が出土していることが注目されよう。一部分のみの検出であり、またやや位置がずれることから難波大道跡の側溝と考えるには現状では躊躇せざるをえないが、少なくとも同時期の集落が近隣に存在していたことは間違いないであろう。

柱穴・小穴　全域で柱穴および小穴としてSP01～06を検出した。SD01との先後関係がわかるものはすべてSD01に先行する。このうちSP01・02・05 には柱痕跡が認められ、確実に柱穴と考えられるものである。建物跡を復元することはできなかった。

これらの遺構からは遺物が出土しなかったため時期は不明である。SD01に先行すること、近隣のND90－10・94－15次調査では掘立柱建物など６世紀代の集落跡が検出されていることから、６世紀代の遺構の可能性がある。

３）まとめ

今回の調査では、飛鳥～奈良時代と考えられる南北方向の溝を検出した。難波大道の側溝と考えるにはいまだ資料不足であるが、少なくとも同時期の遺物が出土したことから近隣が生活の場であったといえよう。また、これに先立つ遺構群を検出し、６世紀代の集落域がこの地点まで拡がっていた可能性がある。

調査地周辺は地山層が高く削平を受けているものの、これまでの調査でも明らかなように遺構は残されている。重要な地点であるがいまだ調査例は多くない。さらなる周辺での調査の進展が期待される。

検出遺構全景
（北西から）

SD01（北から）

SD01遺物出土状況
（北から）

東住吉区住道矢田八丁目における建設工事に伴う
住道寺跡発掘調査(SJ10－１)報告書

調査個所	大阪市東住吉区住道矢田8丁目10－1・10－10
調査面積	30㎡
調査期間	平成22年4月6日～4月13日
調査主体	財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南秀雄、松本百合子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、奈良時代創建の伝承がある住道(須牟地)寺跡の中央部に位置する(図1)。寺域は一町半四方と推定され、住道矢田四丁目に所在する常栄寺には住道寺の塔心礎と伝わる礎石が保存されている。今回の調査地の南方には「灰塚」(写真1)と呼ばれる高さ約1.6mの土壇があり、平安時代に住道寺が消失した際、焼土を集めて築いたものとされている。

過去の調査では、1991年に調査地の西約50mで平安時代末～鎌倉時代とされる五輪塔文を押捺した平瓦が見つかっている[黒田慶一1993]。2007年の調査では、今回の調査地と灰塚の間で鎌倉時代の溝や井戸、さらに同じ時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が大量に見つかり、中世寺院の阿弥陀寺との関連が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。

今回、大阪市教育委員会により2010年3月15日に試掘調査が行われ、現地表下約0.2m以下で古代～中世の遺物包含層や遺構面が検出された。本調査はこの結果をうけ、調査地の東部に3m×10mのトレンチを設定し(図2)、地層・遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況を明らかにし、古代以降の寺院との関連など、地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的とした。

調査は2010年4月6日に機材搬入・整地を行い、同日に現地表下約0.2mまでの表土および現代盛土層を重機掘削し、それ以下は人力により地下1.5mまで掘下げた。途中、遺構面を精査しながら遺構・遺物の検出に努め、適宜に写真撮影、実測などの調査を行った。掘削残土は場内仮置とし、調査終了後は埋め戻しを行い4月13日に撤収した。

本報告書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPと省略した。また、図4～6の方位は磁北を、図1・2の方位は座標北を基準にしている。

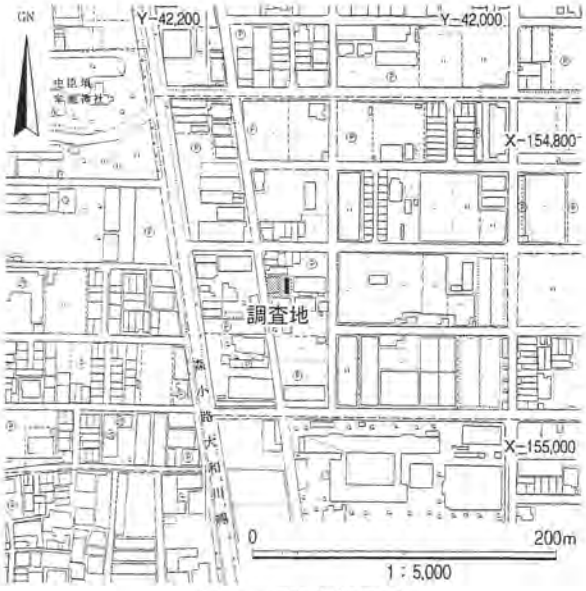


図1　調査地位置図

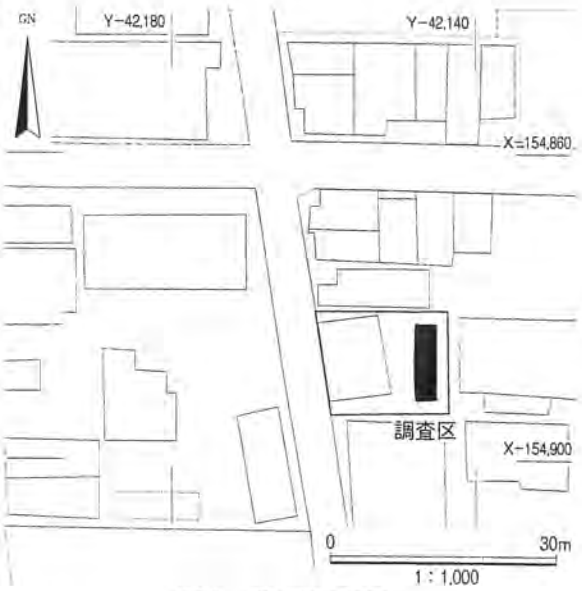


図2　調査区配置図

2)調査の結果

i)層序

現地表の標高はTP+6.0mで、現地表下1.5mまでの地層を確認した(図3～5)。

第0層：表土層および現代盛土層で、層厚は20～30cmである。

第1層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトの現代作土層である。層厚は20～30cmである。

第2層：褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトの作土層である。層厚は約30cmである。表面が磨滅した縄目瓦1を含む。

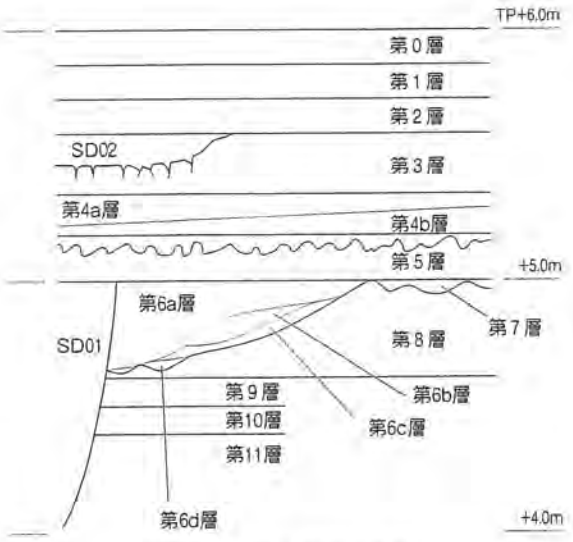


図3　地層と遺構の関係

第3層：粗粒砂質シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトの盛土層で、層厚は約40cmである。13世紀ごろの瓦器椀2～4、瓦質土器を含む。本層の上面でSD02を検出した。

第4層：中世作土層で、層厚は約20cmである。4a・4bの2層に分かれる。第4a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土で、層厚は5～15cmである。第4b層はにぶい黄褐色(10YR4.5/3)粘土で、層厚は5～15cmである。土師器皿、瓦器椀の細片を含む。

第5層：粗粒砂を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)粘土の作土層で、層厚は5～15cmである。土師器細片と磨滅した縄目瓦を含む。

第6層：第8層上面を覆う河成層で、層厚は0～40cmである。第8層上面が北に傾斜するに従い厚く堆積し、6a～d層に分かれる。第6a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト～粗粒砂で、最大層厚は30cmである。北方に下るに従い、粒径が大きくなる。本層の上面でSD01を検出した。第6b層は褐灰色(10YR4/1)シルト～中粒砂質シルトで、最大層厚は15cmである。第6c層は褐灰色(10YR5/1)と灰黄褐色(10YR5/2)の中粒～粗粒砂で、最大層厚は15cmである。斜面の上部に分布する。第6d層は青灰色(5B5/1)粘土で、斜面の最深部の深さ3cmほどの窪みに堆積する。

第7層：粗粒砂を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトで、層厚は5cmである。トレンチ南部の地山上面の浅い土壙群の埋土である。

第8層以下は低位段丘構成層で、当地域の地山である。

第8層：風化した中礫を含む灰色(7.5Y6/1)粘土層で、層厚は約30cmである。

第9層：灰黄褐色(10YR6/2)粘土層で、層厚は10cmである。

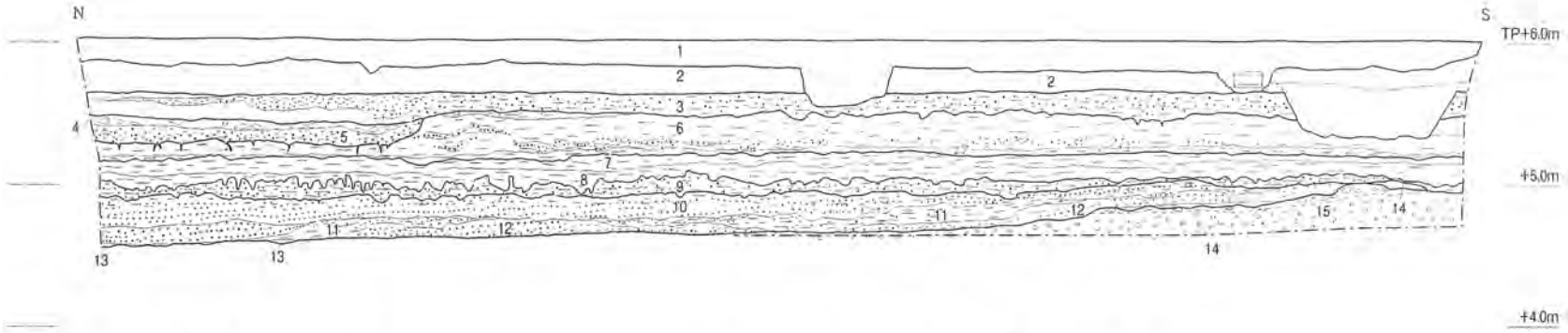
第10層：褐灰色(10YR5/1)および灰黄褐色(10YR5/2)粘土層で、層厚は15cmである。

第11層：灰黄褐色(10YR6/2)粘土層である。

ii)遺構と遺物

a.第8層上面の遺構(図6)

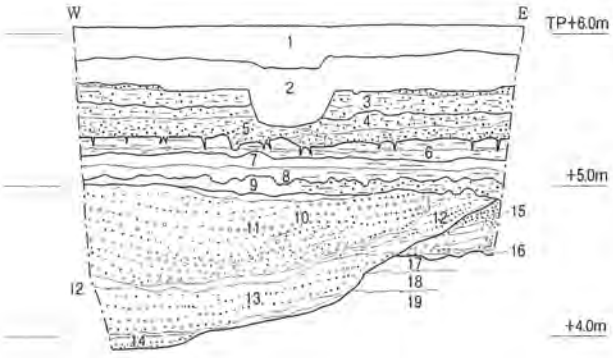
トレンチの南端で浅い土壙群6基と北に下る斜面を検出した。土壙は直径0.3m～0.8cm、いずれも



1：表土・現代盛土(第０層)
2：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト(第１層)
3：褐色(10YR4/4)粗粒質シルト(第２層)
4：第３層の偽礫を多く含む にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト(SD02埋土)
5：にぶい黄褐色(10YR5/3)細礫～粗粒砂(SD02埋土)
6：粗粒砂質シルトの偽礫を含む にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルト(第３層)
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土(第4a層)
8：にぶい黄褐色(10YR4.5/3)粘土(第4b層)
9：粗粒砂を多く含む 灰黄褐色(10YR4/2)粘土(第５層)
10：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト～粗粒砂(第6a層)
11：褐灰色(10YR4/1)シルト～中粒砂質シルト(第6b層)
12：褐灰色(10YR5/1)と灰黄褐色(10YR5/2)の中粒～粗粒砂(第6c層)
13：青灰色(5B5/1)粘土(第6d層)
14：粗粒砂を含む 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト(第７層)
15：中礫を含む 灰色(7.5Y6/1)粘土(第８層)

0　2m
1：50

図４　東壁地層断面図



1：表土・現代盛土(第０層)
2：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト(第１層)
3：褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト(第２層)
4：第３層の偽礫を多く含む
　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト(SD02埋土)
5：にぶい黄褐色(10YR5/3)細礫～粗粒砂(SD02埋土)
6：粗粒砂質シルトの偽礫を含む
　にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルト(第３層)
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土(第4a層)
8：にぶい黄褐色(10YR4.5/3)粘土(第4b層)
9：粗粒砂を多く含む 灰黄褐色(10YR4/2)粘土(第５層)
10：炭粒を多く含む 黒褐色(10YR4/2)粘土と
　灰黄褐色(10YR3/2)粘土(SD01埋土)
11：にぶい黄褐色(10YR4.5/3)細粒砂(SD01埋土)
12：炭粒を多く含む 黒褐色(2.5Y3/2)粘土と
　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土(SD01埋土)
13：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂と黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂(SD01埋土)
14：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂～褐灰色(10YR4/1)シルト(SD01埋土)
15：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト～粗粒砂(第6a層)
16：青灰色(5B5/1)粘土(第6d層)
17：灰黄褐色(10YR6/2)粘土(第９層)
18：褐灰色(10YR5/1)粘土と灰黄褐色(10YR5/2)粘土(第10層)
19：灰黄褐色(10YR6/2)粘土(第11層)

0　2m
1：50

図５　北壁地層断面図

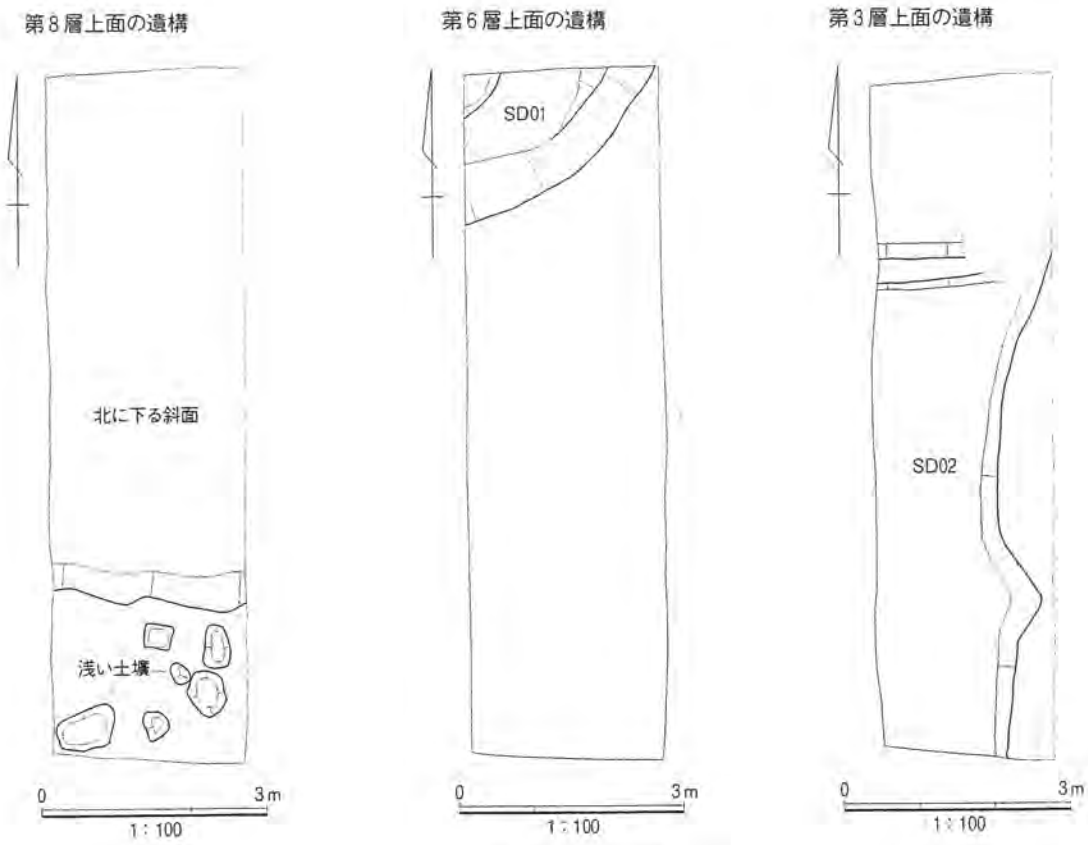


図6　遺構平面図

深さ0.1mほどで、埋土は粗粒砂を含む黄灰色砂質シルトである。平面形が不定形で、柱痕跡もないことから植物の根などによる自然の形成物の可能性もある。北に下る斜面は第6層(図4－10～13)の水成層で埋没している。底面に人為的な掘削痕跡はない。

b．第6層上面の遺構(図6)

調査区の北端で深さ1.15mのSD01を検出した。溝の対岸はトレンチ外にあるため幅は不明である。溝は河成層で埋没しており、その層相は底から暗灰黄色粗粒砂～褐灰色シルト(図5－14)、暗灰黄色および黄灰色粗粒砂(図5－13)、炭粒を多く含む黒褐色粘土と暗灰黄色粘土(図5－12)、にぶい黄褐色細粒砂(図5－11)、炭粒を多く含む黒褐色と灰黄褐色粘土である(図5－10)。検出面積は僅かであるが、河成層の堆積状況から水の流れは北東から南西と想定できる。暗灰黄色粘土(図5－12)から5世紀後半の須恵器杯蓋6が出土している。

c．第3層上面の遺構(図6)

調査区の西半で深さ約0.2mのSD02を検出した。北部には東西にのびる幅0.5m、高さ0.1mの高まりがみられる。西端と北端はトレンチ外にあるため、全体の幅や長さは不明である。底には顕著な乾痕があり、乾痕の直上を厚さ0.15mの黄褐色細礫～粗粒砂の水成層(図4－5)が覆っている。最上部は第3層の偽礫(図4－4)で埋められている。13世紀ごろの瓦器椀5が出土したことから、鎌倉時代の遺構と考えられる。

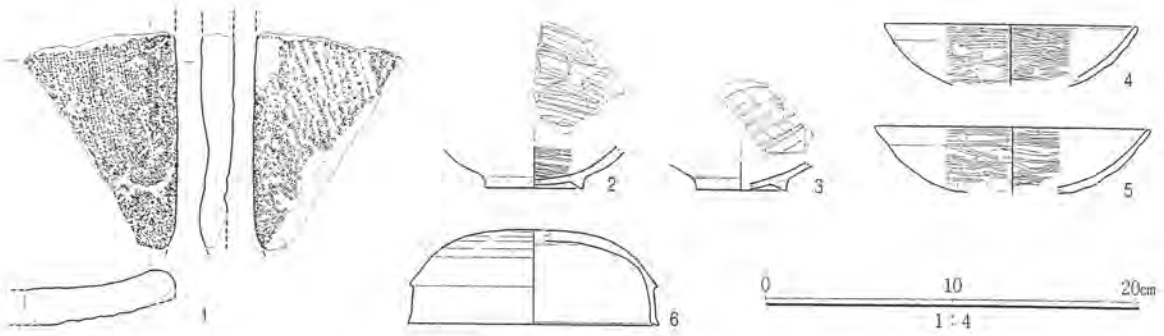


図7　出土遺物実測図

第2層(1)、第3層(2～4)、SD02(5)、SD01(6)

3)まとめ

今回の調査では第8層上面の土壙群と斜面、古墳時代のSD01、鎌倉時代のSD02を検出した。いずれも寺院の痕跡を直接示すものではなく、遺物についても過去の調査にみられたような平安時代から鎌倉時代にかけての大量の瓦は出土せず、少量の布目瓦と瓦器椀細片、須恵器・土師器を検出したのみである。しかし、寺院を構成する伽藍には建造物を配さない広場的な空間も必ず存在することから、今回の調査地がそういった場所に該当する可能性もあり、今後の継続した周辺調査が不可欠であると考える。

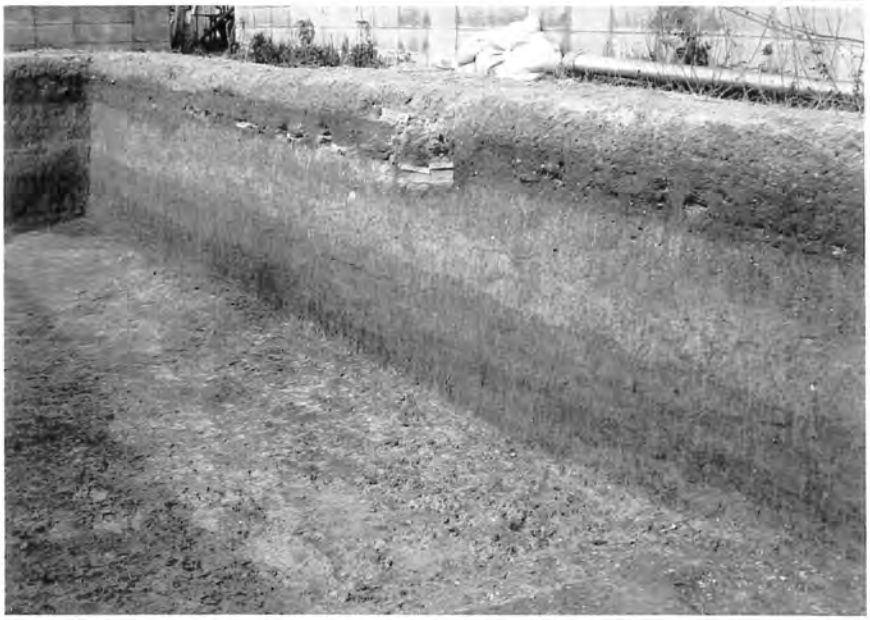
参考文献

黒田慶一1993、「住道出土の平瓦の五輪塔文」：大阪市文化財協会編『葦火』45号、p.8

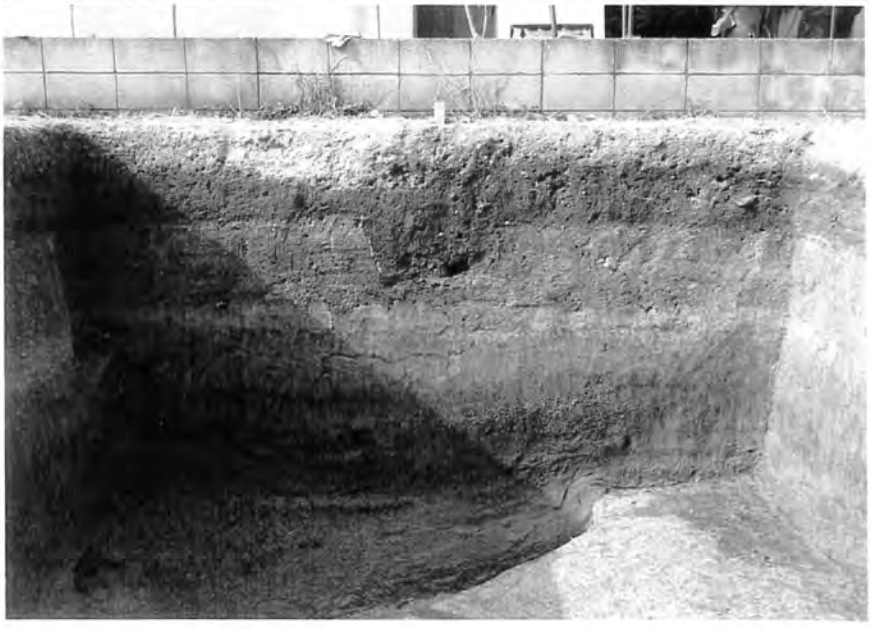
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「住道廃寺跡発掘調査(SJ07－1)報告書」：『平成19年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.139－148

調査地南側の灰塚

東壁地層断面
（南西から）

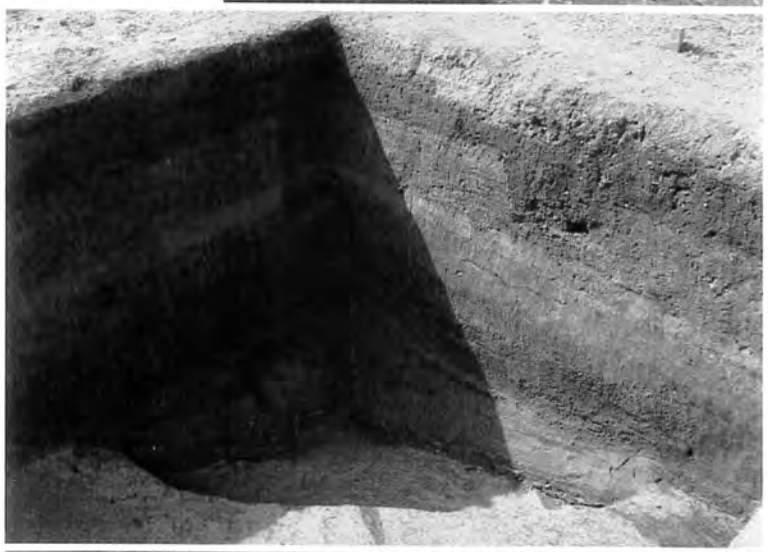


北壁地層断面
（南から）



第３層上面の遺構
（北から）

SD01
（南東から）



第８層上面の検出状況
（北東から）

平野区加美南五丁目における建設工事に伴う
亀井遺跡発掘調査(KA10－１)報告書

調 査 個 所　大阪市平野区加美南５丁目32
調 査 面 積　24㎡
調 査 期 間　平成22年11月29日～12月１日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、京嶋 覚

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、縄文時代晩期から江戸時代にかけての複合遺跡である亀井遺跡の西部に位置する(図1)。東側の近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、弥生時代中期後半の環濠集落が存在し、特に銅鐸片、銅鏃、貨泉、小型仿製鏡などの青銅製品が出土している点が注目されるほか、現代の平野川の北側には古代平野川の流路も確認されている[大阪府教育委員会・大阪文化財センター1983]。

事前の試掘調査により現地表面下0.6mで弥生土器を含む中世から近世の包含層が確認されたため、敷地東側に東西10m×南北3mの調査区を設定して調査を行うことになった。しかし、既設建物改修のための工事車両の駐車と残土の仮置きスペースを確保する必要があることから、東西8m×南北3mに縮小することとした(図2)。

11月29日に、現地表面下0.6mまでを重機により掘削し、それ以下を人力により掘削・遺構検出を行って記録作業を進めた。翌30日には概ね掘削と記録作業を終え、12月1日に埋戻し・機材撤収を終えて現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は図1が座標北を基準にし、他は磁北を基準にした。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層:近現代の盛土および攪乱の埋土である。

第2層:オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルト層である。層厚が最大約30cmの作土層で、調査区西端には分布しない。

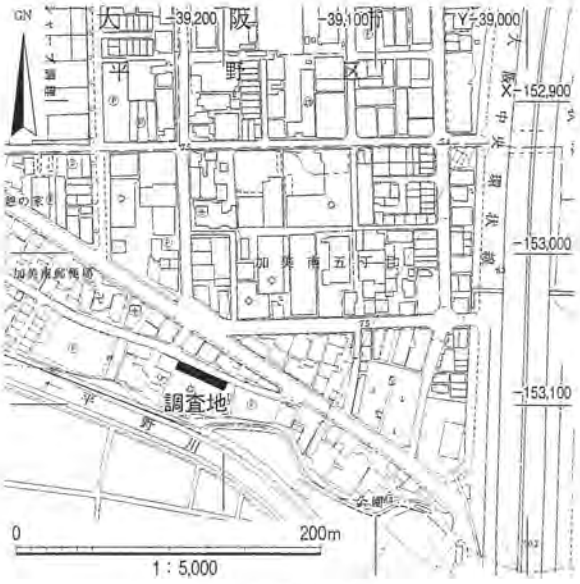


図1　調査地位置図

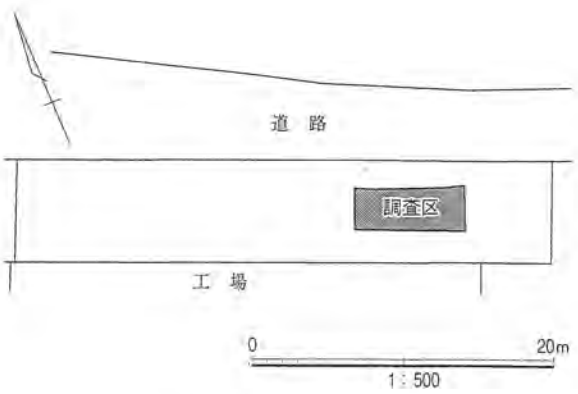


図2　調査区位置図

図３　地層と遺構の関係図

第３層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～粗粒砂質シルト層である。層厚は20～50cmで東に向かって厚くなる作土層である。東端で最も厚くなり、SX01の落込みを埋めている。

第４層：褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で、調査区西半部のみに分布する層厚約20cmの作土層である。

第５層：褐色(10YR4/6)細粒砂～細礫層で、層厚50cm以上の水成層である。西半部で高く遺存しており、中央部に東から西に傾斜するトラフ型の斜交ラミナが見られ、河川による堆積層とみられる。

第６層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層で、粗粒砂を含む粘土質シルトの偽礫を主体とする盛土層である。

ii)遺構と遺物(図４・５)

調査区東端を除く全域で第５層の河川堆積があり、旧平野川の流路の一部と考えられる。第５層の堆積状況からみて東から西への水流があったと見られる。本層からは近世の遺物が若干含まれるものの、弥生土器、土師器、須恵器などが多く出土しており、古代まで遡る時期の堆積である可能性がある。特に弥生土器が目立ち、１～６のような弥生時代後期の壺・甕片が中心である(図５)。

近畿自動車道建設に伴う大阪府による発掘調査では、幅150mと推定される古代～中世の平野川流

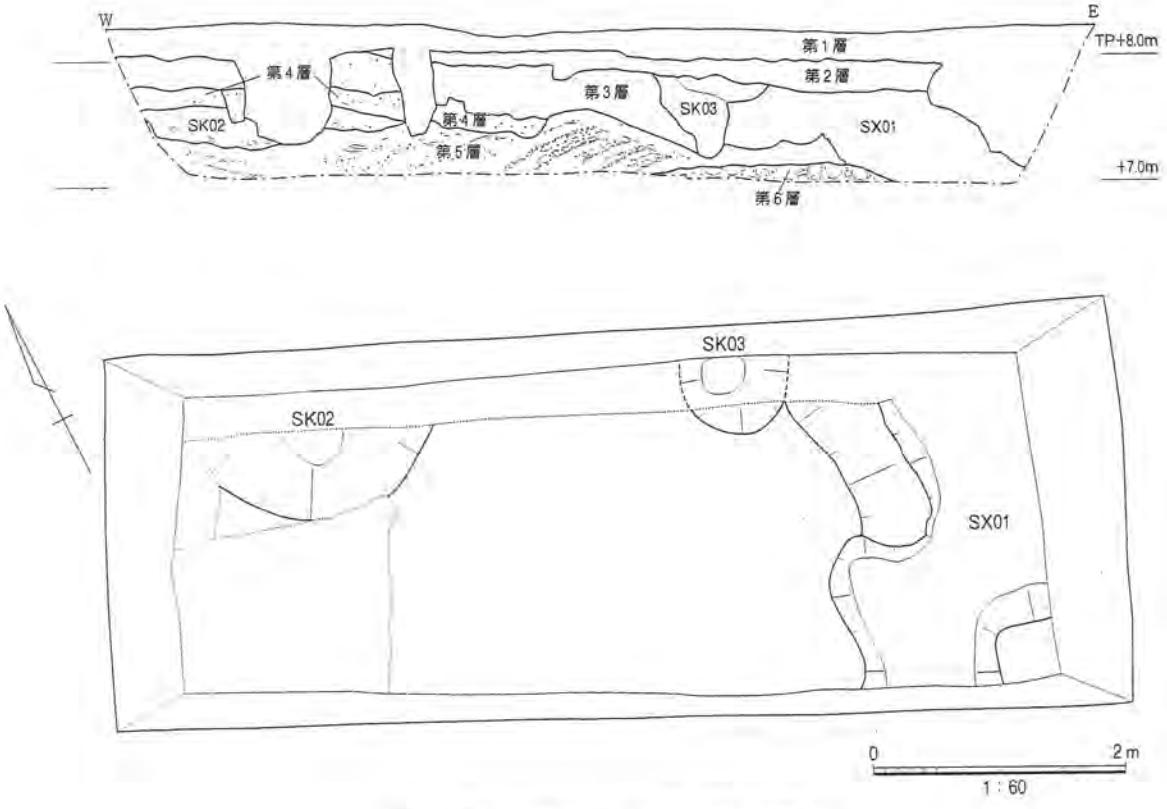


図４　遺構平面図および北壁地層断面図

路NR6001が確認されており、その流路堆積層の上面はTP＋７ｍ前後であるが、本調査の第５層上面の標高もTP+7.5mとそれに近い。また、第６層の盛土はこの時期の河川に伴う土木事業の所産かもしれない。

調査区東端の第４層上面では第３層が厚く堆積する落込みSX01を、西端の第５層上面でSK02を検出した。また、第３層上面でSK03を検出した。

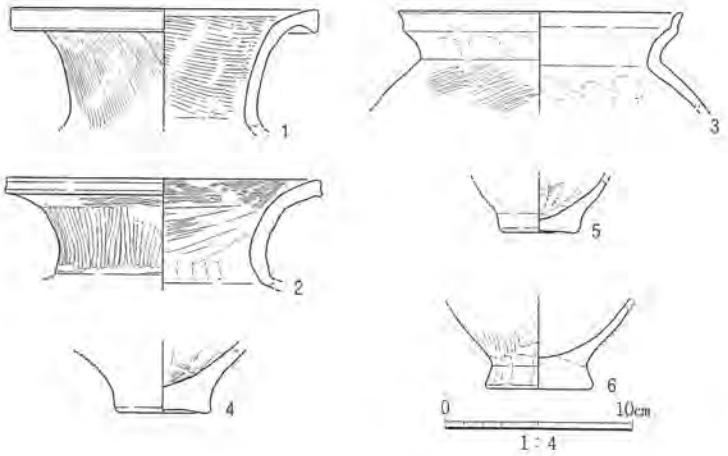


図５　第５層出土遺物実測図

SX01は第４層上面が西から東に傾斜していき、東端で段状に落込んだ不整形の落込みである。肥前磁器染付碗、堺擂鉢、土師器焙烙など18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土した。

SK02は調査区西端の北壁際で検出された土壙で、直径２ｍ以上の円形を呈すると推定される。深さは0.3mと浅く、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで少量の焼土を含む。肥前磁器染付碗や巴文の軒桟瓦など18世紀末頃の遺物が少量出土した。

SK03は調査区中央部の北壁際の第３層上面からの遺構である。直径0.9mの円形を呈し、深さは0.6mである。埋土は上部がオリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂～細礫質シルトで、下部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

２）まとめ

今回の調査では、古代以前の遺物を含む流路痕跡が確認され、この地点が古代平野川の流路上に位置している可能性が高いことが判明した。出土遺物に弥生時代後期の遺物が多いことから、上流域にこの時期の集落が存在していることが推察される。今回の調査ではこの第５層の堆積以後、遺構は18世紀末以降のものしか認められなかった。

しかし、古代平野川の河川堆積による微高地上に古代・中世の遺構が立地していた可能性は否定できず、今後の周辺での発掘調査に期待したい。

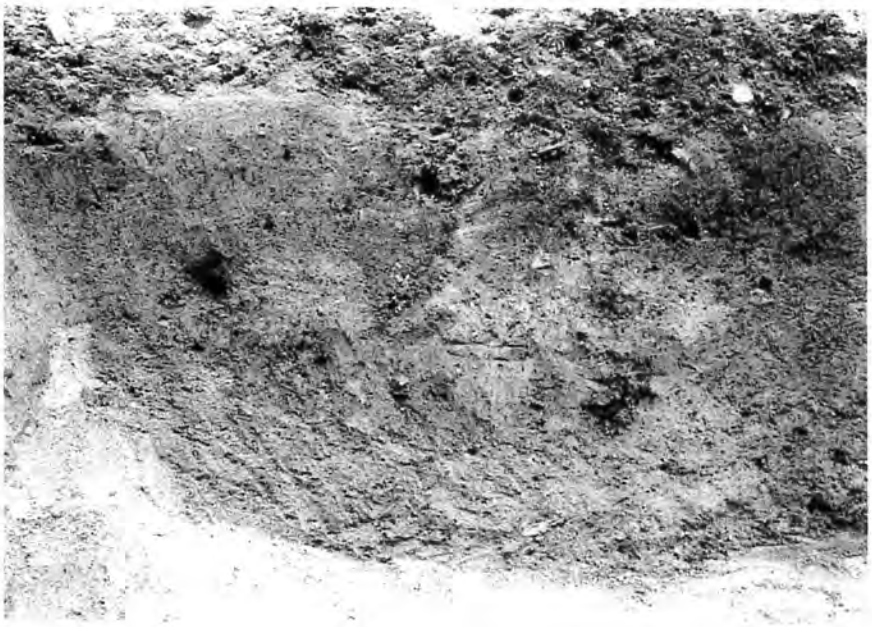
引用・参考文献

大阪府教育委員会・大阪文化財センター1983、『亀井』

第５層上面全景
（東から）

北壁地層断面
（中央部）

北壁地層断面
（西部）



平野区加美鞍作二丁目における建設工事に伴う
鞍作廃寺発掘調査(KT10－1)報告書

調 査 個 所　大阪市平野区加美鞍作２丁目14－13の一部
調 査 面 積　24㎡
調 査 期 間　平成23年１月17日～１月20日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、赤松佳奈

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、古代の寺院跡と推定される鞍作廃寺の西南端に位置している(図1)。推定地の東端で行われた発掘調査(KM89-13次)では、層厚1mに及ぶ厚い河成層の上面に中世～近世の遺物を含む南北方向の溝や土壙などが検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]。また、本調査に先立って行われた大阪市教育委員会の試掘調査では、現地表面下約0.1m以深で古代～中世の遺物包含層や遺構面が確認された。このため、遺構・遺物の分布状況を明らかにし、古代以降の寺院との関連をはじめとして、この地域の歴史的変遷を復元する目的で本調査を実施した。

東西8m南北3mの調査区を設定し(図2)、2011年1月17日から調査を開始した。重機による掘削は後述の第0層のみとし、以下は人力により掘削した。適宜、遺構検出、実測・写真撮影などの記録作業を行いながら調査を進めた。第4層以下については水成層であったため部分的に下位層の確認を行い、1月20日に埋戻しを含む現地でのすべての調査を完了した。

本報告で使った水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+○mとし、方位は座標北を基準とする。

2)調査の結果

i)層序

本調査では現地表以下2mまでの地層を観察した(図3・4)。

第0層：コンクリートを含む現代の整地層で、層厚は20～30cmである。

第1層：第2・3層に由来する極細粒砂の偽礫およびシルトを含む、にぶい黄褐色中粒砂～中礫からなる盛土層で、上部はやや生物擾乱を受けている。層厚は20～30cmである。本調査区からは近世の

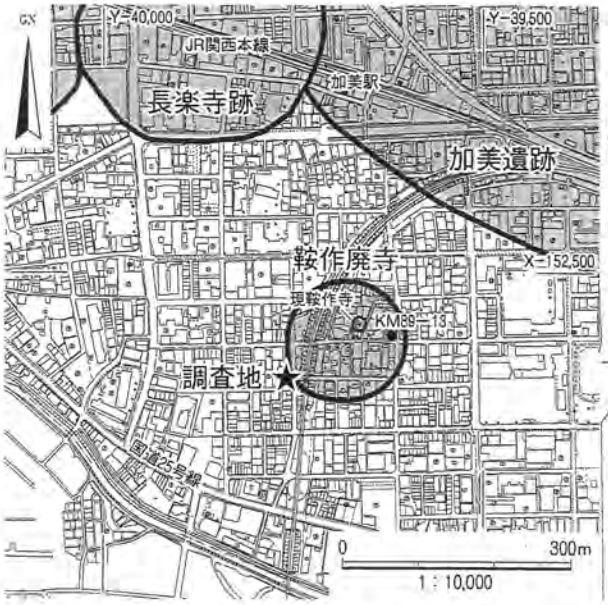


図1　調査位置図

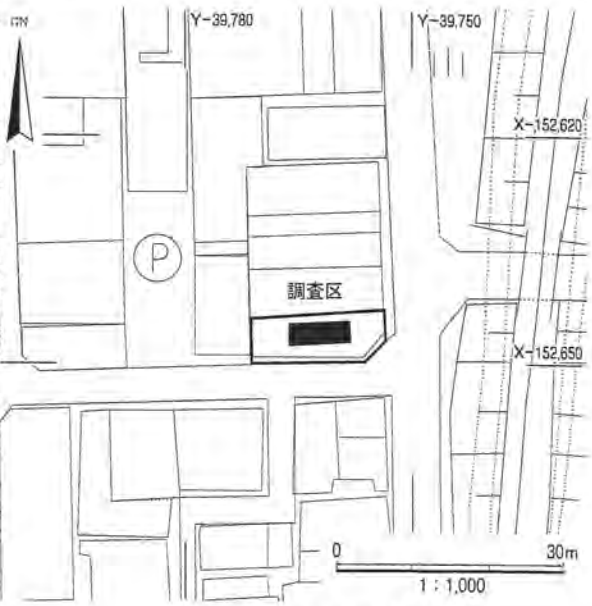


図2　調査区配置図

遺物が出土しないことから、第０層と第１層の間に本来あった層および本層上部は削平されている可能性が高い。

第２層：オリーブ褐色の粗粒砂～中礫からなる層厚約20cmの水成層で、酸化鉄の斑紋が認められる。

第３層：上部は褐色の極細粒砂～シルトからなり、下部は粗粒砂～中礫からなる、層厚10～20cmの河成層で、踏込みなどで少し乱れている。

第４層：4a・4b層に細分される。第4a層はオリーブ褐色極細粒砂～シルトからなる河成層で、層厚は約40cmである。第4b層はラミナが明瞭な浅黄色極細粒～中粒砂からなる河成層で層厚約60cmである。第4b層以下は部分的に掘削して記録した。

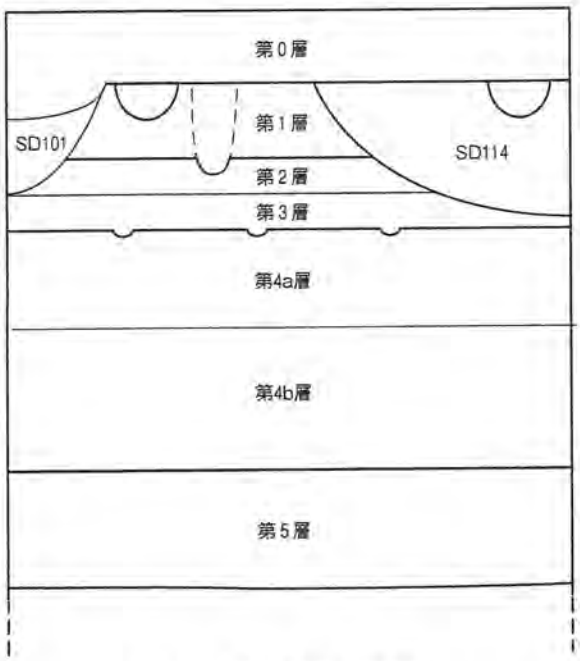


図３　地層と遺構の関係図

第５層：灰オリーブ色シルト質粘土からなる層厚約40cmの湿地の堆積層である。

ii）遺構と遺物

本調査区では第３層上面まで平面的に遺構の有無を確認しながら掘り下げたが、第２層以下は水成層であり、人為的な痕跡は確認できなかった。しかし、第２層および第２層を母材とする第１層からは、土師器の杯１、壺２、須恵器の杯蓋３、杯４などの奈良時代前半と考えられる遺物が出土している。２は薬壺形の壺で表面はかなり磨滅しているが外面にヘラミガキが観察される。

いずれも器表面が磨滅しており流されてきたものであるが、遺物は細粒な堆積物の中に含まれており、この時期には当該地が少し安定し始めてきたことが推測される。

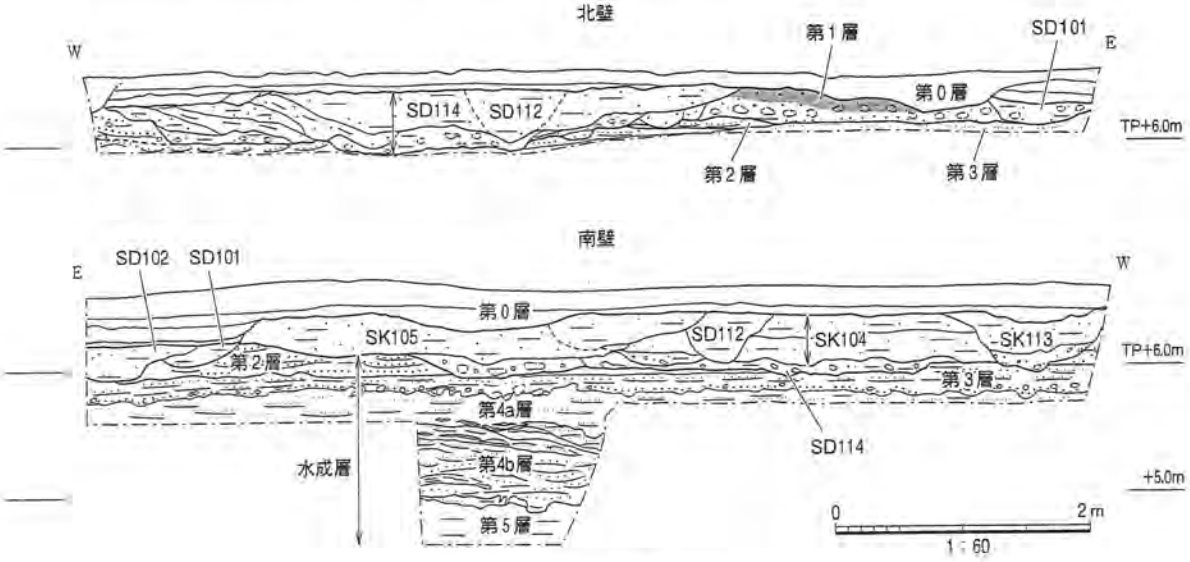


図４　北壁・南壁断面図

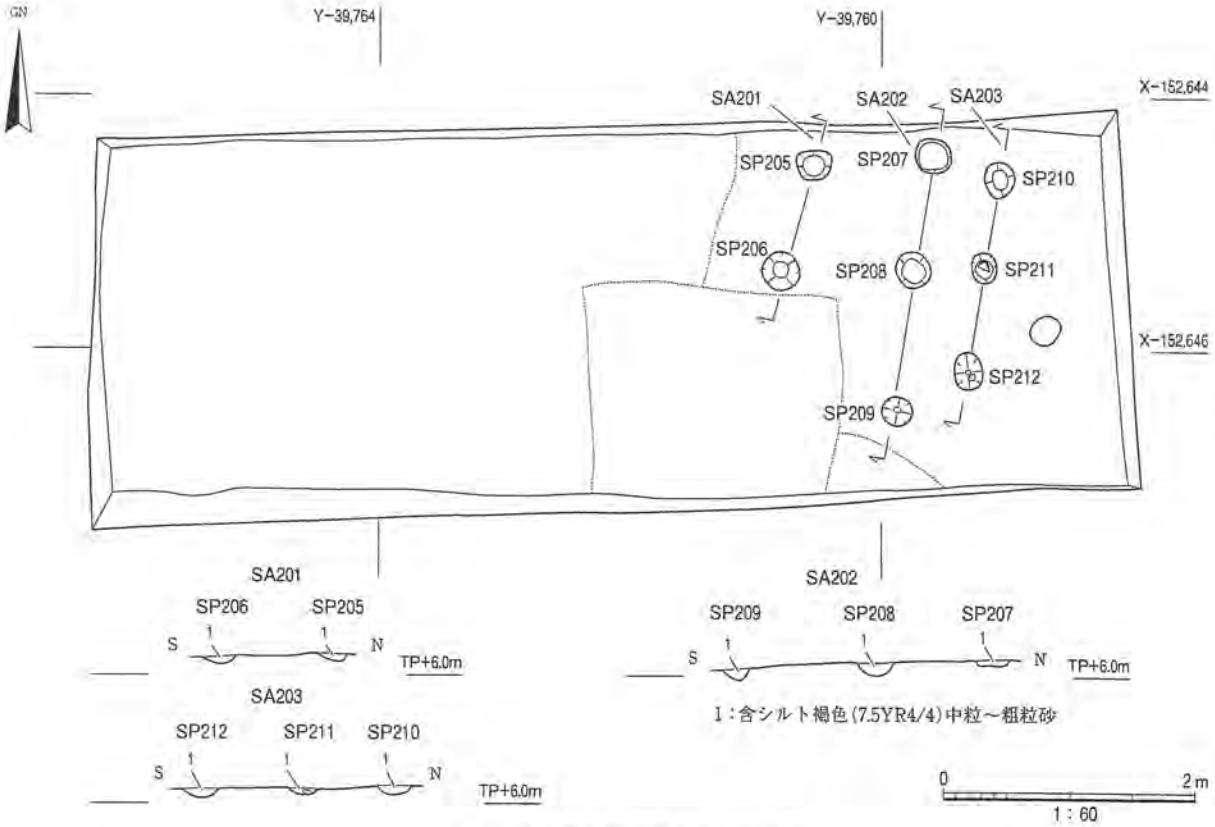


図５　第２層上面遺構平面・断面図

以下に各面で検出した遺構について報告する。

a. 第２層上面の遺構

第２層上面で柱列を検出した。柱列は第１層上面および同層中の任意面を精査した段階では、本層がやや生物擾乱を受けた部分が残る砂・礫層であったため検出できなかった。ただし、遺構のレベルと深度、第２層が水成層であること、調査区内の第１層が一連の人為的な堆積層であることを考えたとき、柱列は本来第１層上面に属する可能性がある。

柱列SA201～203

検出当初は掘立柱建物として考えていたが、南北方向の柱間が0.7～0.9mと狭く、地形に沿っているため柱列とした。深さは0.1m弱しか残っておらず、柱痕跡は確認できなかった。埋土はいずれもシルトを含む褐色中粒～粗粒砂であった。

SA201(SP205～206)　柱間約0.8m　N15° E方向の柱列である。柱穴の直径は約0.3mであった。

SA202(SP207～209)　柱間約0.9m　南北２間を検出した。N10° E方向を向いている。柱穴の直径は0.2～0.3mである。

SA203(SP210～212)　柱間0.7～0.8m　N10° E方向を向いている。柱穴の直径は0.2～0.3mである。SP211とSP212から瓦片５・６が出土した。SP212出土の６は長さ約9.5cm程度の破片であるため断定できないが、SP211の瓦５は柱穴の底に凹面を上に向けて据えられており、礎盤として転用された可能性が高い。

瓦５　厚さ３～４cmで凹面には離れ砂と指押さえによる成形痕が残る粗製の瓦である。平瓦と考え

ている。２次的な被熱を受けており、凹面凸面ともに炭化物が0.5㎜厚で付着していた。破断面も被熱している。

瓦６　厚さ2.4㎝で凹面には離れ砂が付着している。２次的な被熱を受けており、凹面凸面ともに炭化物が0.5㎜厚で付着していた。

b. 第１層上面の遺構

溝・土壙・掘立柱建物を検出した。おもな遺構の時期は13世紀である。遺構が重複しているため図面は後述のSD114と他の遺構を分けて報告する。なお、本調査区からは近世の遺構・遺物が出土しないため、本来存在した地層上部は削平されている可能性が高い。

SD114　調査区の西半を占める幅5.1m、残存していた深さは約0.5mの南北方向の溝である。遺構の南端の大部分は後世の土壙に切られていたが、西壁に続いていくため溝とした。ただし、機能時堆積層は見られなかった。下部が砂質のため加工時形成層との見分けがつかなかった可能性も考えられる。埋土は褐色シルト質中粒砂で、下部には加工時形成層と考えられるオリーブ褐色シルト含む細粒～中粒砂を確認した。埋土は、本調査区内にはほかに類似した岩相が見られないことから搬入土の可能性がある。加工時形成層の上面で鋤溝状の痕跡を確認したが、耕作に伴うものかは不明である。埋土には土師器皿７・８、瓦器椀９・10・11、三足羽釜12など13世紀前半～中頃の土器が含まれている。遺構埋土の上面から、それほど時期差の無い土壙が掘り込まれており、溝は13世紀代に埋め立てられた可能性が考えられる。ただし遺構が掘削された時期を示す遺物は出土していない。

瓦器椀９は内面の口縁端部付近までヘラミガキが観察できる。10・11は９よりもミガキが粗雑であるが見込みには平行線状暗文が施されている。外面のヘラミガキはいずれにも見られなかった。

東端で南北方向の溝SD101・102を検出した。ともに上半部を現代の攪乱に壊されているが、遺存していた埋土下半からは中世の遺物のみ出土する。

SD101　SD102に東肩を切られている。残存幅0.6m、深さ0.4mであった。埋土は暗褐色のシルト質中粒砂で下層約20㎝のみ残っていた。東播系須恵器の鉢13ほか、細片のため図化できなかったが瓦器など13世紀の中頃の遺物が出土している。

SD102　幅0.9m以上、深さ0.5m以上の溝である。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で層厚30㎝残っていた。SD101の位置をほぼ踏襲して掘り直された可能性がある。遺物は瓦器などが出土しているが、ごく細片ながら瀬戸美濃焼が含まれていたため中世後期まで存続していた可能性がある。

SD112　幅0.7m、深さ0.4mの南北方向の溝である。埋土は暗褐色シルト質中粒砂である。

SK103　南北1.3m、深さ0.2mの土壙で、埋土はにぶい黄褐色のシルト質粗粒砂である。細片のため図化しなかったが、13世紀後半～末の瓦器、土師器皿などを含んでいた。

SK104　東西3.7m以上、深さ0.4mの土壙である。埋土は大きく２層にわかれ、上部は褐色シルト含む中粒砂、下部は褐色シルト質中粒砂であった。中国産白磁碗14のほか、細片のため図化しなかったが瓦器などが含まれている。14は口縁部が玉縁状になっており外面の釉薬は上半までしか掛けられていない。横田賢次郎・森田勉氏による分類のⅣ類である[横田・森田1978]。遺構の時期は共伴している瓦器などから13世紀前半～中頃と考える。

SK105　深さ0.3mの土壙で、SD101に東肩を、試掘壙に西肩を切られている。埋土は暗褐色シルト質粗粒砂である。土師質羽釜15や見込みに暗文があり高台が台形の瓦器16など13世紀前半～中頃の遺物が出土しているほか、12世紀代に遡る瓦器17が出土した。17は磨滅と剥離のためヘラミガキなどの調整が観察できないが、高い高台がつき底部外面まで丁寧につくられている。

SK106　南北0.5m東西0.9mの土壙である。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂～中礫で、土師器

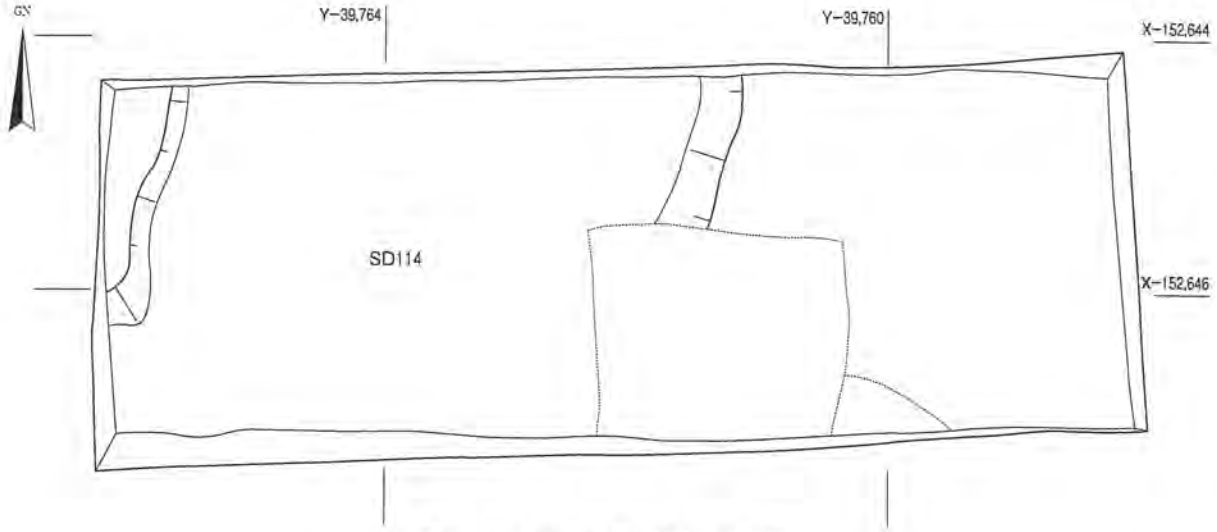


図6　第1層上面遺構SD114平面図

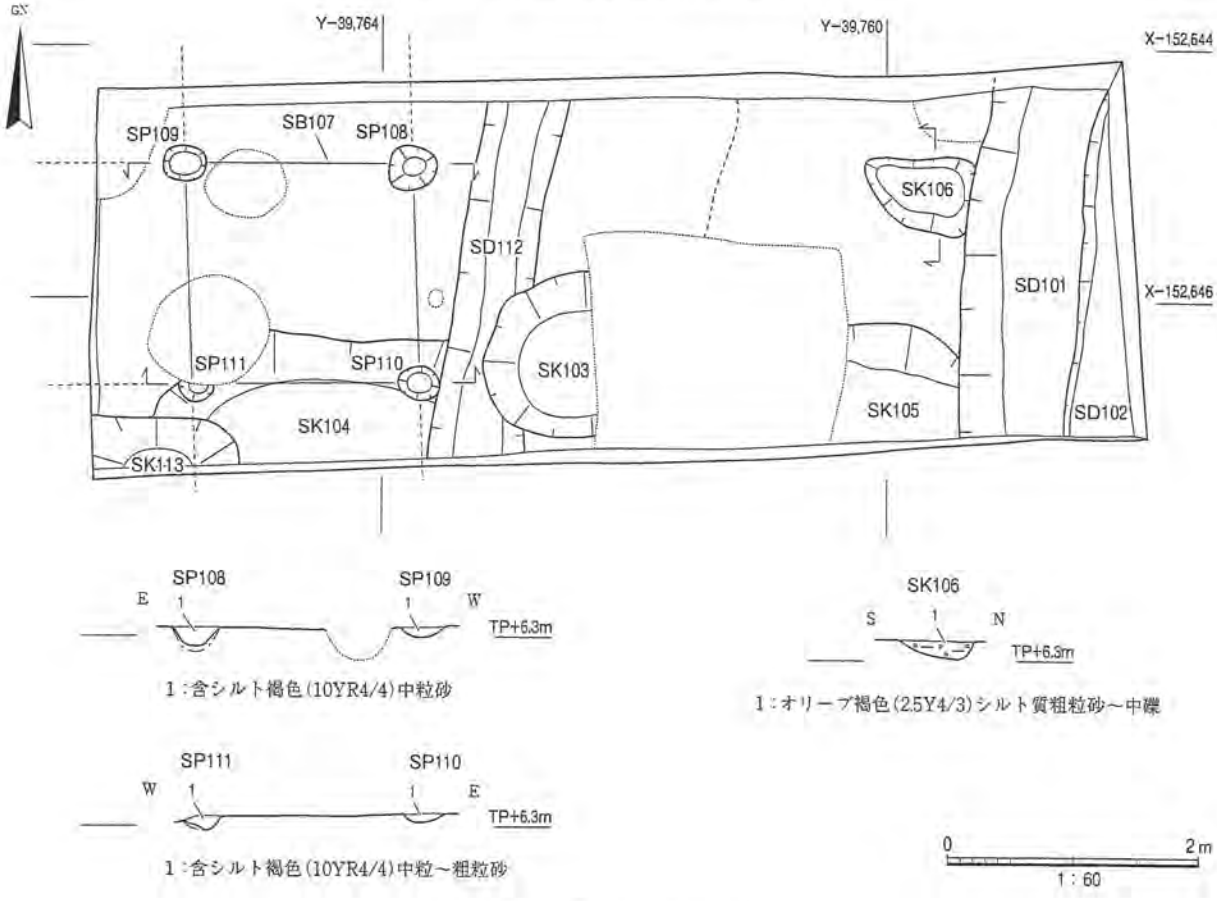


図7　第1層上面遺構平・断面図

皿18、見込みに格子状暗文のある瓦器椀19などが含まれていた。

SB107(SP108～111)　調査区内では東西１間、南北１間を検出した。東以外の方向に延びる可能性が高い。柱間は東西約1.8m、南北約1.8mでほぼ正方位に沿って建てられている。柱穴の直径は0.2～0.3m、深さは約0.2mであった。柱痕跡は確認できなかった。詳細な時期のわかる遺物は出土していないがSP108から焼締め陶器の細片が出土している。

第１層上面では東西８mの調査区の中で計４条の南北溝を検出した。特に、幅が広いSD114や、ほぼ同じ位置を踏襲するSD101・102は、調査地が遺跡の推定範囲西南端に位置していることから、区

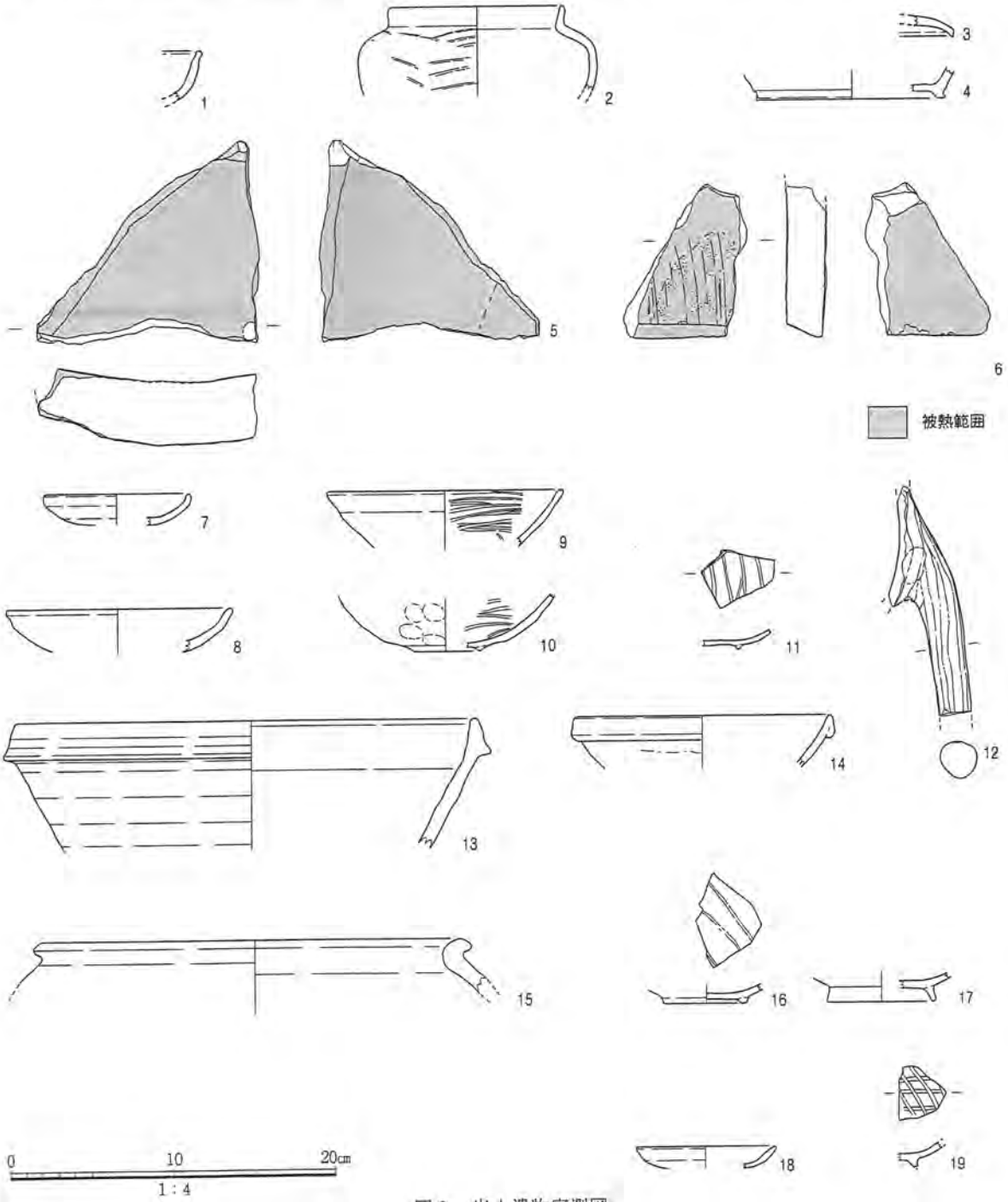


図８　出土遺物実測図

第２層(１～３)、第１層(４)、SP211(５)、SP212(６)、SD114(７～12)、SD101(13)、SK104(14)、SK105(15～17)、SK106(18・19)

画溝の可能性が考えられる。また推定範囲の東端を調査したKM89－13次調査では、本調査の第２層以下に対比される厚い水成層（KM89－13次調査第３層）の上面で、中世～近世の遺物を含む南北方向のSD303を検出している。SD303は第３層上面から切り込まれるとされているが、近世の遺物が含まれることから掘込み面は上位層にあがる可能性がある。この調査地は近代の地形図によると南鞍作村東端の条里境付近に位置しており（図９）、調査区の東端で検出されたSD303も区画溝の可能性がある。

３）まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の遺構を確認することができた。地層の状況を見ると、古くは流路および洪水の影響をうけるような低地であった本調査区も、奈良時代前半には、岩相や遺物の堆積状況から恒常的に強い水流が来るような環境ではなくなったことが推定され、踏込みが見られるなど安定の兆しを見せ始めている。そして最終的に鎌倉時代以前の洪水によって土地が高くなり、柱列や南北方向の溝がつくられ、集落域となったことがわかった。

本調査区は鞍作廃寺推定地の西南端にあたり、何らかの区画が推定されるこの場所が、古代において低地であったことは、今後鞍作廃寺の詳細な範囲や立地条件を考える上で手がかりとなるだろう。

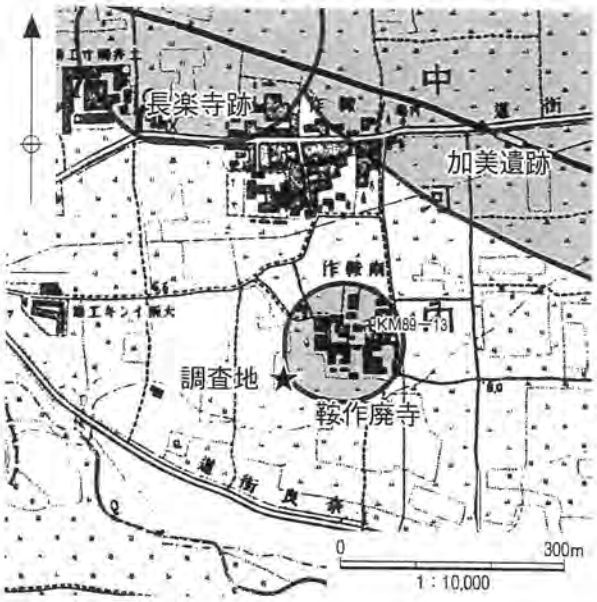


図９　近代の調査地周辺の地形図と調査位置図（大日本帝国陸地測量部『１万分の１地形図』（1923）に一部加筆）

また鎌倉時代には、氾濫堆積層の上に区画の可能性がある南北溝や掘立柱建物が建てられた。特に南北方向の溝は区画に伴うものの可能性があり、今後周辺の調査が進めばKM89－13次調査の成果とともに鞍作廃寺の変遷を考える上で重要な資料となるだろう。とはいえ、鞍作廃寺推定範囲内はまだ遺跡の調査がほとんど行われていない。今後推定地の中心部や、周辺部で調査が進めば、鞍作廃寺に関する具体的な状況や環境が明らかになるものと思われる。

参考文献

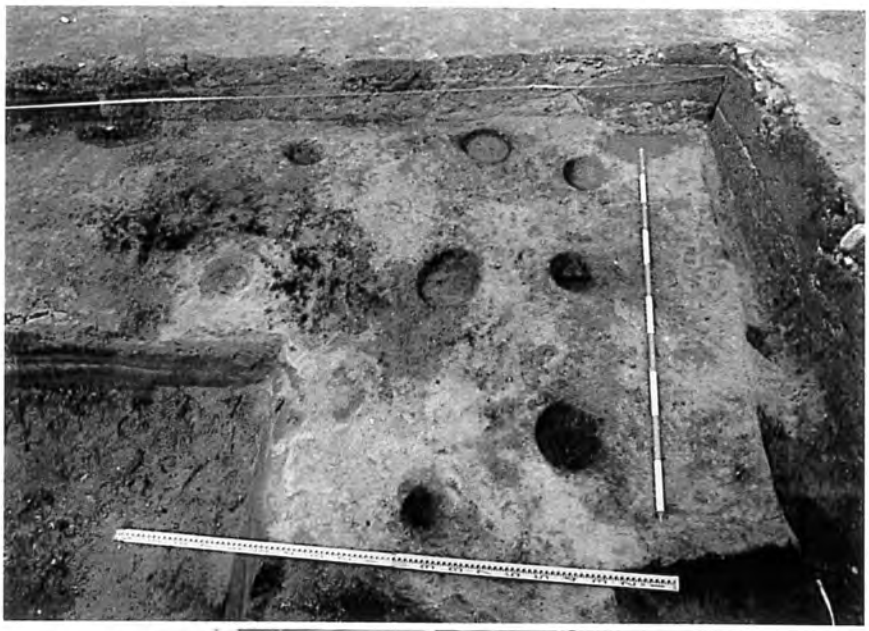
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991「菅生邸新築工事に伴う加美遺跡発掘調査（KM89－１）略報」：『平成元年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」：『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館、pp.１－26

南壁下層確認トレンチ断面
（北から）

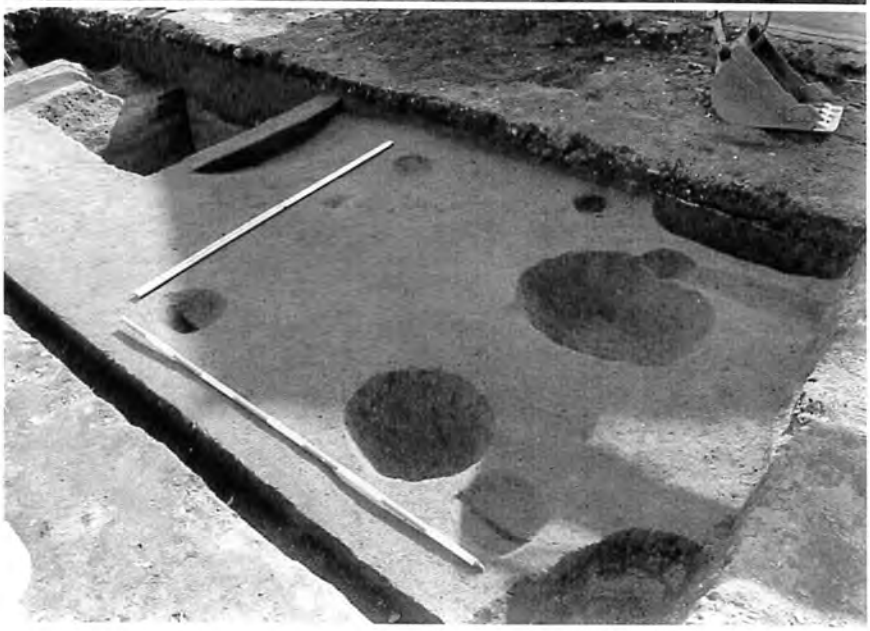
南壁地層断面（北西から）

SA201～203
（北から）



SD114
（西から）

SB107
（北西から）



平成22年度　大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日　平成24年3月31日

発　行　大阪市教育委員会
　　㈶大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編　集　大阪市教育委員会文化財保護担当
　　（大阪市北区中之島1-3-20）

印　刷　株式会社 京阪工技社